
PAST DESIRE -head-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P A S T D E S I R E - h e a d -

【Nコード】

N 6 3 2 4 C

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

とうとう戦争が始まった。ねえちゃんとアレイさんは戦地に赴いて、未熟な自分は王都で留守番・・・待っていて、すぐに強くなつて追いかけるから！（LAST DANCE - head - 続編）

．．．はじまり．．．（前書き）

この物語は連作です。

【LOST COIN - head】 [de.syo.setu.com/n3660c/](http://nco
de.syo.setu.com/n3660c/)
【LOST COIN - tail】 [de.syo.setu.com/n3665c/](http://nco
de.syo.setu.com/n3665c/)
【LAST DANCE - head】 [ode.syo.setu.com/n4082c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n4082c/)
【LAST DANCE - tail】 [ode.syo.setu.com/n4617c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n4617c/)
【PAST DESIRE - head】 （本作）
【PAST DESIRE - tail】 [ode.syo.setu.com/n7899c/](http://nc
ode.syo.setu.com/n7899c/)
【WORST CRISIS - head】 [ode.syo.setu.com/n0921d/](http://nc
ode.syo.setu.com/n0921d/)
【WORST CRISIS - tail】 [ode.syo.setu.com/n0973d/](http://nc
ode.syo.setu.com/n0973d/)

順にお楽しみください。

・・・はじまり・・・

ディアブル大陸の西岸を支配するグリモワール王国は穏やかな気候と豊かな国土に恵まれ、およそ450年もの間安定を保ってきた。その大きな支えとなったのがレメゲトンと呼ばれる王国付きの天文学者たちだ。

初代グリモワール国王ユダ「ダビデ」グリモワールは稀代の天文学者ゲーティア「グリフィス」と共に、72の悪魔を冥界から召還し、悪魔それぞれと契約した証に全部で72のコインを作ってレメゲトンにそれぞれ与えた。

レメゲトンたちは悪魔の強大な力を使役してグリモワール王国に反映の時代をもたらした。

しかし、何百年もの時は流れ、王家が所有するコインの数はいつしか減っていた。レメゲトンの数も今ではわずかに6名、所有するコインは23。

それは長く領土拡大の機会を狙っていたセフィロト国にとって好機といえた。

グリモワール国建国から466年目の夏、セフィロト国はグリモワール国に対して宣戦布告した。

これは短く、しかし激しい戦争の始まりだった。

その日は朝から緊迫した空気が屋敷内に漂っていた。理由は分かっている。

今日到着するというセフィロト国の大使のせいだ。

もう何年も緊張状態にあった両国の関係は、つい先日セフィラの王都乱入事件のあと最悪の事態を迎えた。

これは後から聞いた話だが、セフィラの王都侵入についてセフィロト国のネブカドネツアル王が言いがかりだと蹴ったらしい。これはセフィロト国を貶める行為だのなんだの、またレメゲトンがセフィラに対して攻撃を加えたの何だの様々によく分からない理由をつけて強引に開戦へと持ち込んだのだという。

セフィロトとの国境に駐留する炎妖玉騎士団が領権侵害したなどという虚言まで使うのだから、放っておいてもいつかは戦争になっ
てはいたと思う。

それでも実際にセフィラと交戦した自分たちからすれば先に手を出してきたのは敵の方だし、それも自分たちの方はといえばねえちゃんを取り戻すための正当な戦闘だったのだからその言い分はおかしいと言えた。

それでも一介のレメゲトンが言っても国際的な場では聞き入れてもらえない、ということからねえちゃんが諭してくれた。

まだ太陽が東にある間に自分はねえちゃんと二人、馬車に乗っていた。ついこの間グリモワール国王子の誕生パーティで着たばかりの漆黒のドレスに身を包んでジュデツカ城に向かう。

セフィロト国の大使がセフィラであるという情報が入っていたからだ。

王国付きの天文学者レメゲトンに対し、セフィラは天使を召還するセフィロト国の神官だ。セフィラに対抗できるのは悪魔を召還して使役するレメゲトンだけだった。

その大使は同時に開戦宣言を行うだろう。

そうすればゼデキヤ王が必死で回避してきた戦争に突入してしまう。

ねえちゃんも口数は少なく、自分もそれにつられて自然と黙り込んだ。

馬車は大きな車輪の音を立てながらパラディソ・ゲートを潜り抜けた。

到着すると、今まで一回しか入ったことのないあの広い謁見の間にはすでにじい様と眼鏡のレメゲトンのメイザースさん、ベアトリ―チェさん、それに漆黒星騎士団長のクラウドさんがそろっていた。他にも見た事があるようないないようなヒトが何人も並んでいた。きつとこの間のサンのパーティで挨拶してくれたんだらうけど、ぜんぜん覚えていなかった。

その場の空気はとても重く、口を開ける雰囲気ではなかった。ねえちゃんに従って、じい様とメイザースさん、ベアトリ―チェさんに並ぶことにした。

階段の真下には黒い甲冑に身を包んだクラウドさんと白い甲冑を身につけた知らないヒトが控え、壇上には王様とサンとおそらく王妃様と思われる女性が並んでいた。

漆黒の甲冑に身を包んだクラウドさんはとても真剣な顔をしていた。その横顔はとても凜々しくて漆黒星騎士団長の名に相応しかった。その反対側で槍を持って佇むヒトは白い髭を蓄えていたけれどクラウドさんの倍くらいありそうな立派な体躯をしていた。頼に大きな傷があるのが少し怖かったけれど、青い目に灯る光はとても優しそだった。

きつとこのヒトがねえちゃんが所属する輝光石騎士団の団長さんなんだらう。ダイヤモンド

太陽の光が差し込んで王様や王妃様の姿は見えない。

サンの姿を見ようと目を細めたけれど、逆光が眩しくて見えなかった。

「遅くなりました。アレイスター・クロウリー、ただいま参上しました。」

そこへアレイさんが颯爽と駆け込んできた。

腰まである長い黒髪が風に靡いた。ねえちゃんの隣について軽く

息を整えている。ずいぶん急いでここまで来たらしい。

「クロウリー伯爵、レメゲトンならそれなりの節度を持って行動していただきたい。今は国の一大事なのでから。」

冷たい声が向かいの列から響いた。

見ると綺麗に髪を撫で付けた壮年の男性がこちらを向いていた。

アレイさんとは違った感じに目つきが鋭くて、厳格そうなヒトだった。着ている服にはところどころ金糸が織り込んである。

微かな記憶をつつきだして、ライアット公爵という名前を引っ張り出してきた。

「申し訳ございません。」

アレイさんはそのヒトに向かってすぐに頭を下げ、謝罪した。

ねえちゃんは今珍しく頬を引きつらせている。あのヒトがあんまり好きではないらしい。

あのヒトが誰で、どんなヒトなのかをこっそりとねえちゃんに聞こうとした時、謁見の間の正面扉が開いた。

息を呑んで見守っていると、衛兵さんに続いてセフィロト国の大使が3人入ってきた。

先頭を歩く男性は真っ白な神官服に身を包んでいた。袖口を青のラインが結んでいて、金のボタンが二列に連なっている。白いズボンが眩しく、さらには細いフレームの眼鏡をかけていた。ウェーブのかかった淡い茶の髪はふわりと風に浮かんだ。

その右後ろに見たことのない女性がいた。こちらは騎士の様相を呈していて、金の紋様が入った純白の鎧と銀の脛当てが目惹いた。赤茶色のふわふわした髪を高い位置で縛っている。腰に手を当てて自信たっぷりに周囲を見渡している様子から気の強い性格が見て取れた。

そして、左後ろに控えていたのは……嫌と言うほどに見覚えのある手品師の姿だった。
マジン

「ゲブラ」

小さな声でポツリと呟くと、ゲブラは気づいてにこりと微笑んだ。顔が強張るのを止められなかった。

3人はレメゲトンや他の貴族たちが見守る中、颯爽とした足取りで王様の壇の前まで進み出た。

それに従って王様たちにいる壇を守るようにクラウドさんと言い甲冑の壮年の騎士が階段の前に立ちほだかり、持っている槍を交差させた。

その手前で立ち止まって3人は跪いた。

「遠路はるばるご苦労、セフィロト国の大使よ。長い挨拶はいらぬ、本題はもう分かっておる」

すぐく上のほうから王様の声が振ってきた。

すると先頭の白い神官服のヒトが一枚の紙を取り出した。

茶色っぽいその紙は丸めて何か印で止めてあった。おそらくあれがセフィロト国の象徴シンボルなのだろう。

神官服のヒトは笑顔でその紙筒を差し出した。

「セフィロト国、ネブカドネツアル王より親書をお預かりしております」

その笑みは狡猾で悪意に満ちており、思わず一步退きそうになるほどだった。

こうしてこの紙切れたった一枚で、グリモワール王国とセフィロト国との間に戦争が勃発した。

季節はちょうど夏を迎えようとしていた。

SECT・1 できること できないこと

こうして宣戦布告がなされたわずか2日後、信じられないニュースが王都に飛び込んできた。

なんと、王国最強の炎妖玉騎士団ガーネットが守るカーバンクルが早々に落とされたというものだった。

「何ですって?!」

ねえちゃんは目を吊り上げた。

王様に呼び出されたいつもの書類に埋まった部屋にねえちゃんの声が高らかに響いた。

眼鏡のメイザースさんが静かに戦況を告げる。

「大使が書簡を届けた日の午後にはすでに攻撃が始まっていたようです。準備が不完全だった炎妖玉騎士団ガーネットは応戦したものの被害は甚大、残った兵を連れて団長であるバーディア卿が東の都トロメオに退いたそうです」

「宣戦布告をした瞬間に攻撃とは、してやられたな」

ゼデキヤ王も頭を抱えた。

同じく集まっていたじい様もアレいさんもベアトリーチェさんも暗い顔を隠そうとしなかった。

「……すぐトロメオに向かいます」

「頼む、クロウリー伯爵。それにファウスト女伯爵、すぐに出発してくれ」

「御意」

「おそらくセフィロト国も戦にセフィラを投入しているはずだ。普通の兵だけではいくらも持たんだろう」

ねえちゃんとアレいさんは真剣な顔で頷いた。

「アリギエリ女爵、国家医師団から数名選出し、物資を届ける一団と共に戦地へ向かってくれ。到着後市民退去の指揮を執れ。準備ができ次第、輝光石騎士団ダイヤモンドと現在トロメオから最も近い琥珀騎士団アンバーを

向かわせる。老師とメイザース卿は戦況と敵の戦略を調べ随時報告してくれ」

「はい」

「現場の総指揮はバーディア卿に一任してある。被害を最小限に食い止め、トロメオを最終点としてセフィロト国の侵入を防ぎ、防衛ラインをカーバンクルまで戻したい。まずはそれからだ。とにかく国土を防衛する。人々への被害を増やすな」

「承知しました」

自分は一人呆然としていた。

自体が飲み込めない。一体今何が起きているんだろう。カーバンクルが陥落した？トロメオが戦場？被害を最小限に？

おれは いったいどうしたらいい？

「すぐ行動に移ってくれ」

「はっ！」

短い返事をしてみなそれぞれに散った。

自分は動く機会を失って王様の前に一人佇んだ。

「ラック、君はまだレメゲトンになって日が浅い。記憶喪失の話も聞いている」

ゼデキヤ王は帝王の光を灯した瞳で自分を射抜いた。

「だから、まだ戦場に出るのは早い。まずは漆黒星騎士団で経験を積んで欲しい。フォーチュン騎士団長に話を通してある」

「クラウドさんのこと？」

「そうだ。君はレメゲトンだ。アガレスとフラウロスを扱うことができる。それはグリモワール王国にとって大きな戦力だ」

王様はラーズの名を出さなかった。

「だが、戦闘に関しても実生活に関しても経験が浅い。それこそ、記憶のある3年前に君の人生が始まったようなものだから」

「うん、そうだね。おれにできることはすごく少ないよ。この間ねえちゃんを探しに行つてすぐく分かったよ」

自分の無力さが。無知さが。

前回はアレイさんがいてくれたからよかったけれど、一人にされると何も出来ないということを身にしみて感じ取った。

「貴重なレメゲトンが無闇に戦場に放り込むことは出来ない。君はフォーチュン侯爵の元へ向かいなさい」

「ねえちゃんとアレイさんは？」

「すぐに戦地へ向かう」

「っ！」

言葉にならない痛みが胸を貫いた。頭の中で轟音が鳴り響くような衝撃。

戦争は、国同士の殺し合いなんだって誰かが言った。

その場所にねえちゃんとアレイさんが行ってしまうんだ。

「ねえ、王様……おれも行きたいよ……」

「それはできない。君にはまだ早い」

「でも、おれの知らない遠くで二人が危険な目に遭ってるなんて、耐えられないよ……！」

ねえちゃんがいなくなつた時、何を捨てても探しに行こうと思つた。

王様はそれを許してくれた。

でも、今回は一緒に行けないのだという。

「おれが弱いから？ おれがまだ何も知らない子供だから……？」

「それがわかつているならすぐにフォーチュン侯爵の元へ向かいなさい。今ならインフェルノ・ゲートの外にある訓練所にいるはずだ」

「分かりました」

本当はすごくすごく嫌だった。

ねえちゃんだけでなくアレイさんまで行ってしまうなんて。

でも王様の黄金のオーラはそんな有無を言わせなかった。その代わりに王様はぽつりと一瞬悲しい表情を見せた。

「大切にしている者たちが危険な目に遭うのは私も辛い。だが、それを取り越えねばもっと多くの人が傷つくことになる。私はグリモ

ワールの民をみな平等に愛している」

愛している、と言った王様の表情に胸を締め付けられた。

目の前にいるのはただ、ヒトが傷つく事を厭う一人の男性の姿だった。

「もしよかったらラック、君の力も貸して欲しい。そのために自分の力を磨くんだ。もっと洗練された力で持つて大切な者たちを守つて欲しい。ファウスト女伯爵やクロウリー伯爵のように」

「うん、わかった」

とてもこの王様を好きになれそうな気がした。ねえちゃんやアレイさんがこの王様に従う理由が少しだけ分かる気もした。

だから、『一つだけ』守ろうと決めたねえちゃんのためじゃなく、自分のためでもなく、自分の大好きなこの世界を守るために強くなりたいと思ったんだ。

そのためだつた寂しいのだつてきつと我慢できるはずだ。

すぐにねえちゃんちに戻つて訓練所に行く準備をしよう。

足早に城内を歩いていると、ブロンドを靡かせたサンが後ろから駆けてきた。

「ラック！」

グリモワール国の皇太子は、自分に追いつくと並んで歩き出した。

「とうとう……戦争になつちやつたね」

「うん。実はまだよくわかんないんだけど。急に周りが慌しくなつてきたよ」

そう言つて笑つと、サンはすごく真剣な顔で言つた。

「ねえラック。この間言つたこと……僕はいつでも待つてるから。嫌になつたらいつでもいい、僕のところに来て。そうしたら僕は君を守つてあげられる」

サンが言つたのはレメゲトンをやめて王都にとどまり、戦場に出ない役職に就くことだった。

自分は既にそれを舞踏の夜に断っている。

「ごめんね、サン。おれ出来る限り強くなりたいんだ。ねえちゃんとアレイさんにはやく追いつきたいから。あ、戦いが好きなわけじゃないよ？　ただ、大切な人が危険な目に遭うのを見てるだけなのは嫌なんだ」

はつきりとそう言うと、サンはとても悲しそうな顔で笑った。

「僕も同じだよ？　ラックが危険な目に遭うのは嫌だ」

その表情にはっと胸を突かれた。

自分が思うだけじゃなくて、自分が思われているということ忘れてはいけないのだ。

「お願い、辛かったらいつでも帰ってきて。僕は待ってるから」

「……ありがとう、サン」

とても嬉しかった。自分を心配してくれた事が。

でも、もう心に決めていた。もっと強くなる。大切な人を自分の手で守れるように。そのためにいくらでも努力しよう、と。

ねえちゃんのお屋敷に戻ると、みな慌しく動いていた。

マリーばあやさんも総出で戦地へ発つ準備をしている。

忙しそうだったから誰にも声をかけられず、扉のところで呆然と立ち尽くしているとねえちゃんがやってきた。

ブロンドの髪はサンと一緒にだった。

でも、金の瞳は今まで見たことないくらいに悲しそうな色をしていた。

「……ねえちゃん」

「ごめんね、ラック。本当は傍にいていろんな事を教えてあげたかったのに、私は行かなくちゃいけないわ」

「うん、王様に聞いたよ。おれはクラウドさんのところに行く。もつともつというんなことを学んでくるよ」

「ラック……」

「でもね、すぐに強くなつてねえちゃんのところに行くから、待ってて！」

すごくがんばって笑った。

でも無理したのがばれてしまっているのか、ねえちゃんはすごく泣きそうな顔になってしまった。

そんな顔は見たくないからがんばって笑ったのに。

「辛くなったのならやめたっていいのよ？　きっとミュレク殿下があなたを守ってくださるわ。」

諭すように言ったねえちゃんの言葉に首を振った。

「おれは誰かに守って欲しいわけじゃないよ。自分が強くなつて大切な人を守りたいんだ。ねえちゃんが遠くで危険な目に遭わないように、肩を並べて戦いたいんだ」

言っているうちに悲しくなってきた。

でも、これから旅立つねえちゃんに不安を与えなくなかった。

契約に向かうアレイさんを見送ったときの気持ちにとてもよく似ていた。行かないで欲しい。でも、止められない。

「だからがんばる！　ねえちゃん、お願い」

ねえちゃんの胸に飛び込んでぎゅっとしがみついた。

そうしたら少し不安が消えてくれる気がした。

「死なないで」

口にしなないでおこうと思っていた言葉だったのに、転がるように口から滑り出た。

その瞬間に胸がきゅーっと締め付けられて、鼻の奥がツンとした。それでも必死に泣くのを我慢してねえちゃんを見上げて笑った。

「馬鹿ね」

ねえちゃんはそんな自分の頭を優しく撫でてくれた。

それはすごく嬉しいはずなのにたまらなく切なくて、また泣きそうになるのをこらえるのに必死だった。

何度も喉まで出かかった「行かないで」という言葉を胸の奥に封

印
し
た。

SECT・2 行かないで

それから幾許もしないうちに、大きな馬車がねえちゃんを迎えに
来た。

レメゲトンの正装に身を包んだアレイさんが馬車から降りてきた。
横では使用人のヒトたちがねえちゃんの荷物を積み込んでいた。
ねえちゃんはそっちに指示を出していて、ヨハンもそれを手伝って
いるようだった。

自分はその様子を二階の廊下の窓から見下ろしていた。

「……ねえちゃん」

最後に見送る時だけ下りよう。そうじゃないと、ねえちゃんの顔
を見たら今度こそ泣いてしまいかもしれない。

そう思っつてその場を離れようとする、とても聞きなれたバリト
ンの声がした。

「おい、くそガキ」

「……アレイさん」

正装のアレイさんはいつもより凛々しく見えた。

これから戦場に向かう姿はとても勇ましい、グリモワールを代表
するレメゲトンの威厳があった。

「世界の終わりみたいな顔しやがって」

「アレイさんも行っちゃうんだね」

「ガキの戯言を聞かなくていいかと思うと清々する」

アレイさんはまたイジワルなことを言う。

でもこの深いバリトンが聞けなくなると思うとすごく寂しくなっ
た。

だって何週間か前にアレイさんに会ってから、新しい世界に飛び
込んでからはずっと一緒にいてくれたんだから。

ねえちゃんもアレイさんもどっちが欠けてもおれの世界は成立し
ないんだ。

その二人が同時にいなくなるなんて……

「泣きそうな顔をするんじゃない。もう二度と会えないわけじゃないだろう?」

「そうだよ、そうだけどさ」

王様が言っていることもねえちゃんたちが行かなくちゃいけないって事も戦争のことも自分の力量不足も全部納得したはずだったのに、心はついてこなかった。

「行かないで」って言いそうになる。

でもそれだけは言っちゃいけない。すごく困らせることになるから。

王様の考えもアレイさんの義務も願いも全てを否定することになってしまふから。それだけは言っちゃいけない。

ぐつと我慢していると、アレイさんはぽんと頭に手を置いた。

「俺の前で我慢するな。見ちゃいけない」

「だって……だって……」

言っちゃだめだ。言っちゃだめだ。

アレイさんは屈むようにして紫の瞳で覗き込んだ。アシジスト紫水晶にはと

ても優しい光が灯っていた。

軽く唇の端が上がった。

これまで数えるほどしか見たことのない笑顔だった。

「ねえさんの前では言えなかったんだろう?」

アレイさんは反則だ。

そんな優しい顔されたら、我慢できなくなっちゃうじゃないか。

「うつ……だって……」

ぼろぼろと涙が零れ落ちてきた。

アレイさんの前で泣くのは二回目だ。一回目はラースに左腕を食べられた後だった。あの時のアレイさんはとても優しく大きく包み込んでくれたんだ。

「分かっているのにつ……おれが弱いから……一緒に行けな……」

紫色が滲んでいった。

拭っても拭っても涙は次から次へと流れ出てきた。

「でも、ほんとは、ほんとは……」

言っちゃだめだ。それだけは。

無理やり口を閉じて、下を向いた。

涙がぼたりと床に落ちた。

俯いたままアレイさんの胸元に額を預けた。涙は止まってくれなかった。

アレイさんは背に手を回してくれた。相変わらずその大きな手は温かくて優しく、もっともって泣いてしまった。

「顔、上げる」

無理だよ。

アレイさんのバカ。

胸元をぎゅっと掴んだ。額をますます強く押し付けて、絞り出すように言った。

「傍にいてくれるって言ったじゃん……」

あの舞踏の夜に。優しい瞳で見下ろして。

ずっと傍にいてやるって言ったのに。

「おれだって知らない場所でアレイさんが危険な目に遭うのなんてやだよ。すぐ助けられるように傍にいたいよ。おれに出来ることなんて…… すごく少ないけど」

だから今はもっと強くなるしかないんだ。

それはわかっていているんだけれど。

アレイさんが悲しそうな声で言った。

「約束を破るつもりはなかったんだ」

「知ってる。戦争だって…… 王様が…… この国を守って……」
でも。それでも。

「うそつき」

それは間違いじゃないけど、恐ろしくワガママな言葉だった。

アレイさんのせいじゃないのに。

見上げると、悲しげな紫の瞳が見下ろしていた。

もう我慢できなかった。

「行かないでよ、アレイさん……！」

言っちゃだめだって思ってたのに。ずっとずっと我慢してたのに。自分はいつからこんなにもワガママになってしまったんだろう。

紫の瞳が辛そうな色を映じた。

「すまない」

ポツリと呟いた言葉はめちゃくちゃに胸を締め付けた。

どうしようもなく切なくなつて、大声で泣き出したくなった。

「どうしても行かなければならないんだ」

滲んだ視界で紫色が近づいてくる。

額に軽く唇で触れた感触があつた。

少し驚いて目を開けると、今度は頬に一つキスをした。眠れない夜によくねえちゃんがそうしてくれたみたいに。

「俺はミュレク殿下のようにお前を安全な場所に匿う術など持たない。だから……待っている。お前が自分で俺と同じ位置に立てるようになるまで」

アレイさんはもう一度強く抱きしめてくれた。

足が地面から離れて、ふわりと浮いた。

「代わりにお前がいる王都を、この国を守ってやるから」

心地よいバリトンが響いている。

静かな鼓動が伝わってきて、温かな体温が触れて少しずつ心が落ち着いてくるのを感じた。

やっぱりここは世界で一番安心できる場所らしい。

満足するまでその安心を胸いっぱい吸い込んでから、さらさらの黒髪に頬を寄せながら小さく呟いた。

「ごめんね、アレイさん。ワガママ言っちゃったよ」

首に手を回したまま。

耳元で心地よいバリトンが響く。

「構わない。その方が……嬉しい」

「そうなの？」

なぜワガママを言った方がいいんだろうか。

きつと困るからと思ってねえちゃんには絶対言わないようにしてるのに。目の前で泣かないようにすごく我慢しているのに。

でもアレイさんが相手だとあんまりその我慢はうまくいかないんだ。

なぜなんだろう。

きつとその気持ちを突き詰めていけば自分がねえちゃんに抱く好きという感情と、アレイさんに対して抱く感情は別のものだって気づいたはずなのに、このときの自分はそんなこと考えようとも思わなかった。

紫の瞳に灯る優しい光の意味を知ろうともしてなかった。

だからアレイさんがイジワルな理由も、抱きしめてくれる理由も、たまに優しくなる理由だってぜんぜん分かったやいなかったんだ。ワガママを言うてくれた方が嬉しいって言うてくれることも理解できなかった。

自分がいろんなことに気がついたのはずっとずっと後のことで、その時にはすでに掛け替えのないものをいくつも失ってしまった後だったんだ。

SECT・3 幸せであること

いっぱい泣いたせいなのか、ねえちゃんを笑顔で見送る事が出来た。

アレイさんはねえちゃんにもものすごく睨まれていて、とても居づらそうにしていた。その視線は悪意というより嫉妬に近いものものうな気がした。

首を傾げつつもねえちゃんに微笑みかける。

「行つてらっしゃい、ねえちゃん」

ブラックルビー

「漆黒星騎士団ではいい子にしてるのよ？」

「うん、だいじょうぶだよ！」

自然に笑えた。もうだいじょうぶだ。

それを見てねえちゃんは少しだけ悲しそうな顔をした。

「もうあまり一緒にいられないかもしれないわね……寂しいわ」

「どうして？」

「何でもないわ。私の可愛いラック。元気でいるのよ？」

ねえちゃんは笑って額に一つキスをしてくれた。

「行ってくるわ」

「うん。待ってて、強くなってすぐに行くから！」

大きく手を振った。

馬車が小さくなっていく。見えなくなるまでずっと手を振り続けた。腕も肩も痛くなつたけどやめなかった。

最後に馬車が消えてしまつてから、もう一度涙が出そうになつたけれど、ぐっとこらえた。

泣かないぞ。強くなるんだ。

次にねえちゃんとアレイさんに会うまでに見違えるくらい強くなつて驚かせてやる！

すぐに自分の部屋に引っ込んでダンスをひっくり返した。漆黒星

ブラックレピー

騎士団と合流する準備をしなくてはいけない。

いま、気分が高揚しているうちにこの家を出なくては、またきつと不安になってしまう。

しかし王都に来てからやたらと服が増えてしまったせいではななかうまういかない。その様子を見かねたアイリスとリコリスが手伝ってくれた。

「このお服はどうなさいますか？」

「それはいいよ、置いていく。邪魔になるだけだ」

「こちらは？」

「そっちは持つてく、お気に入りだし」

ほとんど荷物がそろった頃、テーブルの花瓶に刺してある羽根のこを思い出した。純白のマルコシアスさんの羽根と、青みがかったクローセルさんの羽根だ。

「あ、そうだ。ねえ、アイリス。この間みたいにマルコシアスさんの羽根縫い付けてよ」

そう言うアイリスの顔が曇った。

「あ、あの、ラック様。実は……」

リコリスも困ったように見ている。相方に比べて少し大人しいアイリスは言いづらそうに言葉を紡いだ。

「その、マルコシアス様の羽根……悪魔の羽根が、その、私には少し毒気が強いらしく……」

「どうしたの？」

首を傾げると、代わりにリコリスが言った。

「この間羽根を縫いつけた後、アイリスは体調を崩してしまったのです。悪魔の羽根は普通の人にとってあまりよい影響を与えない物ですから」

「え、そうなの？」

「コイン自体も耐性のない者が触れていると精神が崩壊すると聞きます。私達のように一般の者にとって悪魔の気は毒に近いものなの

です」

驚いた。

自分にとってコインはお守りで、羽根は加護だ。むしろ身につけていなくてはいけないものだった。身につけているところか一つは左手の甲に埋め込まれているぐらいだ。

「ごめん、アイリス。体調を崩しただなんて知らなかったんだ」

「いいえ。でも、羽根を縫いつけて差し上げることは出来ないのです」

「いいや、おれ、自分でやるよ」

「でも、ラック様。お裁縫はあまりお得意では……」

「隣で教えてくれるかな、アイリス」

そう言うときアイリスは大きなブラウンの瞳で微笑んだ。

「ええ、喜んで」

裁縫をするのはとても苦手だった。

ずっとねえちゃんがやってくれていたし、王都に着てからはアイリスに任せっきりだったからだ。隣で見ていたから何となくやり方はわかるけれど、見るのと実際やるのは大違いだった。

思うように針が進まない。

「やはり私がやりましょうか？」

「だめだよ、アイリスが体調崩すなんて。それに、おれまだまだいんな事できるようにならないといけないんだから！」

ねえちゃんとアレイさんに追いつくために。

「馬にだって乗れないし剣は使えないし言葉遣いは駄目だし、できるようにならなくちゃいけないことはいっぱいあるんだよ？」

「でもまだラック様はお若いですし、時間をかけて覚えていけばいいのでは？」

「ダメだよ。早くねえちゃんとアレイさんに追いつかなきゃいけないんだ、おれは」

二人が大切に、隣に立って守りたい存在だから。

力を込めてそう言うと、アイリスは朗らかに笑った。

「お嬢様は万能でいらっしやいますからね。追いつくのはきっと大変でしょうね」

「うん。だから、おれがんばるって決めたんだ！」

目は必死で縫い目を追いながら、純白の羽根を縫いつけていく。
「ラック様のそういうところが素敵だと思います。強い意思を持つて努力できる姿はとても輝いて見えます。自分もがんばらなくちゃって思えるんです。そうやってラック様は周囲の人を明るく照らしてくれているんですよ」

「おれはアイリスとリコリスがいてすごく助かってるよ？ 手伝ってもらってばかりだ」

「それが私たちの仕事ですから」

アイリスはそう言っただけで微笑んでくれたけれど、その笑顔だってみんなを明るく照らしてくれると思う。

自分はきつと出会う人に恵まれているんだろうな。

この新しい世界に飛び込んでから、アレイさんもじい様も王様もサンもアイリスもリコリスもクラウドさんもダイアナさんも、もつともつとたくさんのヒトに出会ったけれど、みんないいヒトたちばかりだ。

いまの自分は幸せだと思った。

そして、そう思える事が一番幸せなんだろう。

がんばろう。

自分のためだけにじゃなくて、みんなのために。

そう決心して漆黒星騎士団の訓練所に向かった。

SECT・4 鴉部隊

訓練所はインフェルノ・ゲートを出てすぐのところにあった。

広い敷地を持つそれには、弓や剣、槍など個々の建物としての練習場があり、また大きな闘技場もあった。馬小屋もすごく大きくて、それも体躯のいい立派な馬ばかりが並べられていた。

騎士団員が寝泊りする建物は全部で5棟。そのそれぞれに個人練習用と思われる道場がついていた。

出迎えてくれたクラウドさんは、案内しながら騎士団について教えてくれた。

「漆黒星騎士団は4つの部隊に分かれている。鴉^{とび}、鷹^{たか}、鷺^{わし}、鷺^{さぎ}と呼ばれている。鴉は主に弓部隊、鷹は剣、鷺は槍、鷺は女性の部隊だ。けれど、騎士になったばかりで部隊わけされていない者たちは鴉^{からす}と呼ばれる少年部隊を作っている。主に15から17歳くらいの少年少女ばかりだよ」

「んじゃあ、ヨハンくらいだね」

「そうだね。ラック、君はまずそこで訓練を共に受けてもらおう。レメゲトンということは隠してある。若干季節はずれだが、私が才能を見込んで連れてきたということになっているから、一応そのつもりでコインは人目に触れさせないで欲しい」

「うん、わかった。気をつけるよ」

宿泊施設と思われる建物に着くと、その前で一人の少女が佇んでいた。いや、少女というにはもう成熟した大人の女性の顔をしている。

小麦色に焼けた肌に深い緑の瞳が印象的だ。少し癖のある橙に近い茶髪は適当に切ったのか揃ってはいなかった。気が強そうな性格が顔に出ている……美人さんだけど、怖いヒトかもしれない。

「ヴィッキー、この子が新しくお世話になるラックだ」

「ラック……ファミリーネームは？」

気の強そうな女性の問いにクラウドさんは慌てず答えた。

「ラック・アキレアということにしておいてくれ」

アキレアってそれ、そこに咲いてる花の名前じゃん？今考えたでしょ、それ！

その女性もちらりと咲いているアキレアの花を見たが、何も言わずに頭を下げた。

「かしこまりました」

「この子はヴィクトリア・クラーク、少年組、鴉からすのリーダーだ。レメゲトンであることは彼女だけに教えてある。何か困った事があったら彼女に相談するといい」

「うん、分かった」

「それじゃ、ヴィッキーの言うことを聞いていい子にしているんだよ」

「はあい」

行儀よくお返事をする、クラウドさんは頭を撫でてくれた。

その様子にヴィクトリアさんが不可思議なものでも見るような目を向ける。

「ああ、そうそう、言い忘れてたけどラックの精神年齢はいろいろあって3歳児程度らしい。最近はまだ少し成長したようだけれどね

後は頼んだよ、ヴィッキー」

その言葉にさすがにヴィクトリアさんは顔を引きつらせたが、クラウドさんは有無を言わせない笑顔で去っていった。

「えーと、ヴィクトリアさん？ お世話になります。よろしく願います！」

100点満点の挨拶が出来たと思ったのに、ヴィクトリアさんは頬を引きつらせていた。

「さて、レメゲトンということだが、それは隠して一人の少年組として扱えとクラウド様に言われている。特別扱いはせんぞ」

「うん、いいよ」

「返事ははい、だ」

「はい」

厳しい指摘を受けて言い直した。

「私のことはヴィッキー、またはリーダーと呼べ」

「はあい」

「返事は短く！」

「は、はい！」

突然叱られて思わず背筋を正した。

「それに何だ、その言葉遣いは。クラウド様に向かって『うん、分かった。』だと？ 敬語というものを知らんのか！」

「ちょ、ちよつと習ったけどまだあんまり使えないんだ」

剣幕に驚いて思わず腰が引けた。

その様子を見てヴィッキーは舌打ちする。

「全く……精神年齢3歳だったな。どんな事情かは知らんがなぜこんな見た目と中身の合わん訳の分からん奴が来るんだ。もう戦争が始まって一刻の猶予もないこの時期に」

「違うよ、戦争が始まったからだよ」

「何？」

「おれはレメゲトンだけど、なり立てで経験とか知識とか少ないからすぐには戦場に出してもらえなかった。王様はここで修行しなさいって言ったよ。おれは早く強くなって戦場に行かなくちゃいけないんだ」

そう言うつと、ヴィッキーはふう、とため息をついた。

「思ったより頭はしっかりしていそうだな。経験と知識が足りんと言ったな？ 私が一から鍛えなおしてやろう」

「ほんと？」

嬉しい。

思わず微笑むと、ヴィッキーは眉間に人差し指をつきつけた。

もともとそんなに目つきがよくないのに、さらに目が釣りあがった。

「まずは敬語からだ！」

「えええ！」

敬語は苦手だよ！

「つべこべ言うな。部屋は2階の4号室、さつさと荷物を置いて道場に来い。鴉組カラス全員の前で紹介する」

「わ、分かった。」

「分かりました、だ！」

「分かりました！」

ひええ。

どうやらヴィッキーは見た目どおり厳しい人みたいだった。

また怒られる前にと慌てて荷物を置いて道場への廊下を駆け抜けたのだった。

道場にはすでに20人以上の少年少女たちが勢ぞろいしていた。ヴィッキーに連れられて道場に足を踏み入れると、その視線が全てこちらを向く。さつと見ただけで女性はほとんどいなかった。

集まった少年たちの間からため息が漏れるのがわかる。しかし、落胆した様子ではなかった。

「すでに聞いていると思うが、鴉カラスに一人新しく増えることになった。これからは訓練を共に行う仲間だ」

「ラックⅡグ……じゃなかった、ラックⅡア、ア、アロンソア？です。よろしく願います」

なんだかさつきと苗字が違う気がしたけど、まあいいや。同じ花の名前だし。

隣にいたヴィッキーの顔が引きつった。やっぱり違っていたらしい。

「時期はずれだが、クラウド団長の推薦で騎士団に配属されることとなった」

その瞬間、目の前の人ごみがざわりとざわめいた。

「静かに！ 明日からはラックも訓練に参加する。主に剣術中心になると思う。慣れない事もあるだろうから、助けてやって欲しい。以上だ！」

ヴィツキーがそう宣言すると、少年たちは解散した。

前を通るときにひどく視線を感じる。団長が推薦するほどの腕を持つものに向ける敵意を持つ視線や、ただ珍しいものに向ける視線、他にも興味の視線などいろいろだった。

「メルル、シア。少し来てくれ」

「はい、リーダー」

ヴィツキーはそこから女性2人だけ呼びとめた。

「とりあえず女性だけ紹介しておく。左がメルル「K」フアランドル。今年入団したばかりの15歳だ」

「よろしく、ラック」

メルルは黒いカチューシャをしていて、大人しそうな印象を受けた。でも若草色の瞳に灯る光は理知的だったからきつととも賢いんだろうと思った。身長が低くて少し見下ろしてしまうが、笑顔がふわりと優しく、思わず微笑み返してしまうようなかわいらしい少女だった。

「もう一人はシンシア「ハウンド。おそらく来年には私と共に鷺部隊に配属されるだろう」

シア、と呼ばれた女性はあまり表情を変えずに軽く頭を下げた。

すらりとした長身で、銀髪を耳にかかるくらいで切っている。硬く結ばれた唇と表情を灯さない眼はまるで線の細い少年のそれだった。それも白い肌にひどく目立つ紅梅色の瞳が壊れそうな危うさをもし出している。

白い毛並みの兎みたいだ。

思わず見とれていると、ヴィツキーが止めた。

「やめてやってくれ、シアは見られるのが嫌いなんだ」

「あ、ごめん」

確かに自分だってこんなじろじろ見られたらいやだろう。

「でも、すごく綺麗だね」

にこりと笑いかけると、シアは目線をはずした。
メルルは楽しそうにくすぐすと笑う。

「それをラックが言うの？」

「何で？ どう見たって綺麗じゃん」

「違うわ。だってラックだってすごく美人だもの」

「ん、ありがとう」

たまに言われることではあったが、お世辞だろうからとりあえず
お礼だけ言っておく。

「メルルもすごくかわいいよ。ヴィッキーも美人さんだし、おれこ
こでよかった」

正直にそう言つと、ヴィッキーがまたも奇異なものを見る目で見
下ろしていた。

「お前……まさか面食いか？」

「ん、たまに言われる。たぶんそう」

とくにねえちゃんによく言われる。

でも、綺麗なヒトが好きなのって普通じゃないのかなあ？

そう聞くと、度が過ぎるのよ、とねえちゃんは眉を寄せた。綺麗
だなと思わなかった人の顔を覚える気がないでしょう、と言われた。
まあ確かにそうかもしれない。

だから王様の顔を覚えるのに苦労したんだ。

でもそれは、二度と口に出しちゃいけないわよ、とねえちゃんに
硬く口止めされていることなのだった。

SECT・5 LUX

部屋はどうやら4人とも同じらしかった。入ってすぐにベッドが4つ並んでいた。カーテンの色が淡いピンクだし全身が映る大きな立ち鏡もあって、どこか女性らしい部屋だ。

右手には扉があり、そこは勉強部屋だと言われた。のぞいてみると、よく使い込まれた木の机と、たくさんの本が並んだ棚があった。ベッドの横の収納はさすが充実している。持ってきた武器も含めた荷物を簡単に片付けていると、メリルが声をかけてくれた。

「ラックはどこから来たの？」

「カトランジエだ」

自分の代わりに向かいのベッドのヴィッキーが答えた。

きつとぼろが出ないように説明を代わりにしてくれるんだろう。

異様な説明口調で彼女は一気に言った。

「小さな武道大会があつて、そこに出場していたのを団長が偶然発見されたらしい。両親はいない。カトランジエで知り合いに拾われて育てられた。まだ荒削りだが磨けばよいものが出来るだろうとのことだ。剣術はそれなりに使えるが馬術に関しては素人、基本的な生活は出来るがわけあって少し頭が足りない」

その勢いに少々押されながらも、メリルは聞き返した。

「リーダー、頭が足りないって、どういうことですか？」

「言葉通りだ」

にべもなく切り捨てる。

あれ、この感じ、知ってる気がするよ。

「少々阿呆の鳥頭だ。苦労かけるかもしれんがよろしく頼むぞ、メリル」

「分かりました」

鳥頭、阿呆 この単語でぴんときた。

誰かに似ていると思ったら。

「ヴィツキーはイジワルだね、アレイさんみたいだ！」

「アレイ、さん？」

メリルが首を傾げる。

ヴィツキーが怒ったような口調で言い放った。

「カトランジエの街の誰かだろう！ ラック、お前はもう余計なことを喋るんじゃない！」

本当にアレイさんそっくりだよ！

びっくりすると同時になんだかとても嬉しかった。

シアはその様子を特に表情を変えずに眺めている。ヴィツキーは不機嫌そうに腕を組み、メリルは困ったように微笑んでいる。

なんだかとても楽しくなりそうな予感がした。

その日の夜は夢を見た。

丸い窓だ。遠い。手を伸ばしたけれど届かない。壁は冷たい黒い石で覆われていた……ひどく寒い。

目に映る自分の手はとても小さい。ところどころ赤くなっているのは寒さのせいだろうか。それでも必死に窓に向かって手を伸ばしている。

窓から見えるのは光。

青白く冷たい月光が差し込んでいる。

その月に、必死で手を伸ばしていた。

絶対に届かないことは分かっている、青白い月光が本当は橙の柔らかな光を映すと知っていたから、その光を求めている。

「……シ……ファ……」

自分の喉から声が漏れる。

かすれた声だ。寒さで震えてうまく言葉にならなかった。

黒い壁は絶対的に自分を取り囲み、ただ遠く届かない窓だけが唯一の光だった。寒さに震えながらずっと光を追い求めている。

焦がれても手に入れられぬと知っていながら

次の日はメルルに起こされた。

「ああ、おはよ、メルル」

眠い目をこすりながらベッドに起き上がる。若草色の瞳が初夏の草原みたいに朝日を受けて煌いていた。

何か夢を見ていた気がする　　すぐ、寒かったような。

「おはようラック。朝ごはんよ、行きましょう」

「え、うん」

慌てて普段着に着替え、メルルの後を追った。

他の部隊と違って鴉部隊には決まった制服がないらしい。メルルは瞳と同じ若草色の膝まであるローブに近いものを着ている。が、前部分に大きくスリットが入っていて黒いタイツがベージュ色のブーツから伸びているのが見えていた。黒いベルトに武器を装着してはいなかったが、おそらく短剣を括るであろう皮製のサックが見えた。

自分とは言えばいつもの紺のハイネックアンダーウェアと紺のスパッツに、水色の短衣。足元はサンダルだ。その辺を歩いていたときの格好と大差ない。

左手の甲は念のため包帯を巻いてその上から籠手をつけた。右手首のコインはペンダントに代えて首に下げたのである。

「食堂は1階にあるの。当番が交代で食事を準備するのよ。そのうち当番も回ってくると思うわ。3日交代で2人組みなの」

「へえ。おれは誰と組むんだろ？」

「そうね、私たちが3人で一組になっているから、二組に分けることになるかもしれないわ。きっとそのうちヴィッキーが決めるでしょう」

食堂に入ると、みんなの視線がこちらに集中した。

メルルは気にせずにごにこと解説を続ける。

「鴉部隊はラックを除くと今は25人、食堂は16席しかないから、

順番に食べるのよ。ご飯の時間と稽古の時間や掃除の時間はまた後で教えるわ」

「分かった。がんばって覚えるよ」

どうやらこの生活に慣れるまでにはかなりたくさん覚えるなくてはいけないようだ。

メルルは先に朝食をとっていたらしいシアとヴィッキーの隣に座った。

ヴィッキーもメルルと同じような服を纏っていた。ただ、シアは男性用の騎士服を纏っていた。それは美貌の彼女にとってもよく似合っていた。シアは黒、ヴィッキーは赤、色が二人の性格を表しているようで少し面白かった。

「おはよう、ヴィッキー、シア」

「おはようございます、だ。やり直し！」

「はうっ！」

しまった、初っ端からヴィッキーの機嫌を損ねてしまった。

「お、おはようございます」

「よろしい。メルルもこいつに敬語を徹底的に叩き込め。クラウド団長に対する態度すらなっていないのだぞ」

どうやらヴィッキーはクラウドさんに敬語を使わなかった事が気になって仕方がないしかった。

「分かりました、リーダー」

「うあ！メルルまで！」

敬語は苦手だよ！

その様子を見てもシアはほとんど反応しない。紅梅色の瞳でちらりと見ただけだった。

そこへ、両手にトレイを持った少年が割り込んだ。

「はい、姫。それに……えーと、ラックだっけ？」

「ありがとう、ルーク」

……え？

「どういたしまして、姫」

ルークと呼ばれた少年はにこりと笑った。

褐色に近くなるまで焼けた肌に金の瞳が目立つ。あちこちにはねた黒髪と相まってまるで金目の黒猫のような少年だった。それほど大きくない体もしなやかで、本当に猫みたいだった。

きつちりとした騎士の服は着ておらず、作業用のズボンにラフなノースリーブ姿だった。その上に食事当番用と思われる白のエプロンをつけているのが滑稽だった。

「えと、初めまして。ラック・アザレアです」

「アロンソアじゃなかった？」

ルークが首を傾げる。

ヴィッキーの顔が引きつった。ああ、また名前間違ってたか。でももういいかなあ。めんどうだし。

「何でもいいじゃん」

「いやまあ、俺はいいけどさ、本人がいいんなら」

そうやって流すあたりどうやらルークは大雑把な性格らしかった。

「俺はルーク・ハンバキア、鷹部隊を^{たか}目指してるんだ」

「私の乳母の息子なの。一緒に育ってきたから、もうほとんど兄妹みたいなものよ。ルークの方が1つ年上だけれど」

乳母ってことはメリルは貴族の娘なんだろうか。あ、でも、騎士団の中じゃ平民も貴族もないってアレイさんが言ってたっけ。

黒猫のルークは持っていたトレイをメリルに恭しく差し出した。

「俺はメリル姫の小間使いだから」

「もう、やめてよルーク！」

メリルが軽く頬を染める。

「ルーク、ルークって言うんだ」

「俺の名前がどうかした？」

「ん、ちよつとね」

ラーズが……滅びの悪魔グラシャ・ラボラスが自分のことをそう呼んだ。君はそう名乗ったじゃないか、と言った。

ルークと言う名に意味はあるんだろうか。

「ルークってさ、どんな意味なの？ 古代語？」

「ん……」

ルークは声を潜めた。

「実は、セフィロト国の古代語で、綴りはL・U・X……『光』っていう意味なんだ。戦争相手だし今じゃ大声では言えないけど。」

「『光』？」

「そう」

どくりと心臓が脈打った。

あの銀髪のヒトが相手をそう呼んでいた 青いオーラの半眼のヒトを『光』と呼び、また赤いオーラの激しいヒトは『音』と呼ばれていた。

やばい。また思い出してしまった。

青みがかった銀髪と深い群青の瞳、陶器のように滑らかな白い肌…… 思い出して心が騒ぐ。

会いたい。

「大丈夫か？ 顔色が悪いぞ。」

はっとするとヴィッキーが覗き込んでいた。

「あ、うん、だいじょうぶ」

言ったが額には汗が浮かんでいた。

「無理はするな。朝食後すぐ稽古が出来る服で道場に集合だ」

「分かつ……分かりました！」

「よろしい」

ヴィッキーは返事に満足したように笑うと、シアと共に食堂を出て行った。

SECT・6 ライガ「アンタレス」

まだ部隊分けされていない鴉^{からす}は、基本的にどの分野も等しく鍛錬を行う。時間と週ごとに区分けされたそれはまるで学校の時間割のようだった。

ただ、ヒトによって目指す部隊が違う。選択の時間も多く、みな積極的に自主練習を行っているようだった。

「基本は午前、午後に分けられる。剣術、弓術、槍術、馬術、棒術、体術など多くの種類があるが、騎士団の先輩方が教鞭を取られる時間はさほど多くない。できれば先輩がいらっしゃる時間に稽古に出たほうがいい」

ヴィッキーはまず鴉^{からす}部隊の訓練施設内を案内した。

自分を入れても総勢26名の部隊とはいえ、さすが施設はしっかりしている。最初に紹介された道場をいれると、全部で4つの稽古場がある。外の広場も含めると、100人単位での活動が可能だろう。

「お前は主に剣術と馬術だったな。馬の厩舎は少し遠い」

「あ、それ、最初に入ってきた時見たよ。あの入り口の右手にあった奴だよね？」

「敬語！」

「え、えーと……入り口の右手にあった奴……ですね？」

「そうだ」

ヴィッキーの後を追うように馬小屋にたどり着いた。

馬小屋、と言っても大きさが尋常ではない。100頭以上の立派な馬がずらりと並ぶ姿は壮観だ。

と、その端にまだ成熟していない子馬たちが柵に囲まれているスペースを見つけた。

「かわいい！」

思わず駆け寄ると、ヴィッキーの怒声が追いかけてきた。

「勝手に動くな！」

「ごめんなさい」

謝りつつも視線は小さな馬に釘付けだった。

体高が自分の腰くらいまでしかない。もつと少し大きいものもいるが、まだ生まれたての子馬と思われる数頭が柵の中を歩き回っていた。

「それは今年生まれただけの子馬ばかりだ」

「うわー、ちっせえ！」

ひょいっと柵を乗り越えて中に入ると、子馬たちは突然の侵入者に驚き、おびえた声を出した。

が、その中で最も大きな馬だけはその場に佇んでいた。

こげ茶の毛並みはふわふわとしてさわり心地がよさそうだ。鬣にはほんの少し栗毛が混じっている。角度を変えると金色にも見える淡い茶の瞳はとても愛らしく、大きさはほとんど大人と変わらないのにひどく幼く見えた。

「おいで」

手を伸ばすと、ゆっくり近寄ってくる。

そつと首の辺りに手を触れたが、おびえたりはしなかった。

「よしよし」

見た目どおりの毛並みはとても柔らかく、墮天の翼に触れたときのように心地よかった。

まるで猫のように気持ちよさそうに目を細めたこの馬は、さらに撫でてもらうと身を乗り出してきた。鼻息が頬にかかって少しびっくりにしたけれど、すぐに頭を抱きかかえるように撫でてやる。

「何をしている。そんな幼い馬にかまっている暇はないぞ」

「ん。でもこいつかわいいよ？」

「そんな事は聞いていない！」

ヴィッキーの顔が引きつった。

ああ、また怒らせてしまったようだ。と思っただけなら後ろから声がした。

「気に入ったかい、譲ちゃん」
「うん」

振り向くと、漆黒の騎士服に身を包み黒のマントを纏った男性がこちらに向かつて微笑んでいた。胸元には王家の紋章に並べて鷹の紋章が光っていた。

年はアレイさんと同じくらいだろう、身分の高い騎士の様相に似合わない真っ青なバンダナを頭に巻いている。そのせいで顔はうまく見えなかったが、口元で楽しそうに笑っているのが分かった。

「ライガ部隊長！ 申し訳ございません、この者は新人で、敷地を案内している所です。すぐに戻りますので……」

「ああ、団長が言ってたレメゲトンてのはこいつか」

「ご存知でしたか」

「ああ、部隊長クラスまで情報は出回ってる。王様じきじきのご命令だつてこともな」

その男性はじろじろと自分を撫で回すように見た。

なんだ、知ってるのならいいか。

「ラック・グリフィスです。よろしくお願いします」

「おう、俺はライガ・アンタレス、鷹部隊の隊長だ」
たか

ライガさんと名乗ったヒトは今時分に擦り寄っている馬の頭を撫でた。

「こいつは今年の頭に生まれたやつだ。あと半年もすればきつとい馬になる。何しろガイとイオの息子だからな」

「名前は？」

「まだない。もう少しして乗り手が決まってから決めるんだ」

「この仔に乗るヒトはまだ決まってるの？」

「そうだ」

その馬をじーつと見てみると、なんだか知った顔に見えてきた。

ふわふわのこげ茶の毛並み、まん丸の金色の目。

「ふふ、お前はヨハンにそっくりだな」

子犬みたいに丸い目をしたねえちゃんの弟のヨハンにそっくりだ

った。

「ヨハンてヨハンⅡCⅡファウストか？ 確かにそつくりだ」

「ライガさん、ヨハンのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、今年の騎士団試験は俺が担当したからな。あい
つはなかなか筋がいい。輝光石騎士団ダイヤモンドに入団したんだっとな」

「うん。ねえちゃんと一緒だつて言ってたから」

「ねえちゃんというメファイアⅡRⅡファウスト女伯爵だな。何度
か見たがすげえ美人じゃねえか。家柄もよくコインを5つも所有す
るレメゲトンの長。しかもこの上ないくらいいい女だ。ぜひと
お近づきになりたいもんだねえ」

「……ライガ部隊長、もう少しお言葉を慎んでください」

ヴィッキーが顔を引きつらせている。

「いいじゃねえか。お前も来年には鷺部隊さぎに入るんだろ。貴族さん
たちと会う機会も増えるだろう」

「いえ、私は……」

ヴィッキーの顔が曇った。

何か嫌なことでもあるんだろうか。

思っているとヴィッキーはライガさんに向かって軽く礼をした。

「失礼します。いくぞ、ラック」

「あ、うん」

もう少しライガさんと話してみたかったけれど、仕方がないので
青いバンダナの鷹部隊長たかさんに大きく手を振った。

軽く手を振り替えしてくれたのが嬉しかった。

ヴィッキーは一言も喋らずに歩いていく。

「ねえ、ヴィッキー。何か怒ってるの？」

「……」

「おれ、何かした？ 嫌なこと言っただんなら謝るよ」
と、ふと足が止まった。

「……すまん、お前のせいじゃないんだ」

ぼつりとヴィッキーが言った。

「いや、私の気持ちの問題だ。もうどうしようもないことなんだが、なんとも納得できんだ」

「何のこと？」

首を傾げると、ヴィッキーは悲しそうな顔で微笑んだ。

「余計な気を使わせてしまったな。すまない。さあ、道場に戻ろう。午後からは訓練に参加してもらう」

ぼん、と頭に手を置かれてすごく嬉しかったんだけど、でも悲しそうな顔が眼に焼きついてはなれなかった。

午後は剣術の訓練に参加した。

先輩が指導に来るといいうので参加人数は多く、ほとんど全員が顔を出していた。20人近い少年で道場はいっぱいだった。

メルルとシアもいたし、今朝会ったルークの姿もあった。

ヴィッキーは木刀を一本貸してくれた。

マルコシアスさんとアレイさんとの稽古以来だ。

「剣術の心得はあるんだったな。流派は？」

「ん、わかんない。もともとは短剣を使ってたんだ。すっかり稽古してもらったのは一回だけだよ。あとは実戦で何度か使ったけど」

そう言うヴィッキーは頭を押さえた。

「たった一回の稽古で実戦？ お前の師匠はいつたい何を考えているんだ？」

「師匠はマルコシアスさんとアレイさんだよ。たぶん何も考えてないよ」

「……頼むからその名は他の人の前で出さないでくれ。その上その言い分は二人に失礼だと思わんのか？ わかった、最初に軽く打ち合ってみる。話はそれからだ」

「はい」

もう諦めたのか、ヴィッキーは敬語のことについて口づるさく言

わなくなった。

稽古場の一箇所でヴィツキーと距離を置いて木刀を構えた。

「私が受けよう。好きに打つてくるといい」

「あ、でも……」

口を開こうとしたとき、道場の入り口の方から大きな声が飛び込んできた。

「元気にやってるか?!」

「隊長、うるさいです。みんなが驚いていますよ?」
それをたしなめる声。

見ると先ほどの鷹部隊長ライガさんが金髪たかの青年を引き連れて入ってきたところだった。相変わらず楽しそうに笑うライガさんの隣の青年は小さくため息をついていた。

どうやら今日指導に来る先輩というのがライガさんだったらしい。
「ライガ部隊長、ご足労ありがとうございます。ファイ先輩も、ありがとうございます」

ヴィツキーが真つ先に出て行つて膝を折る。

黒い騎士装束に身を包んだ二人に、周囲の少年たちも膝を折った。
どうしようもなく呆然と一人突っ立っていると、ライガさんがこちらに向かって歩いてきた。

「よう、ラックだったな。どうだ、やってるか?」

「ううん、まだ。今ヴィツキーが相手してくれるところだったんだ」

「おお、そりやすまん。続けてくれ、ヴィツキー」

「本当にお邪魔しました。すみません」

ライガさんの隣の青年はぺこりと頭を下げた。すごくいいヒトそんな感じがした。

気がつくと周囲の視線がすべてこちらに向かっていて、ヴィツキーは頭を押さえて大きくため息をついた。

SECT・7 明日への期待

ヴィッキーが木刀を構えて前に立った。

「どこからでも打ってこい」

「うん。行くよ！」

騎士の試験をパスして鴉部隊からすのリーダーをするくらいなんだから
きつとヴィッキーはとてつもなく強いんだろう。

両手で木刀を握り締めた。

いつの間にか周囲はギャラリーで固められていた。

「がんばって、ラック！」

メリルの声援ににこりと笑って応える。

ライガさんともう一人の騎士さんも見学しているようだった。

ヴィッキーの構えはアレいさんともマルコシアスさんとも、また
セフィラとも違う構えだった。少し切っ先が下がり気味で刀身が偏
っている。

手加減は無用だ。

マルコシアスさんとやっていた時のように、とりあえず構えを崩
すべく打ち掛かった。

「やーっ！」

気合と共に放った攻撃は、ヴィッキーの揺れるような動きでかわ
された。

いや、軽く木刀が触れている。

ほとんど音もなく受け流されたのだ。

続けて放った二波も流れに逆らわないよう柔らかな動きでいなさ
れた。

「！」

自分はこの剣を知っている。

木刀の切っ先をすれすれで見切ってかわすこの動きは何度も見て

いる。

構えは違うが、マルコシアスさんやアレイさんが自分に教えてくれた動きととてもよく似ている。いや、ほとんど同じと言ってもいいだろう。

数合打ち合ったけれど、ヴィッキーの防御を崩せる気配はなかった。

「困ったな」

声に出して、いったんヴィッキーから距離を置く。

すると向き合っている鴉部隊リーダーは軽くため息をついた。

「戦闘中に『困った』などという奴があるか」

「でも実際困ってるんだよ」

それでも真剣な女剣士の深緑の瞳から目を離さない　これはねえちゃんに習った戦闘の基本だった。

しかし、このままでは埒が明かない。

さて、どうしようか。

しばらく考えて、決めた。

「うん、決めた」

「遠慮せず来い！」

まずは木刀を左手だけに持ち変える。

イメージと合わせる為だったのだが、その不思議な行動にヴィッ

キーは眉を寄せた。

それを気にせずにと笑う。

「行くよ！」

広い道場の一角、多くのギャラリーが見守る中、左手で木刀を構え、最大の武器である速さを生かして超速の突きを放った。

さすがのヴィッキーもこの速度で下がることは出来ず、右にステップして避ける。

それは予測済みだ。

もう一歩踏み出して逆手で横になぎ払う。

「くっ！」

初めてヴィッキーの防御が遅れた。

返し様上から振り下ろした攻撃を彼女は木刀を横にすることで受けた。

「カーン！」

深緑の瞳が歪んだ。

あまりにイメージした通りなのでびっくりした。

さらに、受け流すことが出来ず真正面から受け止められた太刀の力の方向を少し変えてやると、木刀はすべるようにヴィッキーの顔の横へ降りてきた。

集中しているせいか、自分の木刀の動きもヴィッキーの動きもスローモーションに見えた。

頭の中にある彼の動きを正確にトレースして、ヴィッキーの横へ一歩踏み出す。

同時に右手を木刀の柄に添えた。

「！」

「チエックメイト！ なんちゃって」

上からの攻撃を受けたままの形で固まっているヴィッキーの真横に入り込み、腕と首の間に差し込むようにして喉元に刃を押し当てたのだ。

その場に沈黙が訪れる。

驚いたように見開かれた深緑の瞳が真横にあったので、にこりと微笑んでみた。

その瞬間、大きな笑い声が響き渡った。

「ははははは！ すげえな、お前！」

声の主は鷹部隊長のライガさんだった。

喉元に据えていた木刀を引き、見守っていたヒトたちに笑いかけ

「ありがと。でも、ただ他のヒトを真似しただけなんだ。おれが考えたわけじゃない」

今の技は左手で剣を振るう優しくてイジワルなあのヒトがマルコシアスさん相手に見せたものだった。

残念ながらあの時はマルコシアスさんに通用せず、真横に入り込んだことで逆に背後をとられるという結果になってしまったのだけだ。

「人の技を真似る事ができるというのはそう簡単なことではありませんよ。さすがクラウド団長が推薦しただけはありますね」

ライガさんの隣の金髪の青年が困ったように微笑んだ。

「ヴィッキーが受けるのみだったとはいえ、一本とってしまつとは」

「未恐ろしいガキだな、おい、ファイ。お前もやってみろ！」

「いえ、遠慮します」

温和な顔と優しいような笑顔に似合わぬきつぱりとした口調で断ると、金髪の青年はこちらに向かってにこりと微笑んだ。

「私はファイアライト」リドフォール、鷹部隊に所属しています」

「ラック」アー……アキレアです。よろしくお願いします」

あれ、昨日と名前違わねえ？などとギャラリーから聞こえたのは無視することにした。

誰になんて名乗ったかなんてもう忘れちゃったよ。

「よろしく、ラックさん」

「ラックでいいよ、ファイアライトさん」

「では私のこともファイ、とお呼びください」

ん、でもこのヒトはきつと年上だから。

「ファイ、さん」

「お前は敬語を使わんくせに妙なところだけ律儀だな」

気がつくとヴィッキーが隣に来ていた。

「まさかやられるとは思ってもみなかつたぞ。他人の動きを真似したと言ったな。他にもできるのか？」

「うーん、バリエーションが少ないし、ヴィッキーみたいにおれと似た感じの剣を使うヒト相手じゃないとうまく決まらない技ばかりだから、実はあんまり役に立たないんだよ」

「じゃあお前、剣の稽古だけは鷹部隊のほうに参加しろ」

「ラ、ライガ部隊長?! 何をおっしゃるのですか?!」

ヴィッキーが驚いた声を出すと、ライガさんは当たり前のように言った。

「こいつの能力を生かす場合、できる限り多くの剣を見せた方がいい。それならここより鷹の稽古場のほうがよっぽど合ってると思うぜ?」

その言い分にファイさんがきつぱり口を挟む。

「隊長、さすがにそれは問題があります。彼女は今日訓練に参加したばかりなのですよ」

「団長には俺から言っておくさ。時間は後でファイが連絡する」

「しかも私ですか?!」

ファイさんの突っ込みと叫びをライガさんは完全に無視してヴィッキーのほうを向いた。

「いいか、ヴィッキー」

「……はい、分かりました。部隊長がそうおっしゃるなら」

「よし決まり。おい、ラック。お前は力なさそうだから剣は両手で握った方がいいぞ。剣を吹っ飛ばされたらどうしようもないだろう?」

どこかで聞いたようなアドバイスに驚いた。

「うん、それは他のヒトにも言われたよ。気をつけるよ」

「ならいい」

青いバンダナの部隊長さんは楽しそうに笑った。

隣でファイさんは頭を抱えて大きなため息をついていた。

その後、取り巻いていた鴉のメンバーは個人の稽古に移っていった。ライガさんとファイさんはその間を歩き回り、簡単な指導をしているようだ。

その中にメルルとシアの姿もある。

その様子をいったん見渡してから、ヴィッキーは自分に聞いた。
「お前が使うのも私と似た型なのか？」

「うん、そうだね。攻撃を弾くんじゃなくて受け流せ、ってマルコシアスさんが何回も何回も言ってたから」

「そうか」

ヴィッキーは少しの間何かを考えているようだった。

「お前の場合は時間がない。眼がいいようだし、身体能力も優れているのだろう。人の型を盗むのが手っ取り早いのは分かるのだが、やはり基礎を疎かにしてはいけない」

「うん」

「返事はい、だ」

「はい」

「これまで経験した型が私のものに似ているのなら、基礎は私が個人的に見ることにしよう」

「ほんと？」

「敬語！」

「ほ、本当ですか」

しまった、ヴィッキーの調子が元に戻ってきてしまった。

「鷹部隊の訓練には今朝会ったルークを含めた4人が参加している。他にも私とシアは鷺部隊の稽古に週何度か参加している。そちらにも顔を出すといい。今度連れて行ってやろう」

「ありがとうございます……」

「嬉しい」

満足げに頷いたヴィッキー。

「今晚、ファイ先輩の伝令を受けてから予定を立てることにしよう。馬術の方も考えなくてはいけないからな」

「お願いします」

「お、だいぶ敬語が板についてきたな」

「ほんと？」

あ、しまった。

「ほ、本当ですか……」

「いや、やはりまだまだだな。鷹^{たか}部隊に顔を出すのならそれなりの礼儀は覚えねばならん」

「ひえええ！」

剣術に馬術、それに敬語。

まだまだ自分に足りないものは多い。

それでも明日からは本格的に訓練が始まるのだから、たくさんの事を吸収していければいいだろう。

今日はわくわくして眠れそうになかった。

SECT・8 千里眼

また夢を見た。

丸い窓が遠い。でも、寒くはなかった。

目の前に立ち塞がる黒い石の壁はとてつもなく冷たかったけれど、手は悴^{かし}んでいなかったし吐く息が白いこともなかった。

ふと振り返るとそこには簡素なベッドと机がひとつだけある。

机には白いノートが広げられていた。

ゆつくりと机に近づく。そして椅子に座ると、小さな手で置いてあったペンを取り、書き始めた。

今日はリリイが来てくれる日だ。どんなお話をしてくれるのか
楽しみ

そこでふとペンを止める。

この黒い石の壁を見つめ続けて、季節は幾度目かの春。きっと外は暖かい日差しに溢れているんだろう。木々が芽吹いて蕾は綻ぶの
だろう。

外に、出たいな。

振り返ってまた小さな丸い窓を見上げる。

ただ、いつも見上げるだけ。

次の日はメルルに起こされる前に目覚めることができた。

が、見るとベッドには3人とも姿がない。

「どこいったの……？」

太陽がちょうど山から顔を出す直前だ。食事当番でもない限りこの時間はまだみな眠っているはずだった。

そつとベッドから起きだした。

ちょうどいい機会なのでずつと巻きっぱなしだった包帯を取り替えて、その上から籠手を装備した。一応小太刀も腰に差して部屋を

抜け出す。

いったい3人ともどこへ行っただろう？

2階の廊下を歩いていると、外からヴィッキーの声がした気がした。

「ヴィッキー？」

窓からのぞくと、宿泊棟の前広場に人影がちらほらと見えた。

慌てて階段を駆け下りる。

扉を開けて外に飛び出すと、そこでは数人の少年少女が剣を振るっていた。

その中で木刀の素振りをしていたヴィッキーが自分に気づいて手を止めた。

「ああ、おはようラック」

「おはよう……ございます」

見るとそこにはシアとメルルもいて、さらにルークと知らない少年が2人混じっていた。

「まだ朝食には間がある。ずいぶん早起きだな」

「ヴィッキーたちだって。起きたら誰もいないからびっくりしたよ」

ひよい、と肩をそびやかすとメルルが言った。

「だからラックも誘おうって言ったんですよ、リーダー」

「いや、環境に慣れるまで睡眠は十分とったほうがいいと思ったんだが」

「いいじゃん、ばれちゃったならラックも一緒にやったら？」

黒猫のルークがにこりと笑う。

「仕方ないな。私たちは毎日早朝稽古をしているのだ。外が明るくなってから朝食の直前まではんの数刻だが少しでも鍛錬になればと思っただけのものだ。毎日参加しているのは私とシア、それにルークの3人だが、他のメンバーは入れ替わりで入ってくる」

ヴィッキーが言うのとメルルは照れたように微笑んだ。

「私も実は今日が初めてなの。昨日ラックの動きを見て……ちょっと私もがんばらなくちゃなあ、なあんで」

「メルル姫はねばすけだからな」

ルークが茶々を入れてメルルは若草色の瞳で睨みつけた。

初対面の少年二人もにこにこと笑いながら言った。

「俺たちの参加理由も似たようなもんだけだな」

「そうそう。昨日今日入ってきた新入りに負けるわけにはいかないもんな」

「何だ？ それは昨日ラックに負けた私に対する嫌味か？」

ヴィツキーがじろりと睨むと少年たちは慌てて否定する。

「まあいいだろう、きっかけはどうあれ鍛錬に励むのはいいことだ。ラック、この二人はお前と共に鷹部隊たかの訓練に参加することになる。分らない事があつたら聞くといい。左がロナルド、右がジンだ」

「えと、その、よろしく願います！」

ぺこり、と頭を下げると、少年たちは呆けたように口を開けた。

「うわー近くで見るとマジでかわいいんだけど！」

「やべー。アレックスたちに自慢しようぜ！」

訳がわからず首を傾げているとヴィツキーがあきれたようにため息をついた。

「お前たちは全く……剣以外のことはまるでガキだな」

ロナルドと呼ばれた方は同年代の少年たちに比べるとかなり発育がいい。一端の大人のような大きな体をしていた。それでもやはり顔にはあどけなさが残っていた。赤茶の髪とそろえた騎士服はなかなか様になっている。

対してジンはルークとそう変わらないほどの小柄で細くて吊りあがつた目をしていた。黄金色で癖のある髪があちこちに飛び跳ねている。ルークが黒猫ならジンはずるがしこい狐みたいだった。

「えーと、ルークとロナルドとジン」

黒猫がルーク、大柄なロナルド、狐のジン……自分の中で繰り返すようにして覚えた。

以前ほどいろんな事を暗記するのが苦手ではなくなっていたのは幸いだ。それでもここ2日くらいでたくさんの方のヒトに会いすぎて、

全員は覚え切れていなかった。

「もう今日は時間がないが、明日は朝起きられれば参加するといい。途中からでも構わないし、稽古したくなかったら参加しなくてもいい」

「うっん、明日から絶対起きるよ！ おれだって強くなりたいもん！」

誘ってもらえてすごく嬉しかった。

少しでもいい、強くなりたい。

ヴィッキーたちが同じ気持ちでいてくれて、そして実際稽古をしている事が嬉しかった。

ねえちゃんに拾われたとき既に学校へ行く年齢ではなかった自分にとつて、こんな風に同世代の少年や少女たちと共に生活するのも学ぶのも初めてだった。

それはとても新鮮で楽しかった。

今現在も東では戦が繰り広げられていて、たくさんのヒトの命が危険にさらされている事を忘れそうになるほどにこの場所は平和だった。

それでもねえちゃんとアレイさんに追いつくため、たくさんのことを覚えて強くならなくちゃいけない。

そのためにはもう一つ、使いこなせるようにならなくてはいい能力があつた。

でもこの練習はヒトに見られるわけにはいかない。

昼間の稽古を終えて疲れきった体を抱えて夜中、ベッドから抜け出した。

迷った挙句、宿舎の屋上を選んだ。

ここならきつと誰も来ないだろうし、それなりの広さもある。何

より、給水用の水瓶の他は障害物もなく遠くまで見渡すことが出来る。それはとても重要なことだった。

きよろきよろと辺りを見渡して誰もいないのを確認してから、首から提げたコインを握り締めた。

「アガレスさん、力を貸して」

全身が躍動するような感覚が行き渡り、目の前に金目の鷹が舞い降りてきた。

右手を差し出すと、鷹は爪を立てないよう慎重にその腕に止まった。

「如何した 幼き娘」

「千里眼を使う練習がしたいんだ。少しだけいいかな？」

「よからう」

アガレスさんは、と言うかアガレスさんの代弁をする金目の鷹は鷹揚に頷いた。

自分が最も早急にモノにせねばいけないのがこの『千里眼』という能力だった。もともと眼はいいのだが、それに悪魔の加護を重ねることで人知を超えた五感を手にする事が出来る。

ご先祖様のゲートティアグリフィスも同じ能力を有したという。

ただ、千里眼を発動したときに受け取る情報量はそれこそヒトが処理できる範囲ではない。

初めて使った後はあまりの情報量にふらふらになり、身動きが取れない状態に陥ってしまった。

もしこの能力を戦闘で使うとすればそんなわけにはいかない。全身から入ってくる情報を方向的にうまく遮断して欲しい情報だけを受け取る事ができるようになる必要があった。

大きく一つ深呼吸。

「よし」

気合を入れると、全身の感覚を研ぎ澄ました

その瞬間、ヒトの気配が感覚の中に飛び込んできた。

しまった、誰かいたのか！気づかなかった。失態だ。

発動した千里眼をいったん切り、その方向に向かって鷹を飛ばした。

「誰?!」

叫ぶと、鷹のアガレスさんの爪で追い立てられたヒトが給水瓶の陰から姿を現した。

SECT・9 紅髪からすの騎士

姿を現した少年は見た事があるような気がする。きっと鴉部隊からすの一人なんだろう。

黒の騎士装束に身を包み、漆黒のマントを羽織った姿は一瞬アレイさんと見間違えてどきりとした。髪の色は炎のような紅だったが、背が高く細身の体型もよく似ている。

きつと少年組の鴉内からすでは1・2を争う長身だ。

驚いてその姿を見つめていると、

「お前、何者だ？」

その人影に逆に質問されて戸惑った。

レメゲトンであることは秘密にしない、とクラウドさんは言った。でも、すでにアガレスさんの姿を見られてしまっている。

どうしよう。

迷っているうちにその人物はこちらに近づいてきた。

端正な顔立ちもどこかアレイさんを想起させた。もっとも、このヒトの藍色の瞳は本人に比べるとかなり目つきがよかったけれど、
というとまたイジワルなことを言われてしまうだろうか。

騎士というよりは美しい舞台俳優のような容姿にほんのしばらく見惚れていた。顔や体つきは完全に大人のものだったが、醸し出すオーラはどこか少年らしく、そのアンバランスさが危うい魅力を与えていた。

が、はっと気づく。

いやいや綺麗なヒトだからって見てる場合じゃなくて、えーと、悪魔を召還した場面を見られたのが最悪的にまずい。うまくごまかせるか？ いや、ねえちゃんじゃあるまいし、残念ながらそんな能力は持っていない。

困った拳句に叫んだ。

「おまえこそ誰だ！」

「漆黒星騎士団、鴉部隊所属ライディーン^{からす}」シンだ。そうか、お前は確か新入りの……」

ライディーン、と名乗ったこの少年はやはり鴉部隊の者だった。なんとも答えあぐねていると、アガレスさんが肩に戻ってきた。「その鷹は普通の鷹じゃないな。さつき確か『アガレス』と言わなかったか？」

やっぱりばれている。

どうやら単純な黒猫ルークと違ってとても鋭いヒトのようだ。

「第2番目の悪魔アガレスのことなのか？なぜお前がそのコインを持ってるんだ。まさか」

「おれはラック^カグリフィス。グリモワール国のレメゲトンだ」

言われる前に正直に名乗った。

ライディーンは眉を寄せる。

「お前がレメゲトン？なぜレメゲトンが鴉^{からす}に？グリフィスと言うと最近話題の新しいレメゲトンだな。本物なのか？」

疑問符が多すぎる。

でも仕方ないからひとつずつ答えていった。

「信じる信じないは勝手だから好きにしてよ。でも、クラウドさんには隠せって言われているから言いふらされちゃ困るんだ。ばれるといういろいろ面倒だし」

最悪訓練が中止になってしまう。

それだけは避けねばならなかった。

「おれのことは黙っててくれる？おれは未熟者だから修行が必要なんだ。他のレメゲトンは戦争にいつちやったけど、おれは弱いから騎士団でいろんな事を学びなさいって王様が言ったんだ。だから置いてけぼり」

自分で言って悲しくなってきた。

「おれは早く強くなつてトロメオに行きたいんだ。大切なヒトたちが……戦場にいるから」

じつと藍色の瞳を見つめると、青年は口をつぐんだ。

どこか呆けているようなその視線をさらに見つめ返すと、ふっと目を逸らされた。

「分かった、誰にも言わない。お前は新入りのラックだ。それでいいんだろっ?」

「ありがとう。えと、ライディーン?」

首を傾げるとライディーンはにこりと微笑んだ。

女の子が10人いたら10人とも振り返るような笑顔だった。

ちょうどアガレスさんが自分の肩に舞い戻ってきた。

「その鷹が第2番目の悪魔アガレス?」

「うんとね、厳密に言うとは違うんだけど……アガレスさん、出てきてくれる?」

鷹に向かってそう言うと、全身を支配していた高揚感が薄れて、代わりに目の前に見慣れた老紳士の姿が現れた。

「幼き娘の学友か」

「うん、そう。ライディーンだよ」

「初めまして、アガレス様。ライディーン〓シンと申します」

ライディーンは軽く膝についてお辞儀をした。

アガレスさんは視力を失った眼で深紅の髪を持つ若者を見定めた。
「ふむ 遠く悪魔の血を受け継いでいるな ほとんど薄まっているが」

「やはりお分かりになるのですか。もう何代も経て完全に消えかけているというのに」

「悪魔の血?」

首を傾げると、アガレスさんは楽しそうに笑った。

「何も知らぬようだな 幼き娘 炎妖玉の子に訊ねるといい」

「えんようぎよくって、ガーネットのこと? 子供って誰?」

「悪魔の末裔 その瞳は混合にして闇と光の狭間にある 果てしなき可能性と世界の行方を秘めた 強き魂」

しまった、またアガレスさんお得意の『長い答え』が始まってし

まった。

「親から継いだ剣の腕と 類稀な清き心を持つ 闇の貴公子」
眉を寄せていると、ライディーンが言った。

「それは、クロウリー伯爵の事じゃないのか？」

「アレイさん？ なぜ？」

「アレイさんというのはアレイスターⅡクロウリー伯爵のことだと思っ
ていい？……何故ってクロウリー家は悪魔の血を継いでいると
言われているじゃないか」

「……え？」

思わず素っ頓狂な声が出た。

「何それ。どういうこと？ 悪魔の血って？」

アガレスさんは口元に笑みを湛えるだけで教えてくれなかった。
何も知らぬようだな、と言った時の楽しくて仕方ないといった表情
のままで。

それどころか闇に溶けるように姿を消してしまったのだった。

SECT・10 悪魔の子

「あっ！……帰っちゃった」

困ってふう、とため息をつく、隣で押し殺したような笑い声が出た。

恨めしく深紅の髪の少年を見ると、今度は声を上げて笑い出した。
「だって、だってお前レメゲトンの癖に、召還した悪魔が勝手に帰ったぞ？！ おかしいだろ、それ！」

「……だからお前は未熟者だって言ってるじゃん」
「違う」

楽しそうに声を上げて笑う様はまるきり普通の少年に見えた。
深紅の髪に藍色の瞳のライディーン。シンがアレイさんに似ているのは端正な顔立ちと体格だけで、中身はまったく別のものようだった。

「面白いなあ、お前」

「ありがと」

「ちなみに言うて褒めてないぞ？」
むっとして頬を膨らますと、ライディーンはさらに楽しそうに笑う。

「あーこんなに笑ったの久しぶりだ」

「よかったね」

ぷつとむくれてそっぽを向くと、さらに笑い声が追いかけてきた。
「ライディーンなんて勝手に笑ってるっていいんだ」

「そう言うな。悪魔の子の話を教えてやるから」
その言葉にすぐ振り返る。

「ほんと？」

「ああ。有名な話だ。グリモワール国の者なら誰でも知っている事だからな」

内緒話でもするように屋上の床に座り込み、額をつき合わせるよ

うに向かい合った。

何で座っているのに相手を見上げなくてはならないんだろう。まるでアレイさんを見上げるときのような理不尽さを感じた。

そんな事お構いなしにライディーンは話し始めた。

「初代 ガーネット 炎妖玉騎士団長レティシア「クロウリーが戦の悪魔マルコシアスを使役した事は知ってるだろう」

「うん」

マルコシアスさん自身の事もよく知っている。

彼はガーネット炎妖玉とサファイア碧光玉をひとつずつ嵌め込んだオッドアイが目をひく褐色の肌の勇ましい戦士だった。

「レティシア「クロウリーは生涯独身だった。騎士という道を極め、その結果女として生きることはいくらか諦めたせいだ」

「そうなの？」

それじゃ、今もずっと続いているクロウリー家のヒトたちは一体どこから来たんだ？

その疑問が伝わったようで、ライディーンはにこりと笑った。

「しかし、彼女には子供がいたんだ。ライガ「サイソクラム」クロウリー……レティシアの一人息子だ。」

「ライガって部隊長さんと同じ名前だね」

「そうだな。隊長の名前はそこからとったのかもしれない。レティシアの息子ライガも母レティシアの名に負けぬ無類の剣士だったそうだからな」

「あれ？ でもさ、レティシアさんが結婚してないんだったら、お父さんは誰だったの？」

「公式には不明とされている。でも、当時ある噂がたったんだ」
声を潜めるように、藍色の瞳が近づいた。

「レティシアの息子ライガは、悪魔の子だと」

「……え？」

どういう意味が分からなかった。

父親なしで生まれてくる子供も、『悪魔の子』が意味するところ

も。

「ライガのミドルネーム、サイソクラムはS - A - I - S - O - H - C - R - A - M、綴りを逆にすると？」

「M - A - R - C - H - O - S - I - A - S、えーと……マルコシアス……」

ぽつり、と呟いてはつとした。

マルコシアス

その名前は聞き覚えがあるところではない。

「それがクロウリー家が悪魔の末裔ではないかと言われている理由だ。レティシア「クロウリーは悪魔と交わり、その子を産んだとされているんだ」

「だから悪魔の子？」

「そう、クロウリー家はマルコシアスの血を引く神聖な一族さ」

「そうだったのかあ。今度聞いてみるよ」

褐色の戦士と紫の瞳の剣士にそれぞれ。

マルコシアスさんが変わらずクロウリー家に仕え続けるのはその辺にも理由があるのかもしれない。

アレイさんに対する優しい　きっと本人が聞けば全力で否定するだろうが　態度を見る限り、温かく見守る父親という表現は当たっているかもしれない。

「だからアガレスさんはアレイさんのことを炎妖玉の子、って言ったのか」

「だろうな。ちなみに俺は、爺さんの爺さんの母親だかがクロウリー家の者だったらしい。いわゆる庶子のさらに子孫ってやつ？　だから俺自身は平民だ」

「そうなんだ」

「でもクロウリー伯爵は俺の心のライバルだから」

「ライバル？　何で？」

唐突な言葉に眉を寄せた。

「あの人は15で騎士団に入って20で部隊長になった。レティシ

アークロウリーとクラウド団長に次ぐ早さだ。だから俺はそれを越えてやる」

「でもまだ鴉からすじゃん」

「仕方ないだろう、今年入ったばかりなんだから」

「今年？」

きよとん、と思わず聞き返した。

「ちよっと待て、ライディーン、おまえ幾つだ？」

「15」

「おまえの方が3つも年下じゃないか！ おれは18だ！」

「何だ、いまさら敬えつてのか、レメゲトン様」

ライディーンの藍色の瞳がイジワルそうな光を帯びた。

「別にそうは言わないよ。ただびっくりしただけだよ」

顔の端正さも手伝ってとてもヨハンと同じ年には見えなかった

ヨハン自身かなり童顔で12・3にしか見えないとはいっても。

身長は同年代の少年たちから飛びぬけているだろう。

「へへ。漆黒星騎士団ブラックルビィにしてよかった。まさかレメゲトンと知り合

えるなんてな！ ぜんぜんそうは見えないけど」

そう言って笑う表情は言われてみればまだ幼い気もする。

「俺はもう鷹たかの訓練に参加してる。来年は配属される予定なんだ」

「んじゃ明日の訓練も一緒かな」

「何だ、ラックも来るのか？」

「ライガさんが来いって」

青いバンダナ巻きの豪快な部隊長さんを思い出す。

「そうか、楽しみだ」

「ライディーンも強いんだよな」

「当たり前だ。そうじゃなきゃクロウリー伯爵にライバル宣言なんてしない」

「そうだね」

すごく自信満々なライディーンはやっぱ15歳の少年に見える。

「でもアレイさんもすごく強いよ。この間だって銀髪の……」

そこまで言って口を噤んだ。

銀髪のヒトを幾許もしないうちに床に沈めていたのだから。

暗闇、銀髪、血のにおい　フラッシュバックの気配がして背筋がぶるりと震えた。

「どうした、寒いのか？」

「……違うよ」

その声も震えていた。

訝しそうな顔をするライディーンを尻目に、震えそうになる肩を必死で抱いていた。

SECT・11 ファイアライトⅡリドフォル

次の日の午後は鷹部隊の稽古初参加だ。ルークとロナルドとジン、それにライディーンの4人と共に鷹の練習場へと向かった。

稽古場の扉をあけると、すでに何人もの騎士が激しい打ち合いをしていた。

その中に金髪のファイさんの姿があった。

こちらに気づいて打ち合いをやめ、優しい笑みを湛えてやってきた。

「いらつしゃい。4人はすぐに準備を始めていつものように訓練に移ってください。ラック、あなたは今日見学です。簡単な紹介と案内をします」

「お願いします」

深く頭を下げると、ファイさんはにこりと微笑んだ。とても笑顔の似合う人だ。

隣に並んで歩き出したが、それほど見上げなくてもいいということとはクラウドさんより少し背が低いくらいなんだろう。

「鷹部隊は、漆黒星騎士団の中でも中心的な戦力となる、剣技に優れた部隊です。現在所属は156名、ライガⅡアンタレス部隊長の下につく5名のリーダーによって統率されています」

「ファイさんもリーダーなの？」

「いえ、私は未熟者ですから一隊員に過ぎません。配属されてからまだ3年目ですし、ライガ隊長のようにもって生まれた天賦の才もありませんから」

「でも騎士団に入ったんだからやっぱり強いんでしょう？ ヴィツキーだって強かったし、えと、おれに剣を教えてくれた元騎士のヒトも強かったよ」

「そうですね、一般の人に比べたらかなり戦闘力は高いでしょうね」
ファイさんは苦笑した。

「騎士団は王国を、ひいては国民を武力から守るためにあります。そのために鍛錬を欠かさず、常に戦闘を行える状態にいる事が大切ですから」

守るため　その言葉にはとても聞き覚えがあった。

唐突に聞いてみたくなった。

「ファイさんはどうして騎士になろうと思ったの？」

自分がレメゲトンになる事を選んだように、きっとこのヒトが騎士になる時も強い意思があったはずだ、と思った。

自分以外のヒトがどんな風に道を選んできたのかを知りたかった。
「どうして、というのも難しい質問ですね」

ファイさんは一瞬立ち止まって首をひねった。

その横顔をじっと見つめていると、彼は一瞬至極まじめな顔をして答えた。

「憧れた人が騎士だったから、ですかね」

「憧れた人？」

聞き返すと、金髪の騎士はまたいつもの笑顔に戻っていた。

「命の恩人とも言いましょるか。私は王都からずっと離れた山奥で育ちました。そのせいか幼い頃は少々無鉄砲でしてね、一度とても危険な目に遭いました。それこそ死ぬ寸前まで追い詰められたんですが……そんな私を助けてくれた人がいたんです」

「その人が騎士だったの？」

「はい」

ファイさんはにこりと微笑んでからもう一度歩き出した。

歩幅に合わせてゆっくりと歩を進めてくれる優しさを感じながら、隣についた。

「名も知らない騎士でしたが、その勇壮さと機知に子供ながら憧れたのが騎士道のはじまりです。そうですね、彼が覚えているのならもう一度会いたいものです。そして騎士になった自分を見て欲しいと思いますね」

「そうかあ。会えるといいね」

「ありがとうございます」

憧れるヒトがいるのはとても素敵な事だなと思う。

自分にもいるだろうか？少し考えてみた。

ねえちゃん憧れるとは少し違う。一緒にいたい。心配かけたくない。甘えたい。ねえちゃんは世界の全てだから。

アレイさんは？うーん、できればああはなりたくない。剣の腕は素晴らしいけど、イジワルだし口が悪いし、憧れるとはちょっと違うだろう。

じい様やベアトリーチェさん？いや、それも少し違うだろう。

他は……？

「うーん、おれはきつとマルコシアスさんみたいになりたいな」

「マルコシアス……と言うと戦の悪魔のですか？」

「そう。強くて綺麗で、優しくてあったかい。あんな風になりたいかなあ」

「戦の悪魔とは、大変な目標ですね」

「ファイさんはくすくすと笑った。

「うん、本当に大変だよ！」

でもいつかあんな風になれば。

オッドアイと不敵な笑みを思い出して、微笑んでしまった。

ルークたちは大人の騎士たちの打ち合いに混じっていた。

そうすると黒猫ルークと狐のジンの小柄さはすぐ目立つ。大丈夫なんだろうかと見守っていると、ルークは自分の倍もありそうな相手と向き合っている。

「今年はとても優秀な人が多いんですよ。特にルークとライディーンは他の鴉部隊員からは飛びぬけています」

「へえ」

見てみると、ルークは素早さと太刀の鋭さを生かして早々に勝負を決めた。

大人の騎士相手に、しかもかなりの体格差があるというのに信じられないような早業だった。

「ルークは今年になつての伸びが凄まじいですね。もう2・3年もすればリーダークラスの实力を手に入れると思いますよ」

「ライディーンは？」

「彼は本当に……天才です」

ファイさんの視線の先には、15歳とは思えない長身で木刀を構えた紅髪の騎士の姿があつた。

「今年の入団試験を文句なしのトップで合格しました。これまで剣術大会に出場した記録もなく、こちらとしては全く予想外の結果です。何より他にない独特の剣術を学んでいます。詳しいことは彼自身もよく知らないそうです。祖父が剣の達人で、その方から教わったとか」

「ふうん」

見ていると、試合が始まった。

ライディーンは両手で剣を持っている。

自分のように力が無い者ならともかく、普通は片手に盾を持つため剣も片手で扱うのが基本だ。アレイさんも普段左手だけで剣を持っている。とはいえ、盾をもっているところは見た事がないのだが。

しかもライディーンのもつ木刀の切っ先はだらりと地面に下がっていた。あれでは構えも何もない。防御をする気がないのか？

と、思った瞬間相手が切り込んできた。

危ない、と思う間もなく頭上に木刀が振り下ろされた……と思ったのだが。

頭に当たる直前で木刀がぴたりと止まった。

「ライディーンの勝ちです。先に胴に攻撃が入りました」

「！」

切っ先を下げていたのは防御を放棄したわけではない。

下から切り上げるようにわき腹を狙ったのだ。ガードを下げ、わ

ざと上から攻撃させて下からの攻撃を見づらくするために。

紅髪の剣士は一礼すると武台から降りた。

「すごいね。ああいうのは初めて見たよ。両手で剣を持つ人って少ないんじゃない？」

「そうですね。とても珍しい型です」

ファイさんは頷いた。

「しかし他にも様々な剣を使う騎士がいますよ。中でも珍しいのは隊長ですね」

「ライガさんが？」

「はい。隊長は無流です。独自流と言うか型がないというか……それこそ天性の格闘センスと身体能力、それに動体視力を駆使して通常ではありえない攻撃を仕掛けてきます」

「へえ、それも見てみたいな」

「そのうち見られると思いますよ。今日はクラウド団長に用があるとかで訓練には参加していませんが、明後日ラックが来る時にはいると思います。」

「楽しみだ！」

最近楽しみが多い。

強くなるために鍛錬すること、今まで知らなかったことを教わるのがこんなにも楽しいとは思ってもみなかった。

そしてその訓練を共有する仲間がいるという事実も。

不謹慎な事だが、とても楽しかった。

朝早起きしてヴィッキーたちと秘密特訓をし、午前午後は様々な場所で稽古、夜は一人屋上で千里眼の練習。その後は倒れるように眠る日々が続いた。

もちろんそれでも、心の片隅には今も東の都トロメオでセフィロト国の侵入を防いでいるねえちゃんたちの事がわだかまっていた。今どうしているんだろう。怪我をしていないだろうか。

毎晩、千里眼の練習を終えた後に夜空に向かって祈りを捧げた。

みんな無事でいますように！

SECT・12 コイン

ブラックルビー

漆黒星騎士団の訓練所に来てからはや2週間が経とうとしていた。最近では一般志願兵の訓練も同時に行われるようになっていた。その人数は数百人にも上り、騎士団のヒトたちが講師として呼ばれることも多かった。

とはいえそれは先輩たちの仕事であり、からす鴉と行動を共にする自分にはあまり影響が無い。

他のことは何も考えず、朝から晩まで稽古をする日々。毎日が充実していて自分が少しずつ強くなっている感覚があった。

一度だけ戦況は拮抗しているという情報が噂として入ってきた。軍は軍で、レメゲトンはセフィラと互角の戦いを繰り広げているらしい。

しかしセフィラは10人もいるのだ。戦線に立つねえちゃんとアレイさんがいくら強いと言っても二人だけではいつか押されてくるだろう。

早く行きたいという気持ちと、まだ早いという現実の狭間で心が破れそうになる毎日を過ごしていた。

そんなある日だった。

その日も夢を見ていた。ここの所ずっと同じ夢だ。

とても暗い部屋で壁がどこにあるのかも分からない。周りには数人の大人たちがいる。みな黒いフードを目深にして顔は分からない。長いローブは全身を覆っていて、男女の区別すらつかなかった。

そして目の前にあるのは黒々とした魔方阵。直径3メートルはあろうかというそれは、周囲に灯された蠟燭の光に照らし出されて禍々しい空気を放っている。

自分はそれを見つめている。

紋様に見覚えはない。魔法陣の辺縁に所狭しと書かれている文字が古代文字アルファベットだと言う事以外何も分らない。

するとふいに両腕をつかまれ、地面に伏せられる。

抵抗する間もなくその魔方陣の中央にうつぶせにさせられ、両手両足を鎖で拘束された。大の字にうつぶせる形で動けなくなる。

床が冷たい。鎖は太く全く身動きが取れそうにない。

叫ぼうとすると口に嚙を噛まされ、抵抗できない状態に陥った。凄まじい恐怖が全身を駆け抜ける。

周囲の大人たちは言葉を発しない。周囲の蠟燭が風も無いのにふわりと揺らめく。

蠟燭の明かりに煌くものが照らし出された。

銀のブレイドがこちらに向けられていた

はっと目を覚ます。

もう朝だ。

汗に濡れた全身をベッドの上に起こし、辺りを見回すとすでに同室の3人はいなかった。

「みんなもう練習に行っちゃったのか」

ふう、と一息つく。どうやら寝坊してしまったようだ。

起きて着替えようとして違和感に気づいた。

何かが足りない。

「……………」

気がついて顔から血の気がさつと引いた。

コインのペンダントが首から消えていた。

心臓の音が耳の傍にある。

呼吸が苦しくなった。

「昨日の夜……はあったよね。」

千里眼の練習をしたから。

だいぶ使えるようになった能力でずいぶん長い間遠くの町を観察していたんだ。

調子に乗ってやりすぎて、ふらふらになってしまっただけで歩けなかったからライディーンに部屋まで送ってもらって……その後倒れるように眠ってしまったんだ。

ペンダントは？

うん、首にかけてあった。

じゃあその後だ。

眠っている間に誰かが盗った？ 一体誰が？

いずれにせよコインを失くした、もしくは盗られたとなると大問題だ。

「誰に言ったらいいんだ……？」

ライディーン？ 違う。

ヴィッキー……じゃなくて。

「クラウドさんっ！」

箒手をするのも忘れて、短衣にサンダルという姿で部屋を飛び出した。

どうしよう。どうしよう。

恐ろしい考えが頭の中をぐるぐる渦巻いている。

訓練所内を一気に駆け抜け、以前教えてもらった騎士団長の居住を目標にした。

到着した時にはすでに息が切れていた。苦しい。もう走ったせいなのか恐怖が原因なのか分からない。とにかく心臓が破れそうなほど飛び跳ねている。

膝に手について息を整えていると、聞きなれたテノールが降ってきた。

「ラック。どうしたんだい、こんなに朝早く」

「クラウドさん！」

姿を見た瞬間に泣きそうになった。

尋常でない様子に何かを感じ取ったらしい。

「……何かあったのかな、可愛いラック。落ち着いて」

漆黒の騎士服に身を包んだ団長さんは、なだめるように肩に手を置いた。

「あの、コインが、アガレスさんとフラウロスさんが……！」

「ゆっくり話すんだ」

「失くなった、の」

かろつじて紡いだ言葉に翡翠の瞳が大きく見開かれた。

「朝起きたら……コインが無くて……」

「それは他の誰かに言ったかな？」

「ううん、クラウドさんに、言わなくちゃと思って……」

「いい判断だ」

クラウドさんはぼん、と頭に手を置いてくれた。

その瞬間に泣きそうになったのをぐっところえた。

「中に入って待っていて。すぐ戻る。そうしたら詳しい話を聞かせて欲しい」

「わ、分かった」

震える声で返答した。

クラウドさんはもう一度頭を撫でると、黒いマントを翻してどこかへ向かった。

クラウドさんの部屋でじっと待っていた。

自分たちの共同部屋とそう変わらない造りだったが、客間が一つ付いている事だけが違っていた。大量の武器が置いてあったけれどそれらを見る余裕もなく、ただじっとソファにうずくまっていた。

コインが無い。

アガレスさんに会えない。フラウロスさん呼び出せない。

そんな自分はもうレメゲトンじゃない……？

恐ろしい考えに肩が震えた。自分の体を抱くように肩を掴んで震えを止める。

どうしたらいい。自分は一体何をしたらいい？

「助けて」

紫の瞳を思い出しそうになってぶんぶん頭を振った。

ここにあのヒトはいない。目の前の選択肢は自分で減らすしかないんだ。

よく考えるんだ。

まず、何故コインを盗る必要があったか。

理由を考えたとき最もあり得るのは敵、つまりセフィロト国の仕業だということ。しかし、セフィラでもない限りこの王都の側壁に沿うよう作られた訓練所には入れない。盗られたのは夜中だからセフィラは天使を召還できない時間だ。

他に考えられる理由としては、高く売れると思った、国を脅そうとした、もしくは自分に対する個人的な恨みなどがあるが、どれもぴんと来ない。ここが騎士団の訓練所である以上忍び込むのにはかなりの度胸と強い動機が必要だろう。

すると、考えられるのは……

コンコン

その時ドアをノックする音がした。

「はい」

「失礼します」

入ってきたのはオレンジの髪の女性　鴉^{かいす}リーダー、ヴィクトリ

アークラークだった。

「ああ、ラック。大丈夫か？団長に体調が悪いと伺って服を持ってきたのだが……顔色が悪いな。無理をせず休んだ方がいい」

「ありがとう」

体調が悪いわけではなかったが、本当のことは言えなかった。ひどく心苦しい事ではあった。

しかし、ヴィッキーもコイン盗難の容疑者である事は間違いない。

特にあの時同じ部屋にいたのだから最も疑ってかかるべきは彼女とメルル、シアの3人だ。

「鷺^{さぎ}部隊長には私から言っておこう」

「お願い」

そうして見上げたヴィツキーの顔色が悪い事に気づいた。

「ヴィツキー？ おれよりヴィツキーの方が辛そうだよ？ だいじょうぶ？」

「ああ、少し動悸がするな。いや、大丈夫だ。休めばすぐ……」
そこまで言ってヴィツキーはふらりと床に崩れた。

SECT・13 ヴィクトリア「クラーク

「ヴィツキー！」

慌てて叫んだ瞬間に気づいた。

ヴィツキーの手に握られているのは自分の箆手だ　裏に悪魔の羽根を縫いつけた。

縫い付けた後体調を崩してしまった、と言ったアイリスを思い出した。

「箆手、離して！　おれにちょうだい！」

「あ、ああ……」

箆手をひったくるように奪ってぎゅっと握り締めた。

「この箆手には悪魔の加護が入ってる。ヴィツキーは悪魔に対する耐性がないから少し気分が悪くなったんだ」

コインを盗ったのはヴィツキーじゃない。悪魔の耐性が全く無い彼女がそんな事をすれば今朝稽古など出来るはずが無い。

つらそうな様子のヴィツキーを自分の代わりにソファに座らせた。

「すまないな、私の方がこの体たらくだ」

「違うよ、おれのせいだよ」

左手でヴィツキーの肩に触れそうになってはっと手を引く。

これを彼女に近づけるわけにはいかない。

右手を埋め込まれたコインにかぶせるよう押し当てて、唇を噛んだ。

悪魔の気が人間にいい影響を与えない事を忘れてはいけない。アイリスが体調を崩したと聞いて戒めとなっていたはずだったのになぜ忘れていたんだろう。

コインが体に埋め込まれてしまった自分自身はすでに耐性を持たないヒトたちにとって毒でしかないのに

「どうした、ラック。泣きそうな顔をしているぞ？」

それこそ蒼白な顔をしたヴィツキーの姿に胸が裂かれる様に痛む。

「それは私には話せない事なのか。もしよかったら相談してくれないか」

ヴィッキーの優しい心が裂かれた胸の傷にしてみた。

「あのね、ヴィッキー。実はね、昨日の晩……おれのコインが盗まれたんだ」

「コインというと悪魔のコインか?!」

「うん。だから慌ててクラウドさんに報告に来たんだ」

「何と言うことだ……!」

ヴィッキーは額に手を当てた。

「一体誰がそんな事を」

「おれも信じられないけど、たぶん鴉部隊かいすの中にいると思うんだ。

夜中は天使を召還できないからセフィラの仕業じゃないし、一般のヒトがああ宿舎に忍び込んでまで盗る理由は無い」

ヴィッキーの深緑の瞳が大きく見開かれた。

「……信じられない。鴉からすの中に盗人がいるなど!」

答えられなくて口をつぐんだ。

しかも自分がコインを持っている事を知るのはヴィッキーとライディーンのみだ。

となると最も疑わしいのはただ一人。

「少しだけおれに任せてくれる? 心当たりがあるんだ」

ほんの少しだけれどクロウリー家の血を引いていて、あの日の晩おれを部屋まで送ってくれた。これ以上の理由は無い。

しかし一番疑いたくなかった。

いつも千里眼の練習に付き合ってくれる。夜遅くまで一緒に屋上に残ってくれて茶化したりもするけど励ましてくれる。

この訓練所に来て一番仲良くなったのがライディーンだったから。加護のある羽根が縫いつけられて籠手を握って、唇をかみ締めた。

しばらくしてクラウドさんが戻ってきた。

「待たせたね。ああヴィッキー、ありがとう」

ソファに身を預けていたヴィッキーはさっと立ち上がった。

一瞬足元がふらついたがすぐに姿勢を正した。

「どうしたんだい、あまり体調がすぐれないようだが」

「いえ、何でもありません」

「悪魔さんの気に当てられちゃったんだ。ヴィッキーはすごく弱いみたい」

隠す事ではない。

むしろヴィッキーの無実を主張しておかなくてはいけない。

「コインも普通のヒトには毒だつて聞いたよ。盗つたとすればそれなりに耐性のあるヒトじゃないと無理だ。だから……」

「ヴィッキーには無理だ、と言いたいんだね」

こくりと頷くと、クラウドさんは優しく微笑んだ。

「ラック、君はとても優しい子だ。そして、非常に賢い子だ。もうだいたい何か見えてきているのだろうか？」

「心当たりがあるんだ。少しだけ待つて欲しい。何とかしてみるから」

「仕方のない子だね」

クラウドさんは金髪をさらりと揺らして極上の笑みを湛えた。

「大丈夫、王には既に報告した。事件解決と加害者への罰則権限を君に一任されるそうだ。セフィロト国の干渉、及び国内反レメゲトン組織の介入はないものとする」

「うん、たぶんそうだよ。きつと深い理由なんて無いと思う、それにあれは……盗んだからつて悪用できるものじゃないよ。それはおれが一番よく知ってる」

既に自分のものでなくなってしまった左手を包帯の上からぎゅつと握んだ。

「期限は一週間だ。その間に犯人と証拠を挙げコインを奪還せよ、というのが王からのご命令だ」

「分かった。」

唇を結んで、真摯に頷いた。

ヴィツキーと二人朝日の中すぐに宿舎へ向かった。

すでにいくらか訓練に参加する一般志願兵が集まり始めている。そんなヒトたちに軽く礼をしながら舗装されていない道を急いだ。

「まさかこんな事態になろうとは。すまない、ラック」

「何でヴィツキーが謝るの？」

「部下の不始末は上司の責任だ。私は鴉のリーダーだからな、その全ての責を負っている」

時にヴィツキーは難しい言葉を使う。

それはアガレスさんの複雑な組み合わせの言葉とは少し違う分かにくさで、自分はまだ知らない常識を当たり前前に下敷きにしたような、そんな感覚だった。

その常識は知りたいと思う事もあるが、知ってしまうと自分の中の価値観とか信条とか、そんなものが崩れてしまいそうで怖かった。「それよりも……謝るのはおれのほうだよ」

「なぜだ？」

「おれが持つものにはヴィツキーにとってよくないものが多いから。おれの傍にいたらまたきつと体調を崩すよ」

コインのペンダントは外せばいい。箆手は身につけなければいい。でも、左手に埋め込まれたコインは消せない。

生きている限り自分は悪魔の気を発し続ける。耐性がない普通のヒトに長く触れている事はできないのだ。

負わされた枷に初めて気がついた。

この呪われた左手がある限り自分は悪気を発し続けるのだ。

「ごめんね、ヴィツキー」

存在自体が毒だから。

もう何も考えずヒトに触れる事はできなくなるだろう。この先ずっとこの左手の悪魔を抱えて苦悩しながら生きていくのだろう。

その瞬間に例えようの無い寂寥感に襲われた。

星の数ほどいるヒトの中で自分だけが孤独なんじゃないか、今隣を歩いているヴィッキーですらとても遠い世界にいるんじゃないか

「何を謝る事がある。お前は堂々としていればいい」

「でも」

反論しようとする、情の深い濃い緑の瞳が見下ろしていた。

慈愛の色に言葉を失った。

「私には妹がいる。年が離れていて、今年で10歳になるんだが、私と違っていかんせん体が弱いのだ。この国は、今は夏だから暖かいが冬が来れば寒くなる」

ヴィッキーが一体何を言いたいのかわからず首をかしげた。

「私の実家は北の都カインのさらに北にある。冬には地面が雪で覆われ池は凍りつくような土地だ。体の弱い妹はすぐに体調を崩してしまうんだ」

懐かしむように目を閉じたヴィッキーはとても優しい顔をしていた。

「だからと言って妹は冬を嫌わない。真っ白な雪が降るのを見ては喜んでいるし、氷柱を見ては欲しいとこねる。寒さに自分の体が堪えられないと知っていたとしてもね。いつもなぜだろうと不思議で仕方がなかったんだ。自分に害を与える寒さを嫌うどころか待ち遠しくさえ思っている」

そう言つてヴィッキーはにこりと微笑んだ。

「今なら少しその気持ちが分かるよ」

「何故？」

「私がお前を気に入っているからだ」

「……え？」

何のことか分からなかった。

それでも彼女は微笑みのうちにコインの左手を掴んだ。

振り払おうとしたが、強い意思をともした深緑の瞳を前に強い行動には出られなかった。

「自分にとって有害だという事は好き嫌いには全く関係ない。お前の魂は穢れなく強い。いつも前だけを見つめて進んでいく不屈の魂だ」

ヴィツキーの顔を無心に見上げていた。

一言一言が先ほどの傷に染み入って少しずつ癒されていくのが分かった。

「確かにお前はレメゲトンで、人間の健康に害を与える悪魔の印を多く持っている。だが、それは自然が私たちに与えるものの一部だ。寒さへの耐性が人によって違うように、悪魔の気に対する耐性も人によって違う。確かに強かったらよかったかもしれない。だが、それはお前のせいではないだろう？むしろ私が生まれついての問題だ」

ヴィツキーは隣にいた。

同じ世界で微笑んでいた。

「ラツク、そんな風に考え込むな。お前にはそんな顔似合わない」

言葉を返せなかった。胸の辺りに何かがつつかえて邪魔しているようだった。

「大丈夫、コインもすぐに見つかる。盗った方も何か理由があったんだろう。お前が諭してやればちゃんと返してくれるさ」

コインの埋め込まれた左手を強く握って、真直ぐに瞳の中の光を見つめてヴィツキーはそう言った。

自分はきつとその時世界で一番間抜けな顔をしていたと思う。

でもきつと世界で一番温かい言葉をかけられていたはずだ。

SECT・14 夢の先にあるもの

宿舎に到着すると、すでにみな稽古に移っていた。

「どうする、ラック。私はすぐに合流するつもりだが」

「うん、午後から参加するよ。先に行つてて！」

ヴィッキーと別れていったん部屋に戻った。

自分のベッドの上はかなり乱雑にシーツとタオルが撒き散らされていた。寝起きで慌てて部屋を飛び出したせいだろう。

簡単に荷物を整頓してベッドの端に座る。

息をつくとどつと疲れが出てきた。

「……ライディーン。本当にお前なのか？」

紅の髪と端正な顔に似合わぬ少年のような笑顔を思い出す。

夜中、練習のために屋上へでるといつでもあの微笑で迎えてくれた。孤独な夜に隣にヒトがいるというのはそれだけで心強い。

アガレスさんの言葉に首を傾げているとライディーンは楽しそうに笑い、未熟者だとバカにする。千里眼の使いすぎで疲労すれば優しい言葉をかけてくれる。

そのままベッドに倒れこんだ。

ねえちゃんちのベッドと違って弾力があまり無いマットの上で、体は2・3度跳ねた。

「どうして」

こんな気持ち初めてだった。

よりにもよって、どうして彼なんだという疑問が胸の中を渦巻いて、とても切ない感情が押し寄せてくる。何かを無理やり奪われたような喪失感　ヒトはこれをなんと呼ぶのだろうか？

わめき散らしたいような、でも部屋に閉じこもって誰とも話したくないような、そんな理解不能な欲望がぐちゃぐちゃに混ざり合っている。

アレイさんがライバルなんだって言っていた。強くなりたいんだ

って言ってた。

それなのに

「何だよ、もう」

自分はよっぽど疲れていたんだろうか。

どうやらそのまま眠ってしまったようだった。

また、夢を見た。

ここのところ連続で見ている夢の続きだ。

壁まで光が届かない闇に満たされた部屋の中に浮かぶ、禍々しい魔方阵。揺らめく蠟燭の炎が微かに周囲を取り囲む黒衣の大人たちを浮かび上がらせている。

自分はその中央にうつぶせの状態で大の字に拘束されている。

身につけているのは薄い短衣だけ。肌に触れる石の床はひどく冷たかった。

轡を噛まされ両手足を頑丈な鎖でつながれている今、外部からの干渉に抵抗することはできない。

凄まじい恐怖が全身を貫いた。

風も無いのにふわりと揺れる蠟燭の明かりを、銀のブレイドが反射した。

一体これから何が起るのか分からない。叫ぼうとしたが声は出せず、ただ喉から湿っぽい呻きが漏れただけだった。

銀の煌きがこちらに向けられる。

逃れる術はない。

動けない。

次の瞬間、仰け反るような激痛が背に走った。

「うわああっ!!」

ベッドから飛び起きた。

息が荒い。心臓がものすごい速さで脈動している。そして、背の逆十字傷が痛んだ。

痛みに耐えるようにして自分の肩を抱く。

夢の中の恐怖が舞い戻ってきて思わず震えた。

「何なんだ……」

いや、もう心の片隅では分かっている。

この感覚は過去へのフラッシュバックと同じだから。

「あれはおれの過去……なのか？」

ずきん　ずきん

こぼれた問いは誰に答えられる事も無く部屋の空気に紛れていった。

壁に囲まれて寒さに凍えながら小さな窓に手を伸ばしていたのは自分自身なのか？春を想っても外に出られない寂しさを必死で忘れたのとしていたのも、あの闇の中で銀に光る刃を突き立てられていたのも……？

「つつ！」

あの痛みを思い出してまた総毛だった。

怖い。怖い。

頭の中で警鐘がなっている。思い出しではいけない、と。

暗闇、ブレイド、血の匂い、銀髪……これは自分のフラッシュバックを呼び覚ます鍵になるものだった。それはこれまでの経験で分かっていることだ。

これらのうち暗闇とブレイドは既に夢の中に登場している。

それでは銀髪のヒトがこの先夢の中に現れるのか？一体誰が？

「ルシファ」

唐突に漏れた自分の声に驚いた。

これは最初に見た夢で自分が遠い月明かりに向かって呟いた言葉だ。

そして、これは自分のミドルネームでもある。

「グレイシャー」ルシファ「グリフィス」

セフィラの^{マシヤン}手品師、ゲブラが告げた自分の本当の名前を声に出してみる。

全く聞いた事のないものだったが、心は敏感に反応した。記憶をなくしても魂はその名を覚えていた。

もう呼ぶものなどいない名前だ

そう思っではっとする。

なぜいないんだ？

あの時確かに幾人もの大人が自分を取り巻いていたし、自分にだって両親や、もしかしたら兄弟だっていたかもしれないのに。

どうして誰もいないんだ？

それはきつと自分の記憶が抜け落ちた部分、夢の続きが物語るはずだ。

開けてはいけない扉はすでに開きかけている。

ねえちゃんが連れ去られて監禁されていた屋敷に、何故誰もいなかったんだ？ずいぶん前に捨てられたようにぼろぼろだったのは何故だったんだ？

夢の中のあの真つ暗な部屋はあの屋敷のどこかに存在しているのか……？

「うあつ！」

凄まじい頭痛が襲ってくる。

思い出してはいけない。

全身の細胞がそう叫んでいる。

知りたい 知ってはいけない

「く……」

知ってはいけない。

これ以上進んではいけない。

扉を開けてはいけない。

「うああああ！」

オモイダシテハ ナラナイ

あまりの激痛に抵抗できず、弾けるように意識を失った。

「ラック？」

肩を揺らされて気がついた。

「大丈夫か。ずいぶん苦しそうだったぞ。やはり休んでいた方がいいのでは？」

目を開けるとヴィッキーの深緑の瞳が覗き込んでいた。

「あれ……？」

「もう午後の訓練はとくに始まっている。なかなか姿を見せんの様子を見に来たのだ」

「うわ！ ごめん！」

思わず跳ね起きた。

頭がぶつかりそうになってヴィッキーはひよい、と身をひいた。

「休んでいる。ここに来てから慣れぬ環境で気苦労も多かるう。それに今朝の事もある……一度、ゆっくり休んだ方がいい」

そんなことないと言いたかったが、手足がうまく動かない。フラッシュバックに遭ったときのように全身が疲弊していた。

こんな時は、ねえちゃんに会いたい。

出来事全部を、夢の内容を全部聞いてもらいたい。

そして、何か答えが欲しい。

「ありがとう、ヴィッキー」

でも、ねえちゃんは今ここにいない。

自分で何とかしなくちゃいけない。

コインの事も、過去の事も。

とても不安だった。

本当に全部解決できる力が自分にあるんだろうかって。ちゃんとコインを盗んだ相手を探し出して王様に報告できるんだろうかって。それでも今は前に進むしかない。

他に道などないのだから。

SECT・15 ライディーン＝シン

夜中になるのを待って屋上に向かった。

扉を一枚開けると、昼の暑さとは打って変わってひんやりした空気が包み込んでくれた。

見慣れた屋上の景色の中に、いつものように見慣れた紅髪の剣士の姿がある。

「いつもより遅かったな、ラック」

「うんちよつと」

じつと藍色の瞳を見つめた。その中の光に問いかけるように。

その視線に気づいてライディーンは少し首を傾げた。

「どうしたんだ？ 今日には練習しないのか？」

これはわざと言ってる？それともおれに問い詰めて欲しいか、もしくは……本当に知らないのか。

3番目である事を願いながら一つ大きく深呼吸した。

そして静かに口を開く。

「ねえ、ライディーン」

「何だ？ レメゲトン」

「少しだけ、散歩しない？」

その言葉にどんな空気を受け取ったんだろうか。

何かを考えたような間を置いて、ライディーンはいいよ、と言った。

宿舎を出たところでライディーンに左手を差し出した。

包帯は巻いている。籠手もつけている。

「手、つないでいい？」

「うえっ?!」

なぜかライディーンはひどく驚いて、それでも恐る恐る手をとった。

アレイさんの温かい手とは違って少しひやりとしていた。コインの左手で相手の右手をぎゅっと握って、ゆっくりと歩き出した。

今までだったらすぐに聞きたいことを訊ねられたのに、何故だか今日は言い出すのが憚られた。

「ねー、ライディーン」

「……何だ？」

「何で騎士になろうと思ったの？」

目を合わせずに前を見て、本題には全く関係のない、そんな言葉が口をついた。

鷺部隊の宿舎を右手に見送って、訓練所の出口に向かって歩いていった。

「前に言っただろ。俺はクロウリー伯爵に負けなくなかったんだ」
「何故？」

「だって同じマルコシアスの血を引く子孫なんだ。相手は公爵家の嫡子でこちらは平民……それはおかしいと思わないか？ 剣の腕だって負けない。小さい頃から爺さんに習ってきた」

いまいち言いたい事がつかめずにふと藍色の瞳を見上げた。

ライディーンは右手に力を込めた。

「なぜ同じ血なのに彼は伯爵で俺は市民なんだ？ 俺はそれに耐えられなかった。いつかあの人を越えてやと思っていた。世間を見返してやろうって」

「ごめん、よく分からないよライディーン。何で貴族になりたいの？ 何でアレイさんを越えたいの？ 世間って？」

言葉の意味が分からなかった。

いや、知っている言葉ばかりだったのに、並べ方を変えたただでこんなにも分からなくなるものなんだと思った。

ライディーンは自嘲気味に微笑んだ。

初めて見せるその表情はどこか悲しみを含んでいた。

「きつとラックには分からないだろう。お前だってグリフィスの末裔なんだから。何一つ苦労せず地位を持ったものにこの気持ちは理

解できないさ」

つないだ左手がさらに強く握り締められた。

それがライディーンの強い気持ちを表しているようで胸に響いた。「俺は自分の実力ならクロウリー伯爵にだって負けない自信がある。チャンスさえあればレメゲトンの仕事だってこなしてみせるさ。でも、生まれた家が違うだけで、俺にはその機会さえ与えられないんだ。こんなおかしいことはないだろう？」

生まれた家のことを嫌っているんだろうか。貴族に生まれたかったんだろうか。それともレメゲトンになりたかったんだろうか。

ライディーンの言う事は分からない。

「分からないよ」

心の底から。

ただ単純に理解できなかった。

「おれはグリフィスの名前を貰おうと貰うまいとおれだよ。ねえちやんが拾ってくれて、名前を呼んでくれた瞬間からおれはラックだ」
グレイシャー＝ルシファ＝グリフィス。

聞かれて答える事はあっても、自分から名乗る事など一生無い名だろう。

「本当の名前？」

ライディーンが眉を寄せた。

「うん。この間あるヒトがおれの本当の名前を覚えてくれたんだ。きつとその名前は一生使わないだろうけど」

「どういうことだ？ 何を言ってるんだ、お前」

「おれ、過去が無いんだ。15歳より昔の事は覚えてない」

さらりと零した言葉にライディーンが息を呑んだのが分かった。それを無視して続けた。

「でも今はそんなことでもいいんだ。なあ、ライディーン。お前は一体どうしたいんだ？ クロウリーの名が欲しい？ レメゲトンになりたいの？ それともただ単純にアレいさんに勝ちたいだけなのか？」

詰問するつもりではなかった。

ただ分からなかっただけ。単純な好奇心でこの紅髪の剣士が求めるものを知りたいと思っただけだった。

ライディーンは藍色の瞳を闇に向けた。

微かに靴音のする砂利道をただゆつくりと歩いていた。

「しいて言えば、自分の存在を世に知らしめたいんだ。俺はこれだけの事が出来るんだぞって、みんなに知って欲しい」

「でもそれは、もうみんな知ってるよ？」

ファイさんが、ヴィツキーが、鴉カラスのみんながライディーンの実力を認めている。

自分だってそう思っている。

それでもライディーンは首を横に振った。

「違う。そういうことじゃない。世間一般的にって意味だ。そうだ、名手を手に入れたんだ、俺は」

「めいせい？」

きょんと首を傾げると、ライディーンは困ったように笑った。

「そついやお前、頭弱いんだったな。難しい話して悪かったよ」

もうこれ以上この話を続ける気はないようだ、つないだ手がふと緩んだ。

が、離れないようにぎゅっと握った。

藍色の瞳が不思議そうに見下ろしている。

「ラック？」

「あのね、ライディーン」

「何だ？」

「もう一つ、どうしても聞きたい事があるんだ」

もうずいぶん歩いてきた。

その間ずっと手をつないでいた。

リースのくれた悪魔の左手と埋め込まれた悪魔のコイン、それに籠手にはマルコシアスさんの羽根も縫いつけてある。

ライディーンはこの間に相当な量の悪魔の気を受けていたはずだ

った。

しかし、彼に全く変化は見られない。

多少の悪魔耐性があると思っただろう。

ぎゅっと手を握り締め、藍色の瞳を見上げた。

ひどく戸惑った顔で見下ろしている紅髪の少年がどう返してくるのか見当もつかなかった。

できれば思い違いであって欲しい。

「アガレスさんを知らないか……？」

「え？」

ライディーンは素っ頓狂な声を上げた。

「今朝どっかに行っちゃったんだ。おれを置いて消えちゃった」

今はコインがない胸元に右手を押し当てた。

「おれのコイン、知らないか？」

もう一度問いながら、闇に溶けそうな藍色の瞳を見上げた。

SECT・16 やるべきこと

ライディーンは真直ぐに自分を見下ろしていた。その視線を正面から受けて、見上げ返した。

静寂が流れる。緊張で皮膚が切れそうなくらい張り詰めている。

心臓の拍動がひどくゆっくり、大きなものに聞こえた。

もう聞いてしまった。後戻りは出来ない。

何より長い一瞬の後、ライディーンはため息を吐いた。

「何だ、さっきから様子がおかしいと思ったら……」

ライディーンは空いたほうの左手でこちらの首筋に手を伸ばしてきた。

まるで何かを探すように、するりとくすぐったい感触があつて手はすぐに離れていく。

「失くしたのか、コイン」

口をつぐんで答えないでいると、ライディーンはもう一度ため息をついた。

「残念ながら知らない。昨日の晩、部屋まで送つてやった時にはまだあつた。それだけは断言できる」

真摯な瞳に嘘の欠片は見当たらなかった。

その瞬間、急に力が抜けた。

「悪いな、役に立てなくて」

「……よかった」

ライディーンじゃなくて。

先ほどまでの緊張感がぷつりと切れて、じわじわと安心感が心に広がっていった。

疑ってしまった事をすごく後悔した。

「ごめん、ライディーン」

「何が？」

「お前が盗つたかと思ったんだ」

そう言うと、ライディーンは目を大きく見開いた。

それを見ていられなくてぱっと手を離して背を向けた。

「今朝起きたらコインのペンダントが失くなってた。おれは昨日の練習で疲れて眠ってたから気がつかなかった」

「だから、俺が盗ったかもって？」

「それだけじゃないよ。悪魔のコインからはヒトに悪い影響を与える気が発せられていて、おれみたいなレメゲトンはその気に対する耐性を持つてる。でも、普通のヒトはあんまり長く触れていると体調崩したり精神が不安定になったりするんだって」

筆手はずした。

ぱさりと音がして地面に落ちる。

「コインを盗るにはそれなりに耐性がなくちゃ無理だからと思ったんだ。ヴィッキーはダメだった。全然耐性がなかった」

さらにすると包帯をほどいていった。

「……！」

背後でライディーンが息を呑んだのが分かった。

「試したんだ、ごめん」

目をあわさずに背を向けて、完全に露になった左手を闇に突き出した。

くすんだ黄金に煌く熱を持ったコインには殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラスの紋章が描かれていた。その周囲の皮膚は赤黒く黒ずんで、血管が浮かび上がっている。

ずっとこの左手に掴まれていたと知ったら、ライディーンは気色悪いと思うだろうか。

「ライディーンには耐性があるよ。悪魔の血を引いてるって言うてたから当たり前って言われたら当たり前だけどさ」

すごく心が痛んだ。ライディーンを勝手に疑って、勝手に試したこと。

同時に、ライディーン以外のヒトが取ったんだとしたら、探すのは相当困難になる。どうやって探したらいいか分からない。それ

はとても絶望的なことだった。

何も言えなくなつてじつと黙り込んだ。

また紫の瞳を思い出しそうになつてぶんぶん頭を振る。

「アレイさん……」

それなのにぼろりと口から名前が転がり出た。

しまった、と思った。

じわりと目頭が熱くなる。

「クロウリー伯爵がどうかしたのか」

後ろからライディーンの声がした。

答えられない。声を出したら泣き出してしまいそうだった。

沈黙が訪れた。

長い長い静寂の後、ライディーンはもう一度口を開いた。

「なあ、ラック。さっき俺には悪魔耐性があるって言ったよな」

「うん」

その強さのほどは分からないけれど、少なくとも一般人よりは高いだろう。

「それは、俺にもレメゲトンになる素質があるっていうことだと思つていいか？」

「分かんない。おれはミジクモノだから。でも、少なくともレメゲトンになるには耐性が必要なんだって。じい様に聞けば分かると思ふよ」

そう言つと、ライディーンはふいに正面に回つてきた。

高い位置にある顔を首いっぱいにして見上げると、ライディーンは真剣な顔で言つた。

「ラック、一生の頼みがある」

「何？」

「俺をレメゲトンにしてくれないか」

「?!」

言っている意味が分からなかった。

来年には漆黒星騎士団剣術部隊 ブラックルビー 鷹たかに所属するだろう。ファイさ

んの話からするともう何年もしないうちにリーダーになり、行く行くはライガさんの後をついで部隊長に就任するだろう。

それを蹴ってレメゲトンになりたいと言うのか……？

「だって、ライディーンは騎士なんだろ。強くなるんだろ？ アレイさんに勝つんじゃないの？」

頭が混乱した。

「でも俺に力があるんならそれを試してみたいと思うのが普通じゃないのか？」

見上げた藍色の瞳は真剣だった。

同時に強い意思の炎が揺らめいていて、その迫力に圧倒された。

「騎士と言う位にはこだわらない。俺の力を知らしめる事が出来るならレメゲトンのほうが有効だ」

「……おれにライディーンをレメゲトンにする権限は無いよ」

あるのは王様だけだ。

「でもお前はレメゲトンだ。未熟者だといっても偉いヒトたちと少しくらい繋がりがあるだろう？」

「そりゃ、じい様とかに聞いてみれば……」

「頼むよ！」

ライディーンは深く頭を下げた。

「この騎士団に来て、お前に会えたことはリュシフェルの導きだと思っている。俺に与えられた幸運だと」

「ライディーン」

「俺は自分の力を試したいんだ。自分の力を世に知らしめたいんだ。自分が出るすべてを見せ付けたい」

「やめて、頭を上げてよ」

そんな風にしないで欲しい。

新しい世界でやっと見つけた友達なのに。

「分かった、明日じい様に聞いてみる。きっとじい様なら何とかしてくれる」

「本当か！」

ライディーンはぱつと顔を上げた。

「でも、うまくいくとは限らないんだ。おれにもレメゲトンのことはよく分からなくて……でも、ライディーンがそれだけ強く望むのなら、できる限りやってみるよ」

「ありがとう、ラック！」

本当に嬉しそうに笑った彼の顔を見て、がんばろうと思った。

でも、がんばらなくちゃいけないことはいっぱいある。

何より先にコインを探さなくちゃ。その間にも忘れず剣術や馬術を学ばなくちゃ。最終的には今よりずっともっと強くなって早く大切な二人の元へ急がなくちゃ。

やりたいこととやらなくちゃいけないことがたくさんありすぎて体がばらばらになってしまいそうだ。

一体何から初めていいかわからない。

それでも一つ一つクリアしていく以外にきつと前に進む道は無いのだろう。

この時期を必死になって乗り越えていけばその先に大きな成長があると信じている。きつとあの二人の隣に立てると信じている。だから

SECT・17 推薦

ヴィッキーとクラウドさんに言って、次の日はすぐジユデッカ城に参内した。

じい様に会ったためだ。

最近やつと乗れるようになった馬を一頭借りて歩くようなペースで城を目指した。

半月ぶりにインフェルノ・ゲートをくぐって城下町に入ると、以前ならたくさんのヒトで賑わっていたはずのメインストリートが閑散としていた。

人通りも極端に少ない。開いている店は少なく、特に食料品の店は固く扉を閉じていた。

「これが戦争……？」

騎士団の訓練所内にいる自分には感じ取れなかった戦の足音。どんよりとした空気と暗く沈んだ街並みは確実に迫る苦戦を暗に示しているようだった。

いまも騎士団の敷地で訓練を行っている一般兵は、そろそろ戦地へと送られてしまうだろう。そうすれば残っているのが女性や子供たちばかりになるのは時間の問題だ。

それはいつたいどんな気持ちなんだろう。

自分も大切な二人を戦地へ見送った。

あの時の裂かれるような気持ちこそこの街のヒトみんなが受け取ってしまおうと言っただろうか。

なんて悲しいことなんだろう

突き刺すような痛みを發した胸にぎゅっと手を当てた。

ブルガトリオ・ゲートを抜けて真直ぐパラディソ・ゲートへ向かう。

いつもにない強固な警備が行われていた。

「レメゲトンのラック・グリフィスです。ヴァイヤー老師にお目通り願います」

やっと少しだけ使えるようになった敬語で警備兵のヒトに告げると、あっさりと通してくれた。

最近ようやくレメゲトンの位が持つ力を知ることになった。まだ未熟で騎士団に配属されていない自分より上の位にいるのはゼデキヤ王やまだ会ったことのない王妃様、それにサンなど数えるほどしかない王家の者のみだ。

そのせいで政治に関わっている貴族のヒトたちからはあまりよく思われていないこともあるのだという。

自分は直接そんな貴族さんたちに何か言われた事はなかったが、ねえちゃんやアレイさんはとても苦労してきたようだった。

ゲートを過ぎてからは馬を引いて、悪魔の魔方陣が大量に描かれた地下室のある神殿にやってきた。じい様はその建物の最上階、占いを行う小さな部屋にいるらしい。

書物が所狭しと詰まれた部屋の中で星占い用の天文盤をまわすじい様は、自分が来たことに気づくと手を止めてこちらに目を向けた。

「こんにちは、じい様。元気だった？」

「久しぶりだな、ラック。大変な事になっていると聞いたのだが」

「うん、ちよつとね。だから少し占って欲しいなと思って」

「よかるう」

じい様は白い髭を揺らして天文盤を回し始めた。

アレイさんがカードで占いをするように、じい様はこの直径１メートルはある天文盤を使って未来を占う。

同じように王都に残留したレメゲトンのメイザースさんもこの天文盤を使うのと言う。

「コインの行方を尋ねよう」

じい様は静かに呟いて天文版に刻まれた星の位置を決めていく。
自分は息を潜めてそれを見ていた。

「ふむ、とても近くにあるようだ。草木が潜む時間に現れる。離れる事を拒むとても深い愛を持つ者だ。一つは二つ、二人は一つのものを望んでいる」

「じい様、難しいよ。アガレスさんみたいだ」

そう文句を言うと同じ様は白い髭の奥の唇の端で微笑んだ。

「気をつけよ。そろそろ盗んだ者が精神に異常をきたし始める頃だ」

「うん、分かった」

逆に言えば、もし精神や肉体に変調をきたすヒトがいればすぐにばれてしまうことになる。

その時、はっと気がついた　　そうか、そうすればいいんだ。

簡単な事だったんだ。

もし悪用するつもりでなく、どこかに売られたりする事も無く、本人も盗ったことを悔やんでただ持っているだけだとしたらすぐにわかる。

あと1日、長くても2日で犯人は現れるだろう。

「ありがとう、じい様」

一度お礼を言ってから、もうひとつの問題を切り出した。

「ねえ、じい様。騎士団の中にレメゲトンになりたいって奴がいるんだ」

じい様は一瞬言葉を失ったようだった。

「もしそういうヒトがいた場合さ、本当に素質があつたら何とかできるものなの？」

「……素質があればな。ミリアナ「アリギエリ」の話を知っているか」
「うん。1000年位前にウェルギリウス「アリギエリ」っていうヒトが養子として引き取って、最終的には妻にしたヒトだよな」

そして彼女はレメゲトンの才能を見出されて12と言う異例の若さでレメゲトンの職に就いた。

「たぶん素質はあると思う。アレイさんと同じクロウリー家の血を

継いでるんだって。悪魔耐性もそれなりにあったよ。それに、剣がものすごくうまいんだ。」

「名は？」

「ライディーン」シン。今年から漆黒星騎士団の鴉部隊に配属されんだ。まだ15歳だけどね」

「ふむ……かなり前の薄まった血ではあるがクロウリーの系譜だ、それなりの潜在能力はあるだろう」

じい様は一瞬考えた後、頷いた。

「会ってみて考える。連れてくるといい。王には己から進言しておこう」

「ありがとう！」

「この時勢だ、実戦の場に出るレメゲトンが多いに越した事はない」
じい様は吐き出すように呟いた。

この街を包み込んだ重い空気や人々の悲しみを作り出したのが戦争だとしたら、おれはやっぱ戦争が大嫌いだ。

じい様も王様もそう思っているはずなのに、どうして今戦争が起きてるんだろう？

この世界は難しいことだらけだ。

昼に一度訓練所に帰り、ライディーンをつれてもう一度神殿に戻ってきた。

連れ出す理由をクラウドさんに説明すると驚いた顔をしていたが、激励の言葉をかけてくれた。

「それが君の望む道なら、ライディーン、僕はいくらかでも応援するよ」

紅髪の騎士は深く頭を下げ、騎士団長の心に応えた。

じい様が何か言っておいてくれたのか、なりたての騎士でしかないライディーンもすぐにパライソ・ゲート内に入る事が出来た。

神殿に入ると、王家の紋章を象った天窓が迎えてくれた。

ここに来るのが初めてのライディーンは呆けたように口をぽかりと開けて圧倒されている。

「すごいな……ここ」

「うん、最初はおれもめっちゃめっちゃ緊張したよ」

ついこの間の事が何故こんなにも懐かしいのだろう。

初めてアガレスさんと契約した時の事は今でもはっきりと思い出せる。

「来たか」

天窓の下にじい様が立っていた。

ライディーンは漆黒の騎士の正装で跪いた。

「初めまして、ヴァイヤー老師。ライディーン〃シンと申します」

「ふむ。珍しい髪色をしているな」

「異国生まれの母譲りです。ここからはるか南のコリン大陸からのディアブル大陸へ渡ってきたそうです」

「そうか」

じい様はいつも持っている杖を頼りにゆっくりとライディーンに近づいた。

自分はその様子を固唾を呑んで見守っていた。

「少し失礼する」

じい様はそう言って杖の先をライディーンに向けた。

ぼんやりと杖の先が光る。

「フルカス」

魔方阵が発動した。

じい様はもう細くなった目をいっばいに見開いてライディーンを見た。

その背後にはぼんやりと老人の姿が見えている。じい様よりずっと年上で小さくなったその姿は老賢者と呼ぶには少々しぼんでいる。姿に似合わない大きな槍が今にもその老人の手から滑り落ちそうだ。「それほど強くは無いが申し分ない。悪魔耐性は十分なようだ」

じい様がそう言うと、背後の老人がふっと消えた。

どうやらすぐに魔界へ帰ってしまったようだ。

「ライディーン」シン、お主は何故レメゲトンを望む？」

「自分の持つ力を確かめるためです。もし俺に力があるというのなら試してみたい。どこまで出来るのか、何が出来るのか。騎士団に入団したのもそのためです。それはレメゲトンになるとしても変わりません」

「険しい道となるぞ」

「精進します」

「一度入れば抜けられぬ。それでも力を欲するか」

「はい」

ライディーンの藍色の瞳は決心に満ちていた。

とても強い光だった。

じい様はその光の中に何を受け取ったんだろう。

しばらくして杖を下ろすと、静かにこう言った。

「後で使いを出す。訓練所にて待て」

くるりと背を向けてじい様はこう続けた。

「詳しい事は後々話す。まだ決定したわけではないが、とりあえず己の推薦を王に提出しよう」

「ありがとうございます！」

その瞬間ライディーンの顔が輝いた。

その嬉しそうな顔は15歳の少年そのものだった。

SECT・18 あり得ない真実

次の日の朝早く、ライディーンは訓練所を後にした。

詳しい事はみんなに知らされていなかったため、困惑を隠せないようだった。

ヴィッキーだけがこっそり聞いてきた。

「おいラック。まさかライディーンがコインを……」

「うん、おれもそう思ったんだけど違ってたんだ」

そう言っただけの様子とやりとりを簡単に説明した。

「ライディーンは犯人だったわけじゃなくて、悪魔耐性があつたらレメゲトンに推薦したんだ。だからジュデツ力城にお呼ばれしたんだよ」

そう答えると、ヴィッキーは目を丸くした。

「あいつがレメゲトンだと？」

「うん。これからどうなるかは分からないけど、じい様は王様に推薦するって言ったからたぶん将来的にはそうなるんじゃないかな」

「……信じられんな」

そう言ってからヴィッキーはおれのほうをちらりと見てもう一度ため息をついた。

「まあ、お前がなれるくらいだから大丈夫か」

「どういう意味だよ！」

「怒るな。それよりコインはどうなったんだ？」

「うん、そっちはだいじょうぶ、もうすぐ分かるよきっと」

「……？」

「だってコインは毒だからいくらヒトより強くても身につけていなくても、傍にしている以上そろそろ影響が出始めるはずなんだ」

「そうか」

ヴィッキーは複雑そうな顔をした。

「犯人が分かっただけで分かったで嫌なものだな」

「うん、そうだね」

誰であつたとしても驚くだろう。

一体どんな理由であつたとしても罰則は与えなくちゃいけないだろう。

もちろん自分の方にも過失があるからそれも考慮しなくちゃいけない。

でも、何より知りたいのはその動機だった。何故コインを盗んだのか。それが純然たる好奇心でもって一番知りたいことだった。

それから2日が経った。

思惑とは裏腹に鴉の誰かが体調を崩したり、精神に異常をきたすような事はなかった。

思ったよりずっと強い悪魔耐性の持ち主なのだろうか。

だとすると困った事だが、それほどならライディーンと同じようにレメゲトンに推薦するのもいいかもしれない。

ジュデツカ城に呼ばれてからまだ連絡のつかない紅の髪を思い出しながらそう思った。

きつと彼にはレメゲトンの正装も似合う。剣の腕もあるし、アレイさんと戦線で並ぶ勇ましいレメゲトンが誕生する事だろう。

思ったようにコインが見つからず、不安に打ち震える胸を忘れるようとそんなのんきなことを考えている3日目の朝のことだった。

とうとう、一人の少年が練習中地に伏した。

彼はすぐに救護所へ運ばれていった。

ヴィッキーと目で合図して、自分は急いで救護室へと向かった。

救護室にはまだ医者や看護婦さんがいて、倒れた少年から事情を聞いているようだった。

が、こっちは急ぎの用だ。

「お医者さんも看護婦さんも少しだけ席を外してくれるかな？」

「何故君がそんな事を？」

お医者さんは訝しげに言った。

いろいろ説明が面倒だったので、最近やっと理解したレメゲトンの地位をふんだんに利用する事にした。

左手の包帯をするすると外していく。

お医者さんと看護婦さんの顔色が変わった。

「おれはレメゲトンのラック・グリフィス。少し席を外して欲しい。このヒトに大事な話があるんだ」

効果は絶大だった。

医者と看護婦さんは部屋を出て行き、望みどおりにベッドに横たわる少年と二人で救護室に残されたのだった。

ベッドの中の少年を見下ろした。

きつと今、左手に埋め込まれていたコインも見えていたはずだ。

それでも少年は顔色を変えず、こちらを向きもせずただ天井を見つめていた。

「おれが何を聞きたいかは分かるよね」

「……」

少年は答えなかった。

「とりあえず、返して。あれはおれの大切なものなんだ。お前が持つてたって使えないし何の役にも立たない。もしおれの事が嫌いでイジワルしてるって言うんなら、力づくでも取り戻すよ」

「……ごめん」

少年はぼつりと呟き、シーツの下から右手を出した。

そこには鈍い金色に光る二つのコインが握られていた。

それを受け取って首にかけた。慣れた重さにほっとした。安心に包まれた感じがする。やはりおれにはこのコインがないとダメみたいだ。

「どうして盗ったの？」

「……」

少年は口を噤んだ。

部屋が違うのだからコインを盗るためには女性部屋に忍び込まなくてはいけない。

そんな危険を冒してまでこのコインを欲しかった理由が分からなかった。

「これはただの好奇心だよ。何でそうまでしてこれが欲しかったか知りたいだけなんだ」

それでもベッドに横たわる黒髪の少年が答える気配はなかった。

「誰かに頼まれたのか？ おれが気に食わなかったのか？ それとももっと別の理由があるのか……？」

少年は答えない。

「教えてくれよ、ルーク！」

黒猫の瞳を持つ少年はその瞳に光を映さず、ただ天井を見つめていた。

ライディーンと並んで期待された剣の腕を持っているというのに、メルルと乳兄弟で今でもとても仲がいい。朝の練習にも欠かさず参加している。

原因が何も見当たらなかった。

「ルー……」

「ルーク！」

自分の声に愛らしい少女の声が重なった。

黒いカチューシャと若草色の瞳　ルークの乳兄弟のメルルだ。

「姫」

ルークの顔が青ざめた。

メルルは泣きそうな顔をしてベッドに駆け寄った。

「ごめん、ごめんね、ルーク。辛い？ 本当にごめんね」

「大丈夫だよ、姫……そんな顔しないで」

入り込む余地が無くてただその場に佇んだ。

金目の黒猫ルークはメリルの手を借りて起き上がった。

「ラック、ごめん。どんな罰でも受けるよ。その代わり理由は言えないんだ」

「ルーク！」

メリルが悲鳴のような声を上げた。

ルークはメリルの口を手で塞いだ。

「ラックはレメゲトンだったんだな。そのコインを盗ったんだから俺は第一級犯罪者かな。もう覚悟は出来てるよ。警備隊にでもここにでも突き出してくれ」

「罰則権限はおれにある。王様から言われてるんだ」

「そうか……」

ルークは軽く微笑んだ。

「ごめん、ラック。謝ってすむ問題じゃないけど本当にごめん」

「理由は言えないの？」

「うん」

「どうしても？」

「どうしても」

ルークの瞳には強い意思が灯っていた。

でも、それじゃ納得できない。

「んじゃ、ブラックルビー漆黒星騎士団 からす鴉部隊所属ルークⅡハンバキア。罰則を

言い渡す」

ところがその瞬間鋭い少女の声が遮った。

「待って！ ラック！」

ルークの手が外れて、メリルが叫んだのだ。

黒猫の顔が歪んだ。

「罰を受けるのは私よ。だってコインを盗ったのは……」

「メリル！」

「私、だから」

「違う！」

「偶然夜中に起きたらラックの首にコインを見つけたの。どうして

も……どうしても」

「やめるメルル！」

いったい目の前で何が起きているのか分からない。

そして、何がどうなつてコインをルークが持っていたのかも。

「二人ともやめる！」

思わず叫んでいた。

その一喝でルークとメルルは口を噤んだ。

「罰則を言い渡す。二人分だ。」

何故だかわからないけれどすごく苛々していた。

きつと何も分からない事が悔しかったんだと思う。

「ルーク」ハンバキア、メルル「K」ファランドル。何があったのか、何故盗ったのか、どうしてルークがコインを持っていたのか、全部話せ！」

気がつけば腹の底から搾り出すようにして叫んでいた。

SECT・19 メリル「K」ファランドル

青ざめた顔をしたメリルとルークは、並んでベッドの端に座った。メリルの目は真っ赤になっていて、ルークはこの世の終わりみたいな顔をしている。

「おれの首からコインを持っていたのはメリルなんだよね」

「……ええ、そうよ」

「じゃあどうして今はルークが持ってたの？」

「メリルが体調悪そうだったから俺が受け取った。きっと原因はそれ、だと思ったから」

ルークはおれの首にかかったコインのペンダントを差した。

「だから見つけるまでに時間がかったのか」

悪魔耐性が強かったわけではなく、二人の手を経ていたからなかなか犯人が特定できなかったんだ。それでも、二人がかかりでせいぜい5日。耐えられる期間は一週間にも満たない。

ずっとこのコインを首から提げている自分は、とても人間とは相容れないのかもしれない。

首のコインをぎゅっと握り締めた。

「もしかしておれのことレメゲトンだつてずっと知ってた？」

「知らなかったわ。あの夜ラックの首にコインがあるのを見て初めて知ったの」

「ルークは？」

「知らなかった。3日くらい前にメリルの様子がおかしかったから問い詰めたらコインを盗んでしまったって……その時初めて聞いた」

3日前というところへライディーンを連れて行った日だ。その時既にメリルの様子がおかしかったというのなら、気づかなかったのは自分の失態だ。

もっと周囲に気を配っておかなければならない。たとえそれがどんな悩みの中であつたとしても。

自分はまだまだ未熟者だ。

「コインはそれからずっとルークが持ってたの？」

「いや、二人で順番に……返すに返せないし、でも部屋に置き去りにするのは怖くて持ち歩いてた」

「……辛かった？」

悪魔の気は毒だ。

そんなものをたとえ二人でとはいえ何日も持ち歩いていたのだ。かなり体に負担がかかった事は否めないだろう。

どうしてもつと早く気づいてあげられなかったんだ？

自分の力の無さに苛立ちが募る。

「辛かったのはラックのほうだろう。俺達が言えた義理じゃないが、とても大事なものはずだ」

ルークの言葉は震えていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

とうとうメリルは泣き出してしまった。

「ねえ、メリル。一つだけ教えて」

しゃくり声にかき消されそうだった。

それでもこれだけはどうしても聞いておかなくてはいけなかった。

「どうしてコインを持っていたの？」

「それは」

メリルは言い淀んだ。

「自分でも、分からないの。最初は本物かしらって見ていたのだけれど、そのうち変な気分になって……」

その精神の不安定さはおそらくコインの影響によるものだ。

自分も初めてコインを3つ身につけた夜は少しおかしな衝動に駆られた。

「コインを盗つてもレメゲトンになれるはずなんじゃないってこと、分かるはずなのに。その時はただこれさえあればって思ってた……気がついたら手の中にコインが……」

「メリルはレメゲトンになりたいの？ 騎士じゃなくて？」

メリルの肩が震えた。

「そうよ。だって私はルークと離れたくない」
その言葉に困惑した。

でも、聞き覚えのある言葉だった。

ねえちゃんと離れたくない。だから王都に行く。レメゲトンになる。強くなる。それはずっとねえちゃんを『ひとつだけ』にして生きてきたおれがことあるごとに呟いた台詞と同じものだった。

心臓を抉られるような感覚と胸の痛みが襲ってきた。

「騎士団の中なら同じ地位でいられると思った。だからずっと剣術を稽古してここまで来たの。ルークの傍にいたかったから。でも」

「

メリルは若草色の瞳をルークに向けた。

「周りはそれを許さないの。お父様もお母様も私のこと離してくれないの。すぐがんばって騎士になつたって言うのに喜んでくれないの……！」

「姫」

「姫なんて呼ばないで！」

悲鳴のような声にびくりとした。

ルークも動けないでいる。

「私は女の子で、ファランドル家の一人娘だから、もう少し大人になつたら帰らなくちゃいけないの。帰ってお嬢さんを貰って、家を継ぐの。そうしたらもうルークに会えなくなっちゃう」

「レメゲトンになつたら離れなくていいのか？」

「そう」

メリルは涙を拭いた。

「ラック、あなたは私の欲しいものの全部持つてるのにとっても無頓着なのね。そんなところは好きだけど、大嫌いよ」

ダイキライ

その言葉に胸を大きく抉られた。

「レメゲトンほどの高い地位をいただければもう父様も母様も親戚

の人たちも文句は言わないわ。きっとルークと一緒にいると言っても許されるはずよ」

「姫」

「身分が違うからって反対しないはずよ。私が自分の力で国の中枢に入る事さえできれば！」

ライディーンが言っていた事に似ている。

それでもやっぱり理解できなかった。

貴族、平民、力、名声　様々なものの圧力。

自分には知らない事が多すぎる。

「姫、もういいよ。俺は……」

「ルーク！」

メリルの声が響き渡った。

部屋の中がシンと静まり返る。

「ラック、私を裁いて。私は子爵家フアランドルの娘メリル」K」
フアランドルよ。正当な罰を受ける覚悟も出来ているわ」

若草色の瞳が真直ぐに自分を射抜いた。

何者をも恐れない、強い光だった。

その色に息を呑んだ。普段大人しいメリルの中に眠っていたこの
激情に圧倒されていた。

きつとメリルの『ひとつだけ』はルークなんだろう。絶対に離れ
たくないという感情が勢いあまってしまっただけなんだろう。そ
れにコインの毒気で不安定になった精神が付加されて、行動を起こ
してしまった。

きつとそれがこの事件の真相だ。

「さっき言った。罰はどうしてコインを盗ったのか理由を話すこと
だ」

ルークと共にいるために力を手に入れようとしたメリル。それを
助けようとしたルーク。

レメゲトンと言う地位は、それほどまでに絶対的な権力を持つて
いるのか。多くのヒトがこの職業に憧れてやまないほどに。

「ごめん、メルルをレメゲトンに推薦することは出来ないよ。それ
にもし他に機会があっても無理だと思う」

悪魔耐性がないからコインを持つ事などできない。

「……そんな事分かっていたわ。それでも……」

メルルの声が消えていった。

代わりに嗚咽が聞こえる。

整理できない気持ちを抱えたまま、部屋を後にした。

部屋の外にはヴィッキーが佇んでいた。

橙の髪をした鴉^{からす}リーダーは険しい顔でポツリと聞いた。

「……どうだった」

「うん、なんだかすごく辛いや。コインは戻ってきたのに、ヘンだ
ね」

そう言つと、ヴィッキーはぽんと頭に手を置いてくれた。

「戻ろっ、ラック。クラウド団長にも報告せねばなるまい」

「うん、そうだね」

包帯を外してコインが露になった左手を隠すようにして、**救護室**
を後にした。

SECT・20 新たなレメゲトン

午後も訓練を休んでクラウドさんの元へ向かった。

いつもならこの時間、騎士団員の手ほどきを受けているはずの一般兵が見当たらない。

ヴィッキーいわく、すでに戦地へ赴いたとのことだった。第2期生が明日には入ってくるのだという。

「これからはもっと多くの志願兵がこの訓練所を訪れるだろう。戦が本格化すればこの騎士団の一部も戦場に赴く事になる」

「……」

つい先日目の当たりにした街の閑散とした様子を思い出した。

ここは戦地から遠く離れている。

現在の戦地は東の都トロメオ、しかしここは西の都とも呼ばれる王都ユダだ。国の正反対に位置するこの都市にさえ影響があるくらいだ。

実際の戦地の様子は思い浮かべようとしても思い浮かばなかった。

約束の時間通りにクラウドさんの部屋に入ると、金髪に翡翠ジェイトの瞳を持つ騎士団長クラウド「フォーチュンはいつもどおりの優しい笑顔で迎えてくれた。」

「ようやくコインが見つかったようだね」

「うん」

「では状況を報告してくれるかな？」

ゆったりとしたソファに身を埋めて、先ほどの話を自分の中で整理しながら話し出した。

偶然コインを見つけたメルルは、毒性で精神が不安定になって衝動的にコインを盗んでしまった。それに気づいたルークと二人、隠そうとしたが5日目でコインの毒によって燻りだされてしまった。

つまりはメルルがレメゲトンになりたいという感情を少なからず持っていた事が原因だったということだ　大切なヒトと共にいるために。

「ねえ、クラウドさん」

「何かな」

「レメゲトンってそんなにすごいの？　権力とか身分とかいろんなものを気にしなくてもいられるくらい？」

素直にそう聞くと、クラウドさんは困ったように微笑んだ。

「そうだね。順番からいくと王様の次に偉いってことになってしま
うから。ただ、配下の組織が無いために権限としては小さいが、それ以上にコインの悪魔の実働性は優れている。どんな部隊よりもね」

「うん、確かに悪魔さんたちは強いよ」

アガレスさんもフラウロスさんも、そしてラーズも。

左手のコインに手を当てた。

「しかもグリモワール王国では悪魔が崇拝されている。その悪魔を
使役するレメゲトンは、国民的に凄まじい人気なのだよ」

「そうなの？」

ひよい、と後ろのヴィッキーを振り向くと、彼女は頭を押さえて
ため息をついた。

「以前までは私もそうだったよ、お前に会うまではな」

「どつという意味だよ」

「言葉通りだ」

「まあまあ、ヴィッキー。落ち着いて」

クラウドさんがたしなめた。

「いずれにせよメルルとルークの二人が犯人だったわけだ。で、ラ
ック、君はどうした？」

「ん、それを全部話してもらった」

「そうか」

向かいに座ったクラウドさんは少し困った顔をした。
が、後ろのヴィッキーは眉を吊り上げた。

「待て、ラック。それはつまり罰を課していないということか？」
「だから話してもらった。話したくないって言った事を話してもらったんだから罰にはならないのかな？」

「お前は……」

ヴィツキーのこめかみに青筋が浮いた。

しまった。なぜか怒らせてしまったようだ。

「きちんとした規則を作り、それを遵守する。また、それを破ったものにはそれ相応の罰を与える！　これが常識だ、馬鹿者！」

「だから……」

「言い訳は聞かん！」

びりびり、と空気が震えた。

クラウドさんは楽しそうにこちらの様子を見ている。

見てないで助けてよ！

「あの二人には私の方から謹慎10日を命じておく。いいな、レメゲトン殿？」

「え、でも」

「いいですね？！」

「あ、う、はい……」

結局迫力負けして頷くと、ヴィツキーはようやく緊張の空気を解いた。

クラウドさんがにこにここと笑ってヴィツキーに礼を言った。

「助かるよ、ありがとう」

「当たり前な事をしたまです、団長」

「ふふ、これからも頼むよ、ヴィツキー」

クラウドさんは優しく微笑んで、頭を撫でてくれた。

「ちゃんと解決できたね、ラック。それをちゃんと王様に報告して来るんだ。参内の命令もでている。私も一緒に行くから、一度ファウスト家によって正装を整えてもらいなさい」

「はい」

ねえちゃんちに戻るのは久しぶりだ。もう1ヶ月くらい経っただ

ろうか。

稽古に戻るといふヴィッキーと別れて、クラウドさんと二人インフェルノ・ゲートをくぐった。

久しぶりに帰ると、アイリスとリコリスが出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ」

「久しぶりアイリス、リコリス」

にこりと笑ってから一緒に来たクラウドさんにも微笑みかける。

「すぐ着替えてくるからちよつと待ってて。アイリスはおれの着替え手伝ってくれる？リコリスはクラウドさんにお茶をお願い」

「かしこまりました」

クラウドさんと別れて自分の部屋へ入る。

すぐに正装を支度してもらって身につけ……ようとした。

「ラック様、少し体型が変わられたのでは……」

きつい。胸の辺りが特に。

無理やり着てみたけれど、少しばかり息が苦しい。

「成長期ですものね、また作り直していただきましょう」

「また採寸するの？ あれ面倒だから嫌だよ」

「そうおっしゃらずに」

アイリスは困ったように笑い、最後に紫のマントで背の傷を隠してくれた。

「髪も少し伸びたようですね。今度そろえましょう」

「うん、そうかも」

コインをベルトに下げながら答え、最後に黒の手袋を左手にだけはめた。

ジユデツカ城ではなぜかすぐに謁見の間へ通された。

そこにはじい様と、いつの間にか漆黒の甲冑を身につけたクラウド

ドさん、それに見た事のない淡いグリーンの甲冑に身を包んだヒトがいる。

あれ、これは何となく覚えているぞ。

そう思っていると、謁見の間の入り口が開いて見覚えのある紅の髪の剣士が入ってきた。

漆黒の騎士服に身を包んだ15歳の少年はとても年相応とは思えない身のこなしで颯爽と間の中央まで進み出た。

壇上から王様の声が降ってくる。

「ライディーン」シン、彼の者をグリモワール王国レメゲトンに任命し、第14番目レラーージュを与える。」

どうやら彼は望みを叶えたようだ。

藍色の瞳と目が合って、にこりと微笑んだ。

謁見の間を出てからすぐ、盛大に文句を言った。

「レメゲトンの認証式ならそう言ってくればよかったのに！」

「言わない方が驚くと思ってるね」

クラウドさんはにこにここと笑った。

「行っておいで、きっと彼も君の事を待っているよ」

「うん、ありがとう！」

大きく手を振ってクラウドさんと別れ、新たなレメゲトンの元へ向かった。

SECT・21 遺伝子の壁

「ライディーン、おめでとう!」

「ラック!」

数日ぶりに会ったライディーンは満面の笑みで迎えてくれた。

「ありがとう! 全部お前のお陰だ!」

ライディーンは躊躇せずにおれの体を抱きしめた。

少しびっくりしたけれど、その大きな腕は誰かを思い出させて少し切なくなった。

「離して、苦しいよ」

「やだ」

ライディーンはますます腕に力を込める。

仕方がない。

力づくで……と思ったのに、ほどこうとした腕は頑として動かなかった。

「俺に力で敵うわけないだろう?」

勝ち誇ったようなライディーンの声に、なぜか恐怖を覚えた。

「お前がいくら強いと言っても、俺は男でお前は女なんだから」

「!」

別にライディーンだって怖がらせるつもりはなかったんだろう。

でも、抵抗できないと思った瞬間の恐怖は本物だった。

「離せっ!」

自分が叫んだことに驚いて腕が緩んだ隙にぱつと振りほどいて距離をとった。

心臓が早い。

息を整えていると、ひどく傷ついた顔のライディーンの姿が目に入った。

「あ、ごめん……」

思わず謝罪の言葉が口をついたが、それで二人の間の断裂を埋め

る事は出来なかった。

ライディーンは表情を凍りつかせたまま。

居たたまれなくなって自分はそんなライディーンを置いて部屋を飛び出してしまった。

ライディーンを傷つけてしまった。

だが、それ以上に先ほどの恐怖が脳裏に焼きついていた。

男と女の力の差。抵抗できない状態での恐怖　これまで気づいた事などなかった制約に、自分自身が混乱してうまく考えられなかった。

体術の組み手などではない。

完全に自由を奪われたとき、それを跳ね返す筋力には自分にはない。それは訓練の問題ではなく生まれついていたの体の仕組み自体が問題なのだ。

怖かった。

自分の力でどうにもならない事態が存在する事が

「ラック！」

ジュデッカ城の長い廊下を駆け抜ける自分呼び止めたのは、唯一自分のことを女性として扱ってくれた皇太子だった。

「少し、落ち着いた？」

「うん、ありがと」

サンの私室で温かいココアをご馳走になって、やっと息をついた。ねえちゃんちにある自分の部屋のさらに何倍もありそうなこの部屋は本当にサン一人で使っているのか疑わしいくらいの広さだった。「どうしたの、すごく……辛そうな顔をしていたよ」

答えられずに俯くと、サンは少し寂しそうな顔で微笑んだ。

「話しては貰えないのかな。僕じゃ駄目？」

「ううん。そうじゃなくて、うまく言葉に出来そうになくて……」

「いいよ」

はつと見上げると灰色の瞳が優しい光を灯していた。

「ゆっくりでいい。いくらでも聞くよ。ずっと待つよ。だから、話して」

「うん、ありがとう」

先ほどのことをもう一度思い出しながら、少しずつ言葉を紡いでみた。

「サンはよくおれは女だからって言うじゃん。でも、おれ今までそんなこと気にしてなかったんだ」

正直にそう言うと、サンはとても複雑そうな顔をした。

「ねえちゃんはいつか分かるわって言うから考えずにいたんだけど、さっきライディーンに抱きしめられたとき、おれはそれを振りほどけなかったんだ」

「ライディーンと言うと今回新しくレメゲトンになった少年だね。どうして彼は君に抱きついたりしたの」

サンの言葉にはかすかに怒りが混じっていた。

「ん、別に、ただありがとうーって言いながらぎゅーって。レメゲトンになれるようにじい様にライディーンを紹介したのはおれだったから」

「へえ、そう」

サンの言葉に今までにない冷酷さが混じっている。

それに少し首を傾げながらもとりあえず続けてみた。

「んで、すごく大きな力の差を感じちゃってさ。おれは鍛えてるって言っても所詮もとが女だから絶対に力で男のヒトには勝てないんだって思ったらすごく怖くなったんだ」

生物学的な差。それは自分の力ではどうしようもない事だった。

「剣術とか体術とか、技術でカバーできない力つてもうどうしようもないのかな。おれはどんなに鍛えても弱いままなのかな」

悲しい気持ちを抱えたまま灰色の瞳を見上げた。

「やっとサンが言った意味、少しだけ分かったよ。おれは女だから

やっぱどこかで力の差を埋めなくちゃいけない。それはすごく大変事なんだね」

「そうだよ、ラック。だから僕は」

サンはそこで言葉を飲み込んだ。

代わりにこんな風に質問された。

「ラックはじゃあ、それに気づいてどうしたいと思ったの？」

「ん、分かんないんだ」

何か歯車がかみ合わない。自分の中の価値観が揺らいでいる。

「怖いよ。おれはこれまでやれば出来るって思ってきたけど、もしかしたらそれは間違ってるのかもしれない。がんばれば何でもできるって言うのはもしかしたら……幻想かもしれない」

それに気づいてしまっても、自分は本当にまだがんばれる？

未来が見えない。これから先自分がどうなるのか分からない。それはこんなにも不安な事だったんだ。

「どうしたらいいのかなあ……？」

これまで立ち止まらず必死に剣技を学んで、体術を教わって、馬に乗る練習をして千里眼を稽古してきた。

それは自分の力で国を守りたいと思っていたからだ。もしその力の可能性があるなら。

自分の力を試すという点では、ライディーンと自分は同じ動機を持っているのかもしれない。それによって得られるものがたとえ違っていたとしても。

でも、果たして自分にはたくさんのヒトを救う力などあるんだろうか。

強くなりさえすればいいと思っていたけれど、本当にそれでいいんだろうか。本当に自分は　まだ強くなれるんだろうか。

分からない。

ねえちゃんに会いたい。アレイさんに会いたい。

分かんないんだって言ったらきつと何か返してくれる。それはイジワルな台詞かもしれないし、アガレスさんのように難しい言葉か

もしれない。

それでもよかった。

温かい言葉をかけて欲しかった。

「無理しないで。僕はいつでも待ってる」

「うん、ありがとう」

そうやって最後に逃げ道を作ってくれるサンは本当にとても優しいんだと思う。

「聞いてくれてありがとう、サン」

にこりと笑って立ち上がった。

悩むのは後でもできる。

でも、今しか出来ないこともある。

「とりあえずライディーンに謝ってくるよ。すぐく……傷つけちゃったから」

「そう」

サンはとても悲しそうな顔をした。

「どうしたの、サン。すぐく悲しそうだよ」

「何でもないよ、ラック……気を付けて」

「うん」

サンの表情は少し気になったけれど、今はとりあえずライディーンの元に向かおう。

そして、ちゃんと謝るんだ。

先ほどの部屋まで足早に廊下を歩いていった。

ところが部屋にライディーンの姿はない。

ちようどそこにいた衛兵さんに聞くと、どうやらすでに神殿へ向かったらしい。

神殿、と言うことは……

「契約！」

急がなくちゃ。

城を出て、真直ぐに神殿への道を駆け抜けた。

日は完全に西へ傾いている。

長く伸びる影を見ながら神殿に飛び込んだ。息を整えながらステンドグラスでカラフルに彩られた床を探すが、地下への道が分からない。

「ああ、もう！」

確かこのあたりを杖でついてたような……

適当に床をぐんぐんと叩いていると、唐突に床がせり落ち始めた。どうやら当たったようだ。

目の前を真っ暗な空間が占めていく。目がなれると、やっと人影がぼんやり見えた。

「ライディーン！」

ところが、その空間にいたのはクラウドさんとじい様だけだった。

「ライディーンは？」

「今ちようど旅立ったところだよ。どうしたんだ、ラック」

しまった、遅かった。

「……さっきライディーンにひどいことしちゃったから謝ろうと思つて。でも間に合わなかった」

「そうか」

クラウドさんは隣に来てぽんぽん、と肩を叩いてくれた。

「帰ってきてから言うといい。きっとライディーンも許してくれる」

「ほんと？」

「ああ、本当だ。だから、訓練所に戻ろう。明日からまた訓練が始まる」

「……ここで待ってちゃダメ？」

「ラック、ライディーンはより上を目指す事を知っている。きっと君が訓練を怠ることを望んではないよ」

「分かった」

でもとても心配だった。

なぜか分からないけどすごく不安で、よくない事が起こりそうな気がした。

あの時と同じだ。

セフィラがジュデツカ城に乱入してねえちゃんが連れ去られたあの夜と

背筋が震えたが、だいじょうぶだと自分に言い聞かせて神殿を後にした。

SECT・22 リュシフェル

神殿からもう一度お城に戻って、王様に今回の事を報告した。

訳がわからないままただあったことを羅列しただけだったが、王様は何かを汲み取ってくれたようだった。

「お疲れ様、ラック。でも次はこんな事件にならないよう気をつけるんだよ」

「わかったよ。ごめんなさい」

自分ももうあんな喪失感を経験するのは嫌だった。

本ならコインを取られた事に対する罰はこんなものじゃ済まないだろう。毒気による精神不安定でコインを盗んだメルルと、実際加担していないルークにも謹慎が言い渡された。

過失でコインを盗られた自分に課されるものはもっと重はずだ。それでも口頭での注意に留める王様は、きっと自分を信頼してくれているんだ。

「さて、ライディーンシンのことなのだが」

「何か問題があるの？」

「いや、悪魔耐性も精神力も基礎戦闘力も問題ない。ありがとう、ラック。今この時代にレメゲトンの可能性が広がるのはとても心強い」

「ライディーンがやりたいって言ったんだよ。おれは何もしてない」
本当にそうだ。

あれは全部ライディーンの希望だ。

「ラック、君はもう少し自分の力を信じてもいい」
王様は優しく微笑んだ。

「彼が契約から無事に帰ることを祈ろう。君の時も、クロウリー伯爵の時もそうして来た。だから君も祈って欲しい」

「うん、祈るよ。心の底から祈るよ」

ライディーンが無事に帰ってくるように。

そして、また一緒に稽古する日が来るように。

その晩も夢を見た。

背に激しい痛みがある。激痛で手足ががくがくと震えた。目がかすむ。両手両足を拘束する鎖は絶望的に頑丈だった。動けない。

最後の視界に光が溢れた。

銀色の柔らかな光だ。

「黄金獅子の末裔」

聞き覚えのある呼び名で自分と呼ぶのは一体誰だ。

深く悲しいテノールの響き。

この声は知っている気がする。

「リュシフェル様！」

「ああ、リュシフェル様！」

周囲の大人がいつせいに跪いた。

ふわりと温かい風が揺れて、背の痛みが薄れた。

「確かに末裔の血」

同時に耳に響く甲高い音を立てて拘束していた鎖がはじけとんだ。轡も崩れるように無に帰し、自分の体は自由になった。

その体でふと立ち上がると、足元がぬるりとしていた。

ふと見下ろしたそれは、真っ赤な液体だった。

「リュシフェル……？」

目を開けた。

かすかに逆十字の傷が痛む。

初めて聞く名前に、魂が震えた。

「おはよう、ラック。さあ、朝食だ」

ヴィッキーが明るい声をかけてくれた。白髪赤目のシアも既に着替え終わっている。というか、この二人は既に早朝稽古を終えて

きたのだろう。

少し待って、と言ってから手早く着替えながらふと聞いた。

「ねえ、ヴィッキー。『リュシフェル』って、誰……？」

「リュシフェル、とは、お前それを本気で聞いているのか？」

「うん」

こくりと頷くと、ヴィッキーは信じられないといった表情でこちらを見た。

「リュシフェルは魔界で頂点に立つという堕天の悪魔だ。見た者はいないし存在自体も伝承にしか残っていないが、魔界を建造したのはそのリュシフェルだといわれている。この国で最も信仰されている悪魔なのだぞ」

「堕天の……悪魔？ 頂点？」

そういえばいつだったかライディーンがその名を口にした気がする。

夢の中で自分と呼んだ声の主はそのリュシフェルと言う悪魔なのか？あの魔方阵はリュシフェルを呼び出すために……？

「もっともリュシフェルと言うのはセフィロトの古代の発音なんだ。もと天使だから仕方がないといえば仕方がないのだが……グリモワールの古代語読みに直せば、ルシファだな」

「ルシファ?!」

その名には嫌と言うほど聞き覚えがあった。

呆然とした自分の前にひらひらと手をかざして、ヴィッキーは眉を寄せた。

「大丈夫か？ 何をそんなに驚いているんだ？」

「いや、だって……」

言おうとして、シアがいることに気づく。

「なんでもない」

「そうか？」

ヴィッキーは首を傾げたが、それ以上追求はしなかった。

ルシファ、と言うのは一般的にリュシフェルと呼ばれる墮天の悪魔らしい。それも魔界の頂点に立つといわれる超強力な悪魔だ。

あの悲しくも深いテノールの声はそのリュシフェルの声なのだろうか。

すると、いつも俺の中から天使ミカエルに呼びかけるあの声の主は

「気を抜くな、ラック！」

はっとするとヴィッキーの切っ先が自分の喉下に突きつけられていた。

「戦場では命取りだぞ！」

「はい！」

返事をしてまた試合に集中する。

ライディーンがレメゲトンになつて騎士団を脱退した頃から、訓練はさらに激しさを増していた。ブラックルビート漆黒星騎士団の何人かが戦地へ送られるのは時間の問題だという噂もからず鴉内では流れている。

本当か嘘か分からないが、志願兵の数が倍増したことだけは確かだった。

夜中、一人で屋上に出た。

紅の髪を思い出しながら静寂の中でつぶやく。

「アガレスさん」

盲目の老紳士が空に姿を現し、それを追うように金目の鷹が舞い降りてくる。

「学友の姿がないな」

「うん。ライディーンもレメゲトンになった。契約で魔界に行つてるはずだよ」

「そうか」

アガレスさんは唇の端に高貴な笑みを湛えた。

「相手は誰だ？」

「えと、確かレラージュって」

その瞬間、老紳士の表情が変わった。
こんなアガレスさんは初めてだった。

「用心せよ 幼き娘」

そして霞むように消えてしまった。

「あつ！ もう、アガレスさんはいつとも突然消えちゃうんだから！」
それでも、用心せよ、と言ったときの表情は頭の中に引つかかっていた。

それから何日間か千里眼の稽古を休んだ。

昼の訓練が厳しく、体力的な余裕がなくなってきたからだ。

そしてちょうど10日目の昼、午前の稽古を終えた時だった。

今日の夕方にはメルルとルークが謹慎を終えて独房から出てくる。
そうしたらまた話したいと思っていた矢先だ。

いつも笑顔のクラウドさんが血相を変えて馬を駆って鴉の宿舎にやってきた。

「ラック！ すぐに来てくれ！」

完全に鴉部隊の仲間に取り囲まれている時だったのだが、クラウドさんはお構いなしだった。

これは緊急事態だ。

とても嫌な予感がした。

やっとこなせるようになった馬術で馬を駆り、ますます人気のなくなった城下町のメインストリートを駆け抜けてパライソ・ゲートへと急いだ。

クラウドさんの口から飛び出したのは信じられない言葉だったから。

「ライディーンを……止めてくれ」

SECT・23 レラージュ

パラディソ・ゲートから脇目も振らず真直ぐに神殿を目指した。遠くから轟音が響いてくる。かすかに煙が上がっている気がする。

「ライディーンが悪魔に乗っ取られた。いまその力で暴れている。いま王都で彼を止められるのはラック、君しかないんだ」

「ライディーン……」

クラウドさんの言葉を後ろに聞きながら、馬から飛び降りた。驚いたクラウドさんの顔を尻目に、高らかに叫ぶ。

「アガレスさん、力を貸して！」

全身に加護がいきわたる。

着地と同時にヒトにはありえない速度で神殿に続く庭園の道を走り出した。

「レラージュ やはりな」

「分かったの？アガレスさん」

「奴は危険だ」

金目の鷹が横にぴったりと寄り添うように飛んでいる。

風を切る音を裂いて轟音が耳に届く。

「用心せよ 幼き娘 奴の武器は傷を腐らせる」

「分かった」

腰の小太刀を抜いた。

同時にざっと足を止める。

「ライディーン……！」

紅の髪が風に揺れている。

その剣士はふらりとこちらを振り向いた。

「もうやめろ。これ以上壊すな……！」

風が吹き抜けるほどに破壊された神殿の壁は瓦礫の山を作っている。

周囲には止めようとして振り返ちにあつた衛兵さんたちが幾人も

転がっていた。

遅れて追いついたクラウドさんを振り向きもせずに指示を出す。

「怪我してるヒト、避難させて」

「分かった。ラック、無理をしないように。私もすぐに戻ろう」

「お願い」

おそらく原因は紅の髪に見え隠れする、あの額に張り付いているコインだ。あれを破壊、もしくは引き剥がす事が出来ればきっとライディーンは正気を取り戻すはずだ。

漆黒の騎士服を纏った紅髪の剣士は長剣を両手で握り締めていた。あの独特の型を持つ剣技が撃退されたところはこれまでだったの一度しか見た事がない。

鷹部隊長のライガさんがそれこそ見たことのない剣術で討ち取ったのだ。

今の自分にあれほどの能力がないことは分かっている。

どうすればいい……？

「黄金獅子の末裔デスカ 珍しいデスね 老師父が味方とは」

ライディーンの口から出たのは聞いたこともないがハスキーな声だった。

アガレスさんもしゃがれた声をしているが、それは見た目と年相応の声だ。目の前の若い騎士から発せられるにはあまりにも不自然に乾いた声だった。

「えと、悪魔のレラージュさん？ よかったらライディーンを返して欲しいんだけど」

正直にそう言つと、第14番目の悪魔レラージュさんは高らかに笑った。

と言つてもかすれた声が細い隙間を通り抜ける空氣の音でしかなかったけれど。

「面白い娘デスね アガレス 入れ込みマシたか」

ライディーンの姿からこのかすれた声が出るのは許せなかった。

「返してくれないなら力づくでコインをはがすよ」

「いやはや 実に面白いデス」

ライディーンは ライディーンの体に乗っ取った悪魔のレラー
ジユさんは両手で剣を構えた。

つられるようにこちらにも小太刀を真直ぐに構える。

藍色の瞳から目を離さず、先ほどの轟音を思い出していた。

壁がめっちゃめっちゃに崩れているのは確実にレラージユさんのせい
だと思っいていいだろう。だが、その手にある武器はあの一振りの剣
のみだ。

あれで壁を破壊したのだとすると、いくらアガレスさんの加護が
あるとはいえとてもまともに太刀を受けるわけにはいかない。元の
力が違いすぎるから。

だっっておれの力は加護なしじゃ腕を振りほどけないくらいに弱い。
「恐るるな 幼き娘 臆せば敗北が待っている」

金目の鷹はばさりと翼を振った。

「うん、分かつてるよ」

切っ先に全てを集中した。

あの破壊力相手だと、受け流し損ねた瞬間負ける。力任せに受け
ることなど論外だ。

「レラージユさん。あなたの目的は何？ 何故ライディーンに乗っ
取ったりしたの？」

「目的 そんなものとうに忘れマシた 今は何かを破壊することの
みが 至上命題なのデス」

「破壊？」

「破壊の悪魔レラージユ。それが彼の名だよ」

戦闘の場に飛び込んできたテノールは、緊張の響きを取り込んで
いた。

視線はレラージユさんに据えたまま視界の隅で金髪を捕らえてい
た。

「地獄の業火を操るフラウロスや過去王家に楯突いたアスモデウス
と並んで扱いつらい悪魔の一人だと言われている。武器は傷を腐ら

せるといふ弓矢だ」

クラウドさんは何人も怪我をした衛兵さんを動かしたはずなのに、息一つ乱していなかった。

今までずっとあの笑顔の裏に隠されてきた凄まじい闘気が外に漏れ出している。王国で3本の指に入る漆黒星騎士団長ブラックルビー その名は伊達ではないのだ。

「クラウドさん、おれが囿になるよ」

小さく呟いた。

「アガレスさんの加護があるからいつもよりずっと強いよ。攻撃をひきつけて全部避けられると思う」

「ラック！」

「俺は経験が浅いから悪魔の懷に飛び込んでコインを破壊する技なんて考え付かないんだ」

「だからと言って君が」

「悪魔に切りかかれだなんて、生身のヒトに頼める事じゃないのはわかってる。でもクラウドさんしかないんだ」

鷹部隊長たかのライガさんはとても強く強い。今の俺じゃどうひっくり返っても太刀打ちできないくらいだ。それはよく知っている。

でも、その上司に当たるクラウドさんはもっと強いのだとヴィッキーがよく言っていた。流れるように美しい剣を振るうのだという。まだ見た事はないし想像もできないが、もしかするとアレイさんより強いかもしれない。

「お願いだよ、クラウドさん。ライディーンを助けていんだ……手伝ってくれる？」

小さな声で呟くと、クラウドさんは剣を強く握りなおした。

「仕方がない子だ。だが言葉には有無を言わせない強さがある。君には上に立つものとしての素質があるようだ」

「でも、無理しないでね。出来る限り注意をひきつけるから！」
そう言い放って地を蹴った。

数十日に及ぶ練習の成果を試す機会だ。

一気にレラージュさんとの間合いをつめながら大きな声で叫んだ。
「フラウロスさん！」

悪魔同時召還。

名を叫ぶと同時に灼熱の空気が襲ってきた。

「レラージュ 久しい」

灼熱の獣は自分の左隣に寄り添って駆けた。

クローセルさんの加護が効いているようで、熱さを感じても皮膚が焼ける感覚はなかった。

「人間を傷つけないで、悪魔だけ引き剥がしたいんだ。できるかな？」

「難解 だが興味深い」

灼熱の獣が吼える。

二人を同時に召還したらアガレスさんと喧嘩になるかと思ったけれど、意外とうまくいきそうだ。

もう一度小太刀をしっかり握り締めた。

「行くよ、アガレスさん、フラウロスさん！」

レラージュさんの間合い直前で地を蹴って空に飛び上がった。

フラウロスさんはその体を自分とは逆方向にひねった。

そうやって紅髪の騎士を挟むように打ちかかる。

「やああーっ！」

気合を込めて打ち出した一撃は、あっさりとかわされた。

着地したところにフラウロスさんの炎が襲い掛かる。

クローセルさんの加護を受けている自分にこの炎は効かない

ものすごく熱いけど！

体勢が崩れたところを炎に身を隠して、すぐ二撃目を打ち込んだ。

「甘いデス！」

悪魔の声と共に小太刀に重圧がかかる。

そのまま間合いの外まで吹っ飛ばされた。

アガレスさんの加護で何とか体勢を立て直し地面に叩きつけられることだけは免れたが、小太刀を握っていた手はじんじんとしびれ

ている。

「流石強い」

金目の鷹が呟く。

「ライディーンは元々強いからね。レラージュさんも強いや」

レラージュさんに乗っ取られたライディーンはフラウロスさんの炎を剣圧だけで吹っ飛ばしてしまった。

灼熱の獣はうなりながらその悪魔の様子を伺っている。

「でも、おれだって強くなっただ」

一息をついてから感覚を集中させた。

実戦で使うのは初めてだ。

練習ではすでに1分ほどの使用には耐えられるようになっていた。

千里眼

その瞬間、周囲の時間の動きがスローになった。

SECT・24 夢と現実の狭間

クラウドさんは千里眼を発動した事に気づいてくれたようだ。もちろん千里眼の事は知らないはずだから、詳しいことは分からなくても勝負に出た事くらいは確実に伝わったはずだ。

その証拠に一気に闘気が上昇したのが分かった。

向かいを見るとフラウロスさんの毛並み一つ一つの動きまで分かる。もちろんみるみるうちに体温が上昇していくのも 炎を吐くまであと2秒と少しと言ったところだろう。

自分が間合いをつめるまであと1秒はかかる。ぎりぎりだ。

それをコンマ2秒ほどで考えて、一足飛びに間合いに踏み込んだ。ここまですが1秒！

レラージュさんが大振りに降った長剣は自分の頭上で空を切る。ほとんど止まっているように見えるその太刀筋を見切るのは簡単だ。剣が空を切る音が大きすぎて頭に響く。

耳のレベルを少し下げて、目と触覚に集中した。

途端に全身が焼けるように熱くなる。

この状態で炎を食らったらずい！失神じゃすまない。

皮膚の感度をさらに下げ、視覚のみに集中した。

音のない世界。触覚のない世界。

まるで水の中を漂うような感覚で目の前で繰り広げられる世界を見据えた。

クラウドさんがこちらに向かってきているのを確認し、眼前に迫ったフラウロスさんの炎を避けるように空中に飛び上がった。

炎の塊がレラージュさんを包み込む……と思ったが、紅髪の剣士はまたも剣圧でその炎を両断した。

間髪いれず頭上から奇襲を仕掛ける。

強く両手で握った小太刀を、全体重をかけて振り下ろした。
剣がぶつかり合ってびりびりと腕が震える。

反動で地面に足をつく、すぐさま足を踏み出して小太刀を突き出した。

その隙を見計らったようにフラウロスさんの炎が迫る。

ごめん、ライディーン、熱いけど我慢して！
と思った刹那。

「まだ甘いデス」

ライディーンの頭上にくすんだ緑のフードをかぶった射手の上半身が現れた。

放たれた弓が炎と接触した瞬間、フラウロスさんの炎は瞬く間に白く変化した。

「！」

驚いた途端に集中力が切れた。

世界が目まぐるしく回りだす。

射手がこちらを向く。緑のフードの中は暗くてよく見えなかった。ただ、半袖の緑の服とそこから伸びる腕は、声よりずっと幼そうな印象だった。

きりり、と弓が絞られる。

やばい、避けなくちゃ！

思ったがめぐる速度の変わった世界についていけず、咄嗟に足が動かない。

「終わりデスね 黄金獅子の末裔」

勝ち誇ったような声が響いた。

まずい！

思わず小太刀を目の前に据えて身をすくめた。

ところが矢が飛ぶ前に、その射手の悲鳴が響き渡った。

「ぎゃあああ！」

「愚か者」

地獄から響いてきたフラウロスさんの声。

なんと灼熱の獣はその鋭い爪で、紅の髪の上に浮かぶ緑色フードの射手の顔を切り裂いたのだ。

続いてそのしなやかな肢体を躍動させてさらにその影に飛び掛った。

「！」

目の前で信じられない出来事が起こった。

何もない空間からずるりと射手の下半身が現れ、フラウロスさんは現れた射手の全身を完全に地面に拘束したのだ。

悪魔を魔界から引きずり出した？いや、支配を引き剥がしたというのか？！

いずれにせよこれは好機だ。

アガレスさんの加護を受けた全身を奮い立たせ、小太刀を右手で逆手に握った。

まだ支配が微かに残る彼の体は、まだ剣を離さず構えている。

「ライディーン！」

もう一度千里眼を発動した。熱い風が全身を支配する。

既にかかなりの負担が肢体にかかっていた。

これが最後のチャンスだ。

両手で掬い上げるような剣先を完全に見切つてすれすれで横にかわした。

靡いた髪が剣に触れて一房風に舞った。

そんな事気にも留めず左の拳を顔面に向かって突き出した。もちろん彼は軽く頭を傾けて避ける。

予想済みの動きに、逆手に持った小太刀を閃かせた。

頭を傾けた方向からの斬撃。

むろん峰打ちだ。

完全に決まると思った。

それが油断に繋がっていたのかもしれない。

自分の小太刀がライディーンの側頭部にヒットする直前に、緑色

フードのレラージュさんを取り押さえていたフラウロスさんの体が跳ね上がった。

視界の隅に白く変色したフラウロスさんの前脚が映る。
そこから白い煙が上がっている。あれは……凍らされた?!

炎を操るフラウロスさんにとって凍らされるという事は考えうる限り最悪の事態だ。

「フラウロスさん、魔界に戻って!」

意識をそらして叫んだ瞬間、腹部に打撃が加わった。

「ぐっ……は……」

感覚を最大限に広げた状態でのダメージは普段の何十倍にも増幅される。

両手が攻撃に向かいがら空きになった腹部にライディーンの剣の柄で衝撃が叩き込まれていたのだ。フラウロスさんに意識を移した一瞬の隙を突かれ、無防備にその攻撃を受けてしまった。

全身を激痛が貫き、体が後ろ向きに吹き飛んだ。

ゆっくり体が落下する感覚があるが、あまりの痛みに体が動かない。

受身を取る事もできずそのまま地面をすべるように転がっていった。

全身が痙攣しているのが分かる。

もう痛いのか熱いのか何なのか分からない。ただ自分の体が深刻なダメージを負っていて全く機能しないという事だけがかかるうじて理解できた。

目の前の景色がぼやけている。

微かにテノールの響きが耳に届いたのは夢か現実だったのか……

黒衣を纏った大人たちが自分を取り巻いている。

ああ、これはいつもの夢だ。

足元にぬるりとした血の感触を確かめながらゆらりとその場に立

った。

ところが黒いフードで顔も分からぬ大人は銀のブレイドをこちらに向かつて閃かせる。

「リュシフェル様の贅となれ！」

「その命でもって誓いとせよ！」

意味が分からない。

でも、刃物をこちらに向けた大人たちの殺気だけは敏感に感じ取れた。

このままじゃ、自分はこのヒトたちに殺されるだろう。

直感でそう感じ取ってくるりと銀のブレイドに背を向けた。

周囲は闇。

だがなぜか自分はある方向に駆け出した 誰かに呼ばれている気がしたから。

壁に行き着いたその闇の中には、さらに闇へと続く階段が口を開けていた。この先に自分と呼んでいるものがある気がする。

後ろから追いかけてくる大人たちから逃げるように、転がるように階段を下った。

気の遠くなるような逃避行の後、たどり着いた部屋には明かりが一切なかった。

それでもなぜか感覚に敏感に触れる何かがそこには存在していた。導かれるように手を伸ばすと、何かが指の先に触れた。

石か何かでできた台の上に丸い形状の薄い物体が乗っている。ひんやりとしたその感覚はなぜか心を落ち着けた。

手にとって握り締めた。

後ろから大人たちが叫ぶ声がある。

逃げ場がなかった。

……名を呼んで

突然頭の中に声が響いた。

声の主は分からないというのに、口が勝手に動いていた。

「グラシャ・ラボラス……」

目の前を暗黒の霧が包み込んだ。

SECT・25 破壊の終結

喉の奥から微かな呻きが漏れた。

これは自分の声が、それとも別のヒトの声なのか。

「……シ……ファ」

何も見えない。何も感じない。

その闇の中で、はつきりと自分の声がした。

「ルシファ」

その瞬間、世界に光が満ちた。

全身の感覚が戻ってくる。あれほど痛めつけられて動かなくなっていたはずだった手足がいとも容易く稼動した。

目を開けると、翡翠の瞳が近くにあった。

「クラウドさん」

「ラック！」

ブラックルビー

蒼白な顔の漆黒星騎士団長は一瞬だけ安心した顔をした。

が、その騎士の右腕は完全に白く変色していた。

一気に現実に戻ってきた。

自分の足で立ち上がる。動く手で、白くなったクラウドさんの右手に触れた。とても冷たい。

「ごめん、クラウドさん……痛い？」

「そんなことより君こそ」

クラウドさんがその言葉をいい終わる前に額がとても熱くなった。同時に握ったクラウドさんの右手が光を帯びた。

光に溶けるように、白く変色していた右手が少しずつ温かくなってきた。これでだいじょうぶだ。何故かは分からなかったが、自分の中に芽生えた力を何となく理解していた。

「ラック、これは……」

「待ってて。今度は負けない！」

まだ何か言いたそうな騎士団長のテノールを分断して、紅の髪

剣士へと向き直った。

頭上にレラージュさんが浮かんでいる。彼の藍色の瞳に光は灯っていなかった。

「獅子の末裔 貴様 何者」

驚愕したようなレラージュさんの言葉を完全に無視して左手を前に構えた。膝を軽く曲げ、肩幅に開いて右足を後ろに下げる。

クラウドさんからじきじきに習った、『空手』と呼ばれる古体術の構えだ。

アガレスさんのときとは少し違う加護が全身に満ちていた。

この感覚は初めてだというのに不自然なほど自然に自分になじんでいた。フラウロスさんのときのように内側のエネルギーが暴れだす感覚も、アガレスさんのときのように躍動する感覚もない。まして全く自由のきかなかったラーズの支配とも全く違う。

ただ、自分の手足が思い通りに動かせる。

まるで最初からこうやって自分の体を支配していたかのように。

「おれがレラージュさんをライディーンから引き剥がすよ。だから

……」

小さくそう呟いて、地を蹴った。

地面をすべるように相手との距離をつめる。

顔の横に剣をひいたライディーンは鋭い剣先を突き出した。

下がるわけに行かない。最小限の動きで一步踏み出して刃を避けた。頬に軽い痛みが走る。

そこへ凍てつく空気をまとった矢が迫る。

「フラウロスさん！」

とっさに叫んで加護を両手に集中させ、左手で矢を弾き飛ばした。右手は剣を握るライディーンの両手に押し付ける。

じりり、と肉のこげる音がした。痛みを感じないのか悲鳴も上げず、ライディーンは両手から剣を取り落とした。

もう一度両手に炎を纏う。

固まったように動かないライディーンの手を踏み台に飛び上がった。

た。

「レラージュさん、ライディーンを返してもらつよ」

目の前に迫った緑色フードの悪魔の両肩に炎に包まれた両手を押し当て、ライディーンの肩に足をつけて反対側に蹴り進んだ。

「クラウドさん！」

叫びながら、レラージュさんの両肩に全体重をかけた。ずるり、と空間から悪魔の全身が飛び出てくる。

二人重なるようにそのまま地面へと向かって落下していった。

しかし、地面に接触する直前でレラージュさんの姿が掻き消えた。バランスを失って頭から地面に落ちてしまい、そのまま自分は意識を失ってしまったのだった。

目の前が真っ赤に染まっている。

口の中がキモチワルイ。既に大量の血を飲み込んでしまったようだ。

酷使した手足は動かず、精神は完全に破壊されていた。

伏せた床が冷たい。絨毯だというのに真っ赤な液体を吸い込んでいるからだ。手も足も頬も髪もすべてが血の色に染まっている。

霞む視界の中映るのは、吹き抜けのホールに作られた全面の窓と長い階段

「愛しき子 全て忘れなさい」

優しく悲しいテノールが響いた。

ふと顔を上げると銀髪の子が微笑んでいた。

6枚の翼が闇に浮かびあがり、彫刻のように整った顔立ちからは深い悲しみが感じられた。

「忘れなさい」

白く細い指が額に伸びる。

触れた途端に額が焼けるように熱くなり、全身を雷撃が貫いたよ

うな感覚が襲った。

「ルシ……ファ……」

最後の呟きは闇の中吸い込まれるように消えていった。

ゆっくり眠りに落ちる感覚をそのまま逆になぞるように意識が浮上してきた。

眠っている意識はないのに全身の感覚がない。目を開けようとしたのに開かない。音は…… ころうじて鼓膜を揺らす波が感知出来た。「生きているのですか？」

「大丈夫だよ、ヴィツキー。でも、とても深刻な状態らしい」

「……一体何があったのですか、クラウド団長」

「それは私にも分からないのだ」

言葉は認識される事のないまま右から左へと流れていく。

「ライデーンは？」

その名前だけ微かに認識した。

少しずつ戻ってくる感覚は痛みと吐き気以外の何者も伝えない。

もう一度意識を手放しそうになりつつ、すんでのところでこらえた。体が重い。鉛のようだとかそんな月並みなものでは表現できないくらい動く気配がない。

自分が横になっていいのかたっているのか、何かの上にいるのか包まれているのか、そんな感覚もなかった。

「彼も何とか無事だ。ラックが命を懸けて守ったからね」

「そうですか」

安堵したような声に、とにかく自分の無事を伝えたいと思った。

それなのに、痛みと重圧に支配された体は動いてくれない。唯一、あんなに毛嫌いしていた左手だけがピクリと動いた。

「ラック？」

それに気づいたクラウドさんが近寄ってきた気配がある。

だいじょうぶだよ、そういいたいのに喉すらも自分の思い通りに

ならないのか。

肘から先、ちょうどラースがくれた部分だけがかろうじて動いた。それと視覚以外の感覚を頼りにクラウドさんを探し当てる。

温かいその手をぎゅっと握り締めた。

「ああ、よかった。大丈夫なんだね。そう言いたいんだね」

うん、そうなんだ。

「でも今はゆっくりおやすみ。ライディーンは無事だ。安心するといい」

優しく握り返してくれた手から温かい心が流れ込んできた。

全身が満たされていく。

痛みが少し和らいだような気がした。

「おやすみ、愛しい子……」

どこかで聞いた言葉を聞きながらも一度、今度は温かな気持ちで眠りについた。

もう夢の続きは見なかった。

SECT・26 挫けぬ魂

そこからの記憶はとても曖昧だ。

眠っているような浅い覚醒状態にあるような不思議な感覚の狭間を彷徨って、時に誰かの声が聞こえたりもした。

それは聞いた事のある声だったり、初めて聞く声だったりしたけれどももう忘れてしまった。

引き取ってくれたフォーチュン家でただほとんど眠っていた。

覚えているのは、レラージュさんの暴走から10日近く経った日のこと。

初めて自分の足でベッドから降りてよろけた辺りからだった。

「大丈夫？無理しないのよ」

重症だった自分を屋敷に引き取り、ずっと付き添ってくれていたダイアナさんが心配そうな顔で見ている。

それでも、2・3歩進むうちに歩く感覚を取り戻していった。

「うん、だいじょうぶ」

これまでもこんな事は何度もあった。

何度も何度も死線を彷徨って、その度たくさんのヒトに助けられて現世に帰ってきた。

自分はやっぱり相当幸福な星の元に生まれたいらしい。ねえちゃんがつけてくれた名前　ラック、という名前の通りに。

でもこんな風に死にそうになるまで戦ったと知ったら、またねえちゃんは怒るだろうか。

それとも生きていてよかったと喜んでくれるだろうか。

数歩進んだところでまたベッドに戻り、腰掛けた。

「ねえちゃんに会いたいなあ……」

「まだ無理よ、ラック。まずは回復しなくちゃミーナ様の元には行けないわ」

そう言いながらダイアナさんは髪をといてくれた。
ブラックルビィ

「漆黒星騎士団のヒトたちはどうしてるかな？」

「今も訓練所で一般志願兵の訓練に携わっているわ。ヴィッキーはよくここへ来てくれたのよ、覚えていないかしら？」

「んー……なんとなく」

「あと、可愛いカチューシャの女の子と小柄な男の子が来ていたわね」

「メリルとルークだ」

やっと頭が動き始めた。

コインを失くした事、探し当てた事、それからライディーンが悪魔との契約に失敗して暴走した事

「ライディーンはどうしてる？」

「彼もこの屋敷にいるわよ。あなたと同じ、ずいぶん長い間眠っていたわ」

「……会える？」

「ええ。少しだけなら」

ダイアナさんに連れられて、自分が眠っていた部屋からすぐの扉に入った。

真っ白なシーツに包まれて、紅の髪が広がっていた。

固く閉じられた瞼は不安を誘った。

「……ライディーン」

静かに名を呼ぶと、かすかに瞼が動いた。

「ライディーン」

今度はうつすらと目を開けた。

藍色の瞳にはわずかに光が灯っていた。

「ラック」

かすれるような声が喉から絞り出された。

ベッドの傍に跪いて、藍色の瞳をじっと見つめた。

「よかった、生きてた」

心の底からほつとした。

「ごめんなラック……俺、失敗しちゃったよ」

「そんなことない。ちゃんと生きてる」

契約は死の危険を伴う。悪魔に殺される者や、暴走してやむなく処分される者も多いのだという。

ライディーンはちゃんと生きてここにいる。

「……ゼデキヤ王が先ほどここにいらっしやったんだ」

「王様が？」

「まだその気があるのなら、レメゲトンの地位は残しておく。まだその魂が挫かれないのならもう一度契約に臨むことも出来る、って言われた」

「王様はライディーンを信頼してるんだよ」

「ゼデキヤ王はすごいな。あの人の目を見ると全て見透かされた気になるよ」

ライディーンは自嘲的に微笑んだ。

「ラック、俺はまた回復したら挑戦してみる。命ある限り」

「そう」

ライディーンはやっぱり強い。一度失敗してもまた立ち上がるこ
とができる。

きつとこの数日でたくさん落ち込んで、いろんな痛みに耐えて、
多くの事を考えたんだろうけれど。

最後にその結論にたどり着けるのは彼の強さだと思った。

「おれもがんばるよ。戦場にだって先に行く」

今ならアレイさんの気持ち少し分かる。同じ位置に立てるよう
になるまで待っている、と言ったときの気持ち。

逃がしてやる事は簡単だ。やめろって言葉も簡単だ。

でも、ライディーンは納得しないだろう。

サンに逃げ道を与えられた自分がそうだったように。

「ありがと、ラック。命がけで……助けてくれたって聞いた」
ぽつりと呟いた言葉に笑顔で答えた。

きつと理由はそれだけでいい。

強くなれるのかとか、自分に力はあるのかとか悩むのはもうやめた。

守りたいから。強くなりたいから。

ただ、それだけでいい。

ライディーンがもう一度目を閉じたのを確認してから、部屋を後にした。

3日後には登城し、王に謁見を求めた。

王様はまた書類に囲まれた部屋で迎えてくれた。

「今回の事は大きな功績だ。破壊の悪魔レラージュを撃退し、被害を最小限に食い止めた。衛兵にも死者は出ていない。ラック、君とフォーチュン騎士団長の功績だよ」

「でも、神殿はめちやくちやになっちゃったよ」

「建物はまた建て替えばいい。だが、ライディーン＝シンの命は何者にも代えられない」

王様はにこりと笑った。

「彼はきつとまた立ち上がり、国のために尽力してくれるだろう。今度は必ずレラージュを従えて」

「うん、そうだね」

きつとそうなるだろう。

強い心を持つ藍色の瞳の剣士は必ずまた立ち上がるだろう。

「あのね、王様。もう一つだけ言わなくちゃいけない事があるんだ」「何かな?」

「あの、おれの中にはもしかしたらもう一人悪魔さんがいるかもしれないんだ。前からおでこが熱くなる事があって、知らない声がしたりしてたんだ」

「それは以前、ファウスト女伯爵に報告を受けている」

「うん、それでね、最近夢を見るんだ。夢だから本当かどうかは分

からないんだけど、どうもそれはおれの過去らしい」

フラッシュバックの時に酷似した世界が夢の中には存在している。「その中に、天使さんなのか悪魔さんなのか判らないヒトが出て来るんだ。銀髪で、6枚翼があって……そう、ミカエルさんにそっくりなんだよ」

闇の中に浮かぶ銀の光は柔らかく温かった。

「夢の中でおれはそのヒトの名前を呼んだよ」

焦がれるように月に向かって、闇の中で痛みを耐えながら。

「おれと同じ名前だったんだ」

繰り返し繰り返しその名を呼んだ。

「あの悪魔さんの名前はルシファ、っていうんだ」

王様の顔色は変わらなかった。

でも、何かに耐えるように固く唇を結んでいた。

「ヴィッキーはリュシフェルって言ったよ。とても有名なヒトらしい」

「ラック」

王様はそこで割って入った。

「それはもう二度と口にしてはいけないよ。たとえファウスト女伯爵とクロウリー伯爵の前であつてもだ。そして、二度とその悪魔と話してはいけない」

金の瞳が黄金の煌きを呈した。

その威圧感に思わず声を失った。

「ねえちゃんもダメなの？」

「すまない、ラック。できる事ならそれはもう忘れて欲しい」

真剣な王様の顔はとても辛そうだった。

どうしたらいいんだろう。

忘れようと思って忘れられるものではないけれど、とても思い出したくて仕方のないものではない。

フラッシュバックの嫌悪感を思い出してぶるりと体を震わせた。

「分かった、もう言わないよ」

「ありがとう、ラック」

王様は険しい顔だった。

ルシファの名はあまり聞きたいものではないらしい。

ヴィツキーは魔界を作った墮天の悪魔だと言った。

夢の中のルシファさんだろうと思われるは悪魔さんはとても優しくかった。天使のミカエルさんと全く同じ姿かたちをして、同じ銀色のオーラを持っていた。

この夢は本当に過去なのか。

自分は本当にルシファさんと会ったのか。

いったい過去、自分に何が起きていたのか

本当は知リたかったけれど、王様が言うのならこれを突き詰めていくとあんまりいい事は起こらないのだろう。

忘れよう、と思った。

でも、深い群青の瞳のとても悲しげな視線だけは忘れられそうになかった。

SECT・27 ルーク・ハンバキア

それから一週間と待たず、自分は漆黒星騎士団の訓練に復帰した。
ライディーンはまだベッドから起き上がれず、フォーチュン家で療養の日々が続いているはずだ。

自分はもう完全に回復していた。コインも全部戻ってきたし、先日のレラージュとの戦闘で得たものは大きい。何より千里眼をいくらか仕えるようになった事は大きな自信に繋がっていた。

もう季節は夏真っ盛りだった。

久しぶりに足を踏み入れた訓練所では、第4期の志願兵が訓練を行っていた。

立っているだけで汗ばむ陽気だというのに、みな真剣に戦闘訓練を行っている。これまで武器を手にした事もないようなヒトたちが何日かの訓練でそう強くなれるはずもない。

それでも、志願兵たちの必死な様子は自分と重なった。

この国が好きで何かを守りたくて、少しでも力になればたと兵役を志願するのだ。

「強くなりたい」

何度も呟いた台詞は、今でも一番願う事だ。
だから、ここに帰ってきた。

最初にクラウドさんに挨拶した。

「元気になってよかった。もうあんな無茶をしちゃ駄目だよ。私がアレイに怒られてしまう」

「クラウドさんこそだいじょうぶだった？ 右手……一回凍ったでしょう？」

「大丈夫だよ、君が治してくれたからね」

金髪の騎士団長はいつもの微笑みを見せた。

「さあ、みんな待っているよ。早く戻って元気な姿を見せるといい

……もう君はレメゲトンであることを隠す必要もない。ありのまま、好きに皆と話しておいで」

「うん、ありがとう」

クラウドさんの居住を出ると、すぐ近くには馬小屋がある。

近寄ってみると、最初この場所に来たとき寄ってきてくれたヨハンそっくりな馬がまた嬉しそうに首を振った。

「おいで」

手を伸ばすとすぐによってきて鼻を押し付けてきた。

「ふふ、元気だったか？」

「元気になったようだな、ラック」

「あ、ライガさん」

振り返ると青いバンダナの鷹部隊長がいた。

「そいつが好きか？」

「うん。すごくかわいい」

「じゃあその馬はお前にやるよ」

「え、いいの?!」

びつくりして目を丸くした。

「ただ、もう少し後だな。今は夏だが、冬が来て、それも過ぎて春になる頃にはそいつも立派な大人になる。そうしたら、戦場へ連れて行ってやってくれ」

「ありがとう!」

ねえちゃんの弟のヨハンによく似たまん丸な目を少しだけ細めて、その馬は擦り寄ってくる。

「そのうち名前をつけてやるといい」

「うん!」

暑い時期が終わって、秋が来て、冬が過ぎた頃。

その頃には自分は王様に認めてもらえるだろうか。戦力として東へ向かう事を許されるだろうか……?

鴉部隊の宿舎に戻ると、ちょうど午後の訓練を終えたヴィッキーとシアに会う事が出来た。

「ラック！ もう大丈夫なのか？」

「うん、もう平気。ごめんね、心配かけて」

「いや、無事で何よりだ」

白髪赤目のシアはやっぱり無表情で、少し目を伏せただけだった。

「ねえ、メルルは？」

きよろきよろと見回して姿を探したが見当たらなかった。

ヴィッキーの表情が曇る。

「メルルは……」

練習後に汗を流して部屋に戻ってきたルークを捕まえた。

驚いた顔をした黒猫をそのまま屋上に引きずっていった。

ライディーンとよく稽古したこの場所で、黒髪金目の少年は穏やかに微笑んだ。

「ラック、元気になったんだね」

「……どこまで聞いたの？」

「レメゲトンの任務で大怪我したって。ライディーンはそれに巻き込まれたって言われたけど……本当は何があったのかよく知らない。大丈夫、話せなんて言わないから安心して」

ルークは以前より落ち着いた印象になっていた。

前ははじけるような元気を全身から発していて、小柄な体でちょこまかと走り回っている感じがあったのに。

「ねえ、ルーク。メルルが騎士団を辞めたってほんと？」

「……聞いたんだ。本当だよ。ついこの間、実家に帰った」

「何で?!」

ルークと一緒にいたいからって、がんばって騎士になったんじゃないのか。

もしかすると、もしかしなくても自分のせいなのか？

「大丈夫、ラックのせいじゃないよ」

その気持ちを感じ取ったかのようにルークは静かに言った。

「メルルは俺を信じてくれたんだ」

ルークがメルル、と呼んだ。これまではずっと「姫」と呼んでいたのに。

「俺はこれまで逃げてたんだ。いつかメルルは俺を追うのを諦めてくれるんじゃないかって。そうすればちゃんと身分の高い貴族と結婚して、一生幸せにめでたしめでたしってなると思ってたさ」

「メルルはずっと昔からルークが大好きだったんだね」

「ああ、俺はそれを知ってもいた……でも、それに答えることは今までしてこなかった。そうしてしまっただけもう戻れなくなると思ってた、逃げたんだ。故郷から遠く離れた王都の騎士団に入ってたんだ」

いくらか見ないうちにひどく大人びたルークは遠い目をした。

その眼差しはびっくりするくらい美しく澄んでいた。
「でも、それは間違いだった。メルルは俺を追ってきた。しかも、信じられないことに、俺はそれが　嬉しかったんだ」

「ルークもずっとメルルが一番大切だったんでしょ？」

きつと幼い頃から。

もしかするとメルルがルークを大切だと気づく前から。

ルークは自嘲気味に笑った。

「そうだよ。でも、メルルのように一歩踏み出す事が出来なかっただけだ。俺のせいでどれだけ傷つけたか分からない。それでもメルルは俺を見ていてくれたから」

「メルルはいつもルークのこと見てたよ。傍にいたいって、ずっと訴えてたよ」

若草色の瞳はいつでも黒猫の動きを追っていた。

傍から見ていても分かるくらい、全身でルークが好きだと言っていた。

「決めたんだ。俺が出世して、メルルを迎えに行くって。これまで

がんばらせてばっかりだったから、今度はおれががんばる番だ」

ルークは金の瞳を細めて笑った。

「いつか騎士団長になってメリルを迎えに行くよ。きっとそれならメリルの両親だって許してくれると思う」

自分には、身分とか世間の目とか貴族の制約とか、そんなものはぜんぜん分らない。レメゲトンの地位の高さとか、騎士団長の権限とか、貴族の上下も。

それは拘束する鎖のように重く人生にのしかかってくるものらしい。好きな相手と一緒にいられなかったり、なりたい職業に就けなかったりすることもあるだろう。

でも、全部どうにもならないことじゃないんだということも知った。

騎士団長を目指せる才能を持ったルークや、偶然レメゲトンである自分と出会う事が出来たライディーンは幸福なのかもしれない。

それでも彼らは変えようとする努力を知っている。

未来を見つめ、それを目指すだけの力を養っている。

「がんばってルーク。おれ応援するよ！」

「ありがとう、ラック。決まできたのはラックのお陰だ」

「？」

「あんな事がなければメリルが本音をぶつけてくれる事もなかったし、俺がメリルに気持ちを伝えることもなかったと思う」

「おれは何もしてないよ」

全部、二人が互いを思う気持ちがあつたからだ。

お互いが相手を「ひとつだけ」に選び、大切に思う事が出来たらそれはなんて素敵なことなんだろう。

「うん、すごく素敵だ！　いつかきつとメリルと一緒にいられる日が来るよ！」

「ありがとう！」

黒猫は微笑んだ。急に成長して大人になってしまった顔をして。

自分が強くなつてねえちゃんとアレイさんに会いに行くように。

ルークもメルルに会いに行くんだろ。

しかし、何かが引つかかった気がした。

自分とねえちゃんはお互いが一番大切なんだ。でも、ルークとメルルの関係はそれとは少し違う気がした。

守りたい、守りたい　傍にいて欲しい。

胸の片隅が痛む。

何か新しい感情が芽生えようとしていた。

SECT・28 めぐる季節

暑い暑い夏の日差しの中、訓練は続いていた。

自分はじきに鴉部隊からすの稽古に参加しなくなり、完全に鷹部隊たかと鷺部隊さぎの練習を行き来する生活になじんでいた。

それからもういろんなヒトに出会った。

誰に会っても、聞く事がある。

それは「なぜ騎士になろうと思ったのか」と言うことだった。

10人いたら10通りの答えがある。

それはとても興味深く、また、騎士と言う職業に必要な心の強さを見せてもらう機会でもあった。

充実した日々に、時は矢のように過ぎていった。

やがて風が涼しくなり、木々の葉が色づき始めた。

この頃から、苦しい戦況が噂で伝わってくるようになった。すでにトロメオで籠城を始めてから4ヶ月近くがたとうとしているのだ。それでも防衛ラインをカーバンクルまで戻すことはままならず、セフィロト国の攻撃をそれ以上進ませないだけで必死だった。

冬に向けた食糧の備蓄のため、食事の量が減っていくことで戦を感じ取り、たびたび訪れる街が閑散としていくのを見て心を痛めた。志願兵はすでに10期生までが戦地へ送られた。

ライディーンはまだ訓練所に姿を見せなかった。

それほどひどい怪我だったのか、それとも……

雪が姿を見せ始める直前、一度だけライディーンと会うことができた。

この戦の時に神殿を修復している余裕はないらしい。ジューデッカ城の一室を占いの部屋としてあてがわれたじい様のところへ近況を報告しにいく折、ちょうど同じ目的地を持つ紅髪の剣士と出会ったのだ。

久しぶりに見る藍色の瞳は、全く光を失っていなかった。

「久しぶりだな、ラック。少し髪が伸びたか？」

「何だよ、元気になったのなら顔くらい見せればいいのに！」

「……行きづらかったんだ。大口叩いたのに結局契約に失敗してラックを死ぬ目にあわせてしまつて。合わせる顔がなかった」

少年の声は落ち着いたトーンに変わっていた。

ルークといいライディーンといい、ほんの3ヶ月見なかっただけでこれほど変わるのだと驚いた。

「春になる前にもう一度レラージュと契約する」

ライディーンは包帯が巻かれている両手を握り締めた。

「今度は大丈夫だ。あんな奴に負けたりしない」

「その手、大丈夫なの？」

自分がフラウロスさんの炎で焼き付けた手だ。

「ああ。ずいぶんかかったが、もう前と同じように動かせる」

簡単に言つたが、きつとそれまでには苦痛のリハビリをこなしてきたはずだ。

「すごく胸が痛んだ。」

「ごめんね、ライディーン」

きつとすごく痛かつたはずだ。もしかしたらもう剣を握れないと絶望したかもしれない。

それでも、ライディーンはまた戻ってきた。

もう一度契約すると言つてくれた。

「何でお前が謝るんだよ。俺はすごく感謝してるんだぜ？ お前のお陰でここまで来られたんだから。この命が今ここにあるのはお前に助けてもらったからなんだから」

「おれは何もしてないよ」

これまで何度も繰り返した台詞をまた、繰り返す。

自分の無力さをかみ締めて、それでも前に進む活力にするために。
「ラック、お前はワガママなのか気を使うのか、自信あるのか消極的なのかよくわかんねえな。やっぱ面白い奴だ」

ライディーンは楽しそうに笑った。

が、ふとまじめな顔になってぽつりと言った。

「クラウド団長からお前の過去の話、いろいろ聞いたんだ」

「……そう」

自分の過去は別に隠していることでもないけれど、わざわざ話すことでもない。

「お前いろいろ苦労したんだな。何の苦労もせずグリフィスの名を手に入れたなんて言って悪かったよ」

「別におれは苦労したつもりはないよ。グリフィスの名が欲しいとは思わなかったけど、ねえちゃんと一緒にいられるなら貰おうと思った。おれはねえちゃんさえいればいい。それ以外は何もいらなんだ」

これは今でも揺らいでいない。

これからずっと一緒にいるため。隣に並んで戦うため。今がその準備期間なのなら、喜んでおれは努力する。

それでも今すぐにでもねえちゃんの元へ飛んで生きたい気持ちは全く変わっていないのだ。

でもそこにさらにたくさんの願いが重なっているのも事実だった。
「おれは3年間ねえちゃんと二人で暮らしてた。でもある日突然この世界に放り込まれちゃったんだ。最初はすごく戸惑ったしいやだった。でもね……」

たくさんさんのヒトに出会った。

大きな世界を知った。

「今はこの世界がとても好きだよ。壊されたくない。だから、たくさんある大切なものを守りたいんだ。そのためにおれはねえちゃんと離れても我慢する」

大切なものがひとつではなくなってしまった。

それはとても大変なことだけれど、とても嬉しいことだった。

「きつとみんなそんな風にして生きてるんだね」

ルークも、メルルも。

互いだけが大切だったらあんなに悩んだりしなかっただろう。

「おれはまだがんばれるよ。まだ強くなれるよ」

あの紫の瞳のイジワルで優しいヒトを見上げたときと一緒にだ。近づくと、藍色の瞳は遠ざかる。

懐かしく思っ
て思わずにこりと微笑んだ。

「がんばろう、ライディーン。一緒にこの国を守ろう!」

「……ああ」

ライディーンは複雑そうな笑顔に向けた。

そして少し目を逸らすと、ぼそりと言った。

「ラック、お前がいつも俺に映して見てる相手はいつたい誰なんだ?」

「え?」

「いや、何でもないよ」

ライディーンは少年の笑顔を見せた。

「さ、行こうか。ヴァイヤー老師が待っている」

「うん!」

ライディーンは一年で一番寒い時期が来ると同時に、契約に旅立った。

瓦礫に埋まってしまっている神殿地下になんとかスペースを見つけてじい様が魔法陣を描き、今度はおれもちゃんと見送る事が出来た。

黒い霧に包まれて魔界へ向かうライディーン。

その紅の髪が闇に吞まれるのを見届けてから、自分はまた訓練所に戻った。

彼はきつと自分が訓練を休むことなど望んでいないだろうから。
馬上で冷たい風は頬を裂くように撫でていく。

どんより曇る空を見上げて、毎日想う二人を灰色の空に描いてみた。

「ねえちゃん、アレイさん」

寒くなったけど、元気にいるかな。

怪我してないかな。

もうすぐ仲間が増えるよ。

ライディーンって言うんだ。まだヨハンと同じ年だけど、身長はアレイさんと同じくらいだよ。すごく強いんだ。

「会いたいよ……」

泣かないと決めた誓いが必要れば涙が流れていたかもしれない。

それでも身を切る寒さと戦いながら、心の痛みを押し込めていた。

SECT・29 戦地へ

ライディーンはなかなか帰ってこなかった。
不安はなかった。

アレイさんも最初の契約で3ヶ月かかったといっていたし、ライディーンが失敗するはずないと信じていたからだ。

そして、2ヶ月が経ち、今年最後の雪がジュデッカ城と訓練所を白く染め上げた。

外での訓練は中止になり、それでも凍えるような寒さの道場内で剣を振るっていた。

寒さに負けず練習を続けた中でもルークの伸びは目覚しく、ライガさんが驚くほどの上達振りだった。

「これならライディーンの抜けた分が埋まるな」

冗談半分で言ったライガさんは、ライディーンがレメゲトンになったことを知らない。

突然騎士団から姿を消したライディーンをいぶかしむ者もいたが、惜しむ声のほうが多かった。それだけ彼の才能は注目を集めていたのだ。

ライガさんは雪の降りしきる空を見上げ、ふと呟いた。

「あいつも今、何してるんだろうな」

その声で、なぜかどきんとした。

誰かに呼ばれたような、何かが届いたようなそんな不思議な感覚。

稽古後すぐにパレイソ・ゲートに向かった。

雪の中馬に乗るのはとても辛かったが、とにかくまっすぐ神殿跡に駆け込んだ。

「ライディーン」

白い雪の中、真紅の髪がふわりと揺れていた。

「おかえり」

「ただいま、ラック」

藍色の瞳が優しく微笑んだ。

待ち焦がれていた春が来た。

雪が溶け、空は青く澄み、緑が芽吹いて花は咲き乱れる。暖かな風は人々の心に安らぎをもたらすはずだった。

それなのに、東からもたらされたのはとうとうトロメオが陥落したという最悪のニュースだった。

いつもの書類に埋まった部屋で。

時折しか見せない非常に険しい顔をした王様は静かに告げた。

「ラック」グリフィス。レメゲトンとして戦地へ赴き、メフィアR「ファウスト、アレイスター」W「クロウリー、ベアトリーチェ」アリギエリの3名と共に軍と合流せよ。事態は一国を争う。精錬された力で持つて、トロメオを奪還せよ」

「御意」

跪いて、その命令を心に刻み付けた。

長かった半年以上のときが確実に自分を後押ししてくれる。

ねえちゃん、の屋敷ではすでに準備が整えられていた。

新しく採寸し、作ったばかりのレメゲトンの正装、新しくこしらえた皮作りの丈夫な籠手。

その全てを身につけ、見送るアイリスとリコリスに向かって微笑んだ。

「んじゃ、行ってくるよ」

「「お気をつけて」」

深く礼をした二人にくるりと背を向けると、馬車に乗り込んだ。

ブラックルビィ

漆黒星騎士団の訓練所に立ち寄った。

馬を変えるためだ。

「さ、行こうか、マルコ」

ヨハンによく似た面差しの馬ににこりと笑いかける。嬉しそうに首を振る癖は小さいときから変わらない。

鞍と手綱をつけた様はどこから見ても立派な戦馬だった。

「マルコ、か。どうしてそんな名前に？」

青いバンダナのライガさんが不思議そうに聞く。

「クローセルさんが、マルコシアスさんのことをそう呼んだ。だから、マルコシアスさんみたいに強くて優しくなれるように思っ
て、マルコにしてみた」

「そうか……いい名だ」

ライガさんは唇の端をあげた。

「気をつける。軍のいるカシオまではかなり距離がある。山も幾つ
も越えなくちゃなんねえ。戦場にたどり着く前に迷子になるんじゃないぞ」

「だいじょうぶだよ。おれ、目だけはいいんだ」

にこりと笑ってマルコの手綱を取る。

「行つて来ます！」

こっそり旅立ちたかったから、他のヒトには言っていない。

ライガさん一人の見送りで、自分は戦地に旅立った。

東の都トロメオが陥落したいま、戦況は最悪だった。

道中も家を捨てて西や南へ逃げる人たちの集団を見かけた。大きな荷物を背負い、女性や子供、老人ばかりが目立つ旅団がいくつも西を目指していた。

それを見るたび心が裂かれた。

自然と足は速まる。

数日の行程の後、ようやく現在軍が駐留するカシオに到着した。
トロメオのすぐ東に位置するこの都市は商業都市であるため、籠城には向かない。トロメオの奪還は最重要課題だった。

兵士の間を通り過ぎて、主要メンバーが揃うカシオの中心の屋敷に足を踏み入れた。

王都の屋敷のような煌びやかさはなかったが、古い歴史を持つ者だけに与えられる威厳がある。重層な建物の最奥で、作戦会議中らしい。

暗い廊下を通り過ぎて、大きな扉の前に立った。
やっと会える。

長かった、半年以上もの間ずっとずっと焦がれていた。

両側の騎士さんが扉を開けた。

目の前に、大きな円卓がある。

開いた扉の手前で跪いた。

「ラック・グリフィス、ただいま到着しました」

半年間ヴィッキーに叩き込まれた敬語が自然に口からすべり出た。顔を上げると、ずっとずっと会いたかったヒトたちがこちらを見ていた。とても驚いているような気がするのは気のせいなんだろうか。

立ち上がると、肩甲骨の辺りまで伸びた黒髪が頬にかかった。

悪魔紋章が刺繍してある漆黒のドレスと漆黒のマント　レメゲトンの正装だ。

今すぐにもねえちゃんに駆け寄りたかったけれど我慢した。

「ただいまより炎妖玉騎士団長、フォルス・レバーディア卿の指揮下に入ります。よろしくお願いします」

真紅の甲冑を身につけたヒトの前でもう一度跪いた。

これでやっと国のために戦える。

振り向いた時に紫の瞳と目があって、にこりと笑いかけた。

一通りの挨拶を済ませて部屋を後にした。

これで猫かぶりはおしまいだ。大きく息を吐いてから、一緒に部屋を出たねえちゃんの胸に迷わず飛び込んだ。

「やっと、追いついたよ。ねえちゃん」

「ラック……本当に大きくなって……！」

手の感触が懐かしくて泣きそうになった。懐かしく、甘い香りがあった。

「暴走した悪魔を取り押さえたそうね。フォーチュン侯爵から聞いているわ」

「うん。すぐがんばったよ」

遠い道のりだった。

でも、自分はそれだけ成長して、大切なヒトを守る力を手に入れた。

ねえちゃんにあてがわれた部屋に戻って、少し休んだ。

でも、ねえちゃんの傍を離れたりはしなかった。お茶を入れる間もずっと近くに寄り添っていた。

「もうどこにも行かない。ぜったいねえちゃんと一緒にいる」

そう言つとねえちゃんは穏やかに微笑んだ。

まるでルシファさんのように優しい微笑みだった。

「ふふ、ありがとう、ラック」

そして少し離れたところで不機嫌そうな顔をしている紫の瞳のヒトを指差した。

「ほら、あのでっかいヒトにも挨拶してきなさい。ずいぶんあなたのことばかり考えていたようだから」

「うん」

素直に頷いて、てくてくと長身の剣士の元へ向かった。

―― おわり ――

近づく、やっぱり紫の瞳は少し遠かった。

それでも今はピンヒールの靴だったから思ったよりも近づいていた。

「アレイさん」

半年振りに会う漆黒の剣士は、ぜんぜん変わっていなかった。

端正な顔も切れ長の眼に納まる紫水晶アメジストの瞳に灯る光も、記憶の中にあるままだった。

「やっと、追いついたよ」

戦地に旅立つアレイさんが、行かないでと言ってしまった自分に言った言葉　待っている。お前が自分で俺と同じ位置に立てるようになるまで。

それを頼りにここまで来た。

「遅かったな」

「仕方ないじゃん。おれは未熟者だったんだから」

「違うない」

「もう！」

久しぶりに会ったっていうのにやっぱりアレイさんはイジワルだった。

でもいいや。目の前にこのヒトがいるだけでとても嬉しいから。

そう思うと自然に笑みがこぼれた。

「阿呆面で笑うな。気が抜ける」

「いいじゃん、アレイさんに会えて嬉しいんだ」

正直にそう言うと、アレイさんは大きなため息をついた。

こんなに素直に話すのは久しぶりかもしれない。自分は考えた事がすぐ口に出てしまうほうだけれど、漆黒星騎士団ブラックルビではやはりそれなりに気を使っていたようだ。

「レラージュと戦闘したそうだな」

「うん、強かった。勝てないかと思ったよ」

「ひどい怪我をしたんじゃないのか」

「おれは平気だ。でも新しくレメゲトンになったライディーンにひどい怪我させちゃった」

フラウロスさんの炎で手を焼いてしまったのだ。

「でも、ちゃんとそいつを救ったんだろう？」

「うん、ちゃんと生きてた」

「なら何故そんな顔をする。お前は……よくやった」

ぼん、と頭に手を置いてくれた。

温かくて大きな手はじんわりと優しさを運んできた。

「ほんと？」

アレイさんが褒めてくれるなんて珍しかったから思わず聞き返してしまった。

「ガキにしてはな」

「ガキって言うな！」

むっとして唇を尖らせると、アレイさんは少し唇の端をあげた。予想していなかった微笑みに思わず心臓が跳ね上がった。おかしいな、何でこんなにドキドキするんだろう。紫の瞳から目が離せない。

久しぶりに会ったから緊張しているんだろうか。

いや、そんなことない。

まるで吸い込まれるようにアレイさんを見上げていた。

「何だ、ぼんやりして」

バリトンの声にはっとした。

不思議そうな顔が覗き込んでいる。

みるみる頬が熱くなるのを感じた。

「変な奴だな」

答えられない。何でだろう。心臓がすごく早くなっている。

アレイさんに聞こえちゃうんじゃないだろうか。

「どうした」

「な、何でもないよ」

思わず後ずさってしまふ。いま近づいたら心臓が壊れるかもしれない。

伸べられた手を避けるように一歩飛び退った。

「あ……」

傷ついたような顔をしたアレイさんに、慌てて弁解しようとする。
「違うんだ！ 嫌なわけじゃないんだ！ でも、なんだかすごく…

…」

触れられたい、触れられたくない。

見ていたい、でも見ていると恥ずかしくなってくる。

矛盾する気持ちが心の中で渦巻いた。

あんなに傍にいたいと思っていたのに、いざ目の前に現れたら心臓が壊れそうに拍動していた。

「すごく……」

初めて持った感情に名前をつける術を自分は持たない。

触れていいだろうか。

ドキドキしながら欲望のままに手を伸ばしてアレイさんの胸にそつと触れると、心臓の音が伝わってきた。

アレイさんの手が頬に触れた。

一瞬びくりとしたけれど、今度は逃げなかった。

「何でいままで平気だったんだろっね」

とても不思議だった。あれだけ近くにいて、あれだけ触れていてどうしてこれまで何も思わなかったんだろっ

でもそれでも今も 触れて欲しいと思う心は一体何なんだろっ。

「不思議だな。すごく…… 幸せなんだ」

温かい気持ちで全身を満たしている。

昔のヒトはこれになんていう名前をつけたんだろっ。

心が導くままに一歩近づいた。

じっと見つめた紫の瞳には戸惑いが映っていた。

それを払拭するためにぎゅっと抱きついた。その瞬間に、泣きそ

うなくらいに何かがこみ上げてきた。その全部をぶつけるようにま
すます強く額を押し当てた。

「いったいどうしたんだ」

困った声が響いていた。

それでも、アレイさんはぜんぜん嫌そうじゃなかったからすごく
嬉しかった。

背と頭に当てられた手が優しかった。

温かい腕に包まれて確信した。

アレイさんだけは特別だ

ライディーンに抱きしめられたときはすごく怖かった。抵抗でき
ないと思った瞬間に凄まじい恐怖が襲った。

でも、アレイさんの腕の中ではそんな事はない。

だってここは世界で一番安心できる場所なんだ。

「もうどこにも行かないで」

すごくワガママな言葉を言ってみた。

自分がそうするのはアレイさんにだけだから。

ねえちゃんにすら見せないすごくワガママな自分を受け止めてく
れるのはアレイさんだけだから。

「仕方ないな」

あきれたようなバリトンを聞きながら、ほんの少しだけアレイさ
んに向ける気持ちとねえちゃんに向ける気持ちが違うことに気づき
始めていた。

自分にはそれが何なのか分からなかったけれど、今は自分の中に
芽生えた気持ちと、大切なヒトと再会できた安心感でいっぱいだった。

目の前に迫っているのは戦争という現実 自分はこれからどう
していくのか。

未来は全く見えなかった。

この先に待っている最悪の結末をもしリュシフェルが知っていた

と分かっていたなら、この時自分はもっと真剣にその気持ちと向き合えていたかもしれない。

でもこのときの自分は幸せに包まれていて、何も考えていなかったんだ。

永遠なんて幻想だって、昔誰かが言っていたのに

．．．おわり．．．（後書き）

to be continued．．．

この物語は連作です。

【LOST COIN - head】 <http://ncode.syosetu.com/n3660c/>
【LOST COIN - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n3665c/>
【LAST DANCE - head】 <http://ncode.syosetu.com/n4082c/>
【LAST DANCE - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n4617c/>
【PAST DESIRE - head】（本作）
【PAST DESIRE - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n7899c/>
【WORST CRISIS - head】 <http://ncode.syosetu.com/n0921d/>
【WORST CRISIS - tail】 <http://ncode.syosetu.com/n0973d/>

順にお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6324c/>

PAST DESIRE -head-

2010年10月8日13時54分発行